

王のビレイグアカデミア

INANO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕がこうして再び生を手にできたのは

生きる意味を見つけられない僕に向けた

神様の優しさだったのかもしれない。

でも。

かっこよく死にたい、と思っていた僕にとって

新たな生を受けてしまったことは、きつと

“悲劇”だ。

目次

中学生編

立志	血掟	變櫛	変身	偏心	鰥寡	憚勿	惹起	跋濁	訣儘	珠譬
100	87	77	67	56	49	39	31	18	9	1

U
S
J
編

萌芽	縛霸	幕番	爆破	併雄	入学	入学ー戦闘訓練編	設定など	閑話	称辞	入試	从瑕
216	204	189	176	164	153		137		127	118	106

雄英体育祭編

心折

閃戻

入城

背信

競走

開会

個性

夢現

原声

赫醒

会敵

矛先

367

353

339

327

315

301

290

280

267

251

243

231

中学生編

珠譬

この世界には『喰種^{グール}』と呼ばれる化け物がいる。

喰種とは、人の姿をしていながら人を喰らうことでしか生きていけない生き物。

体内にRc細胞という特殊な細胞を多量に有しており、その細胞を蓄える^{かくほう}赫包という器官がある。

そして、赫包からRc細胞を体外に放出し、^{かくね}赫子という人体にはない器官を生み出すことができる。

赫子は硬化と軟化を繰り返しながら自在にうねり、血液のように流れ、歯よりも頑丈な硬度を誇る。

液状の筋肉とも例えられるそれは、普通の人間には対抗の手段がないほどに残酷な性能をもつ。

赫子抜きにしても喰種の戦闘力は高い。

身体能力が極めて高く、人間の4〜7倍もの筋力を有し、通常の武器では傷一つつかず、さらには自己治癒能力まで兼ね備えている。

では、人間は喰種に対して捕食の対象でしかないのかといえ、それも違う。

そんな喰種に対抗する人間の組織もまた、この世界には存在する。

対・喰種機関「喰種対策局」通称CCG。

CCGの捜査官は喰種からはハトと呼ばれ、人類の天敵・喰種の、さらに天敵と言える存在である。

捜査官に発見された喰種は、多くの場合、その場で駆除される。

だが、人間と同じように捕らえられる者もいる。

23区にある大型喰種収容所『コクリア』。

人を食らう怪物『喰種』を収監する場所である。

金木研は、かねきけん CCGの准特等として、そこにいた。

金木は、人であり、喰種でもある。

必然だったのか偶然だったのか、人としての生を歪められた青年は、半喰種でありながらCCGに籍を置き、なおかつ准特等という選ばれし階級にまで上り詰め、

先刻、喰種である笛口雛実ふえぐちひなみを救うため、その肩書きを捨てた。

(ヒゲ。僕は、君のように――)

(“誰かのために、命を懸けてみたい”)

その想いだけを胸に、金木は現在、死神と対峙している。

死神——有馬貴将。

化け物である喰種をさらに上回る化け物。

CCGにおいて最強の存在であり、金木にとっては父親に近い親しみを感じていた相手でもある。

金木はそんな彼を前にして、決意が鈍りそうになるのを自覚して思考を奮わせる。

『カネキ、あとでね』

先程、トーカからおくられた言葉を噛みしめる。

目の前に立つ死神・有馬を相手にした喰種は、ほぼ例外なく、死ぬ。だからこそ、現状において、最も残酷で最も慈しみに溢れた言葉だ。

金木に “あと” はない。

(でも、それでも、きつと僕は…。)

過去、何度も手合わせをしてきた相手だ。

目にも止まらぬ剣戟にも、どうか赫子で応じられる。

そして、何度も手合わせをしてきたからこそ、“チャンス”も理解している。

向かって左、CCGの死神・有馬の右目側。

金木はそこに赫子で一撃を叩き込み、有馬はそれを一見することもなく防ぎ切る。

だが、これこそが、この隙とも言えぬ刹那が好機……!

ここで生じるタイムロスを、次の一手につなげ——

ようとした金木の脚は2本ともスバリと切り裂かれた。

「まじめにやれ。」

ただ一言。

そう告げた彼の背後から、濃密な“死”を感じる。

僕だけじゃない。

トーカちゃんやヒナミちゃん、四方さん、アヤトくん……

みんな死んでしまう。

それは、駄目だ。

まだ、行かせちゃいけない。

「……まだ 駄目。」

——ぼくが まもる

全力で放った一撃は防がれ、有馬さんは新しいクインケを使い始めた。
そこからは記憶が定かじやない。

意識が戻ってはトんで、何回斬られたかも覚えていない。

斬られては再生し、また斬られ、もう痛みも感じない。

自分が自分の原型を留めないままにド口ド口に溶かされていくような、ある種おだやかな気分になる。

——トーカちゃんたち ちゃんと逃げられたかな…きつと大丈夫だよね……。

——もう いつか。

「…いや オイツ」

「……!?!」

「…もういつかじゃねえよ!…十分時間稼いだ、つてか?お役目十分と?…わかってんだろ?上で “なにか” あったつて。わかってんのに…このままやられちまっていいの

かよ?」

「ヒデ……僕……僕さ……君がいないと さびしいよ……」

「……ウサギか、お前は。…色々ゴタクならべて “死にたい” だの “消えたい” だの。……お前は生きる理由が見つからねーだけだろ。んなモンすぐ見つかるって。せつかく拾った命無駄にすんな。」

「ほら、もう歩けるだろ? 行けよ。カネキ、 “誰かのために命を懸ける?” 『かつこよく死ぬ』 “? だっけ?”」

「バアカ。あのときオレは、『お前と生きたい』と思つたんだぜ? 聴こえるまで言つてやる——」

「カツコ悪くても、いきろ。」

そのあと、僕は有馬さんに勝つた。

クインケを砕き、有馬さんは自分で自分の命を絶つた。

「隻眼の王」の真意を語り、僕に願いを託して静かに息を引き取つた。

でも、もうダメみたいだ。

薄氷の勝利だったんだ。

——もう僕の身体は…。

(ヒデ……君はさつき、最後になんて言ったの…?)

僕の身体は再生されず、そのままパタリと崩れ落ちる。

“新しい隻眼の王になれ”という有馬さんやエトさんの願いを叶えることも出来ず、ヒデの言葉を思い出すこともできず、

有馬さんの隣で、僕は、そのまま——
死んだ。

その赤子は一際大きな産声をあげて産まれてきた。

彼の母親は出産の間際になって容態が急変、麻酔も効かない状態に陥った。

なにかの拒絶反応のように急変した母親に対して、医師は当惑した。

「医師は「子どもだけでも」という切なる母親の願いに応えることしかできることはなかった。」

そして、その大きな産声を聞いて、産み落とした母親は微笑みながら逝った。

死の間際に聞いたその産声は、母親にとって命の奇跡を実感させる喜びに満ちた声だった。

しかし当の赤子にとってはどうだったのだろうか。

『赤ん坊が、大きな産声を挙げるのは、悲しく苦しいから泣いているのである』
暴力なき出産 / Leboyer, Fr・d・rick

訣儘

この世界には「ヒーロー」が実在する。

人口の約8割が「個性」という超常の力を手に入れ、その個性と共に生きる世界だ。

ある者は口から火を吹き、またある者は腕が8本もある。

それが当たり前で、人それぞれ違う能力を一括りに「個性」で認めてしまう世界。

しかし、そんな便利な個性も、公共の場で使用すれば違法となる。

そうした世界の法の下、

個性を使つて悪事を働く者を「ヴァイラン」、

個性を使つてヴァイランを排し、弱きを助ける者を「ヒーロー」と呼ぶ。

基本的に個性を公共の場で使用できるのはヒーローだけだ。

だからこそ、この世界において警察は「ヴァイラン受け取り係」と揶揄やゆされる。

警察は組織内での連携に重きを置いているため、個性の使用を許可していない。

では個性のなかった時代の警察と比べ、業務が楽になったかと言えば、さらに多忙を

極めるのが実態だ。

いかにヒーローが活躍していても捜査を丸投げにすることなどできない。

自由気儘に個性を駆使して犯罪を行う者を個性無しで追わなければならぬ。

どれだけ多くの人材がいたとしても、迅速な解決など到底不可能なのだ。

——そして、ここにも日々の業務に忙殺される警察官がいる。

「金木警部補！今朝捕まった銀行強盗のヴィラン……あれ警部補が追ってたホシですよね
!？」

「ああ。」

息を切らせて駆けつけてきた部下に溜息まじりに応える。

「警部補がずっと張ってたのに手柄は新人ヒーローが総取り、っておかしいですよ！」

家にも帰らず、何十日もかけてヴィラン予備軍として追っていたホシを、今朝、事件発生から10分もかからずにヒーローが捕らえたと聞かされた。

しかし、こんなことはもう日常茶飯事であり、誰が捕らえたかなど問題ではない。

そうは思いつつも、徒労感を感じてしまうのは職務怠慢にあたるだろうか。

「それより次の捜査だ。今朝のヴィランの拘留は任せてある。次こそ俺らで捕まえるぞ
！」

「…はー！」

儘ならないことなど、この世界にいくらでもあるのだ。

それでも、自分にできることは仕事だけだ。

仕事だけが唯一、自分を呪いから解放してくれる。

金木警部補と呼ばれた男は、紫煙しえんを燻くゆらせながら作業に没頭する。

「でも警部補、いいんですか？研くんに全然会えてないんじゃないですか？」

「…義母に預けてある。大丈夫だ。」

本当に心配そうに尋ねてくる部下に核心を突かれて、あまつさえそれを不愉快に感じていることを自覚する。

そんな自分に辟易へきえきしながらも、研のことを考えなくて済むように捜査資料に目を落とす。

研のことを考えると喪つてしまった妻のことを思い出し、当時、あろうことか我が子に憎しみを抱いていた自分自身を殺してしまいたくなる。

13年だ。

もう13年も経つたというのに、この呪いはタールのようにこびりついて離れない。本当に、儘ならないものだ。

金木研は、この世界で13年生きてきた。

“この世界で”というのは、金木研が転生者だからである。

普通に大学生として生き、ある日突然、人を喰らう化け物にされてしまい、大切な人を守るために戦い続け、そして死んだ。

そんな前世を持つ少年。

しかし、幸か不幸か、前世の記憶は現在失われている。

姿も名も、そして内に眠る力も記憶も、全て前世と同じ「カネキケン」であるが、今の金木はどこにでもいる13歳の少年だ。

これはそんな少年がヒーローになるまでの物語だ。

「研、たまには外で遊んだらどうだい？」

「いや、いいよ。僕、家で本読んでるのが好きだから。」

僕は祖母との2人暮らしで、父とは別居状態にあり、ほとんど会話がない。

祖母は穏やかな人物で、読書を好み、争いを好まない。

そんな祖母が好きだし、僕が生まれる前に他界していた祖父の蔵書を読み耽る日々にも幸せを感じてる。

僕には親しいと言える友達もおらず、外で遊ぶこともない。

ゆえにいわゆる「もやしっ子」然とした風貌だ。

そのことを揶揄うのも祖母くらいのものだけだ。

今時、僕みたいな草食系男子は珍しくないと思う。

「でもねえ……。そんなことじゃあ大事な人ができた時に守ってあげられないよ?」

少し悪戯っぽい顔で微笑みかける祖母の、この表情が好きだ。

僕にとって大事な人は、ここにしかない。

これから先、他に大事な人ができたとしても、僕が一番守りたいと思う相手はきつと祖母だ。

「大丈夫だよ!僕の「個性」知ってるでしょ?」

そう言って僕もまた祖母に自慢げな表情で微笑みを返した。

金木研、13歳。

個性／しんたいかつせい身体活性

筋肉の肥大ではなく、筋繊維の収束や腱の働きをコントロールすることで筋肉のバネを最大限に活かせる。

防御性能は常人と然程さほど変わらない。

そして、普通なら手術が必要なくらいの大きな怪我も再生することができる。

ただし、血液型が特殊で輸血は困難なので大量に出血すると危険。

「たしかに便利な個性だけど、危ないことしちやダメよう……さてと、珈琲でも飲む？」

「うん、飲む。ありがとう！」

また微笑みを一つ返すと、祖母はキッチンにあるミルを回し始める。

ミルが豆を砕く音とページを捲めくる音、挽いた豆の香り。

僕は、これが自分の幸せであり、この暮らしこそが守るべきものだ と確信してる。

(みんなを守る力なんてなくていい。この幸せが続けば、それでいい。)

13年前、つまり僕が産まれた時、母は死んだ。

出産直前に容態が急変して、まるで僕を産むのと引き換えるようにして死んだのだと祖母から聞いた。

『我が子のために命を賭せる、私の自慢の娘よ。だから研は自分のため、あの娘のため、そして人のためにしっかりと生きなさい。』と祖母は続けて言った。

父から母の話を聞いたことはない。

僕や祖母とも、必要最低限の会話しかしない。

いつか父についても祖母が言っていた。

『あの人は未だに受け入れられないのよ……。恨んじやいけないよ。』

『私は、あの人の儘ならぬ性格を難儀なんぎにも思うけど、それほどまでにあの娘を愛してくれたあの人を嫌うことはできないんだよ。だから、研も恨んじやいけないよ。』

祖母が言う「恨んではいけない」という言葉は、きつと世の父親のように僕と関わりを持つとうとしないことだけでなく、幼少期に向けられたあの眼のことを言っていると理解した。

この記憶が真実の過去なのか、それとも自分で作り上げてしまった虚構の記憶なのかは分からないが、父は産まれたばかりの僕に憎悪の眼を向けた。

父は、母の命を奪った僕を憎んでいたのではないかと思う。

これも聞いた話だけど、父は母の喪失を受け入れられず、たいそう取り乱したそう。死因不明というのも拍車をかけたのかもしれない。

取り乱す父に、医師は善意で「死因の究明をなさいますか？」と問い、暗に解剖を仄めかすその言葉に、父は激怒して拒否し、胸倉を掴んで詰め寄った。

一緒に病院に来ていた警察の上司の方が慌てて取り押さえたそう。

父と顔を合わす機会は多くないけれど、憎しみの込もった眼を向けられたのはその時だけ。

僕が物心ついてからの父は、決して態度には出さないが、僕を見ているように見ておらず、まるで自分を罰するかのように痛々しい濁りのある眼をしているように見えた。

憎悪の込もった眼を向けられたのも辛かったが、そんな父を見るのも痛々しくて辛かった。

僕は父を恨んでない。

ただ、きつとひとつの感情を分かち合うのは不可能なほどに、決定的に深い溝がある。僕も父もその溝を埋めようとは思わないし、それでいいと思う。

人は全てのことに正面から向き合うことなんてできない。

ただひとつ。

僕は、出生の瞬間に見た母の微笑みが忘れられない。

僕はあの時、なぜだかすごく悲しかった気がしている。

母の顔だって写真を見ているから知っているし、祖母から聞いた話のせいで、そう思っているのかもしれない。

母の微笑みすら子どもの僕が頭の中で作り上げた虚構の記憶なのかもしれない。

それでも僕は、漠然と自分の生に意味を見出さなきゃいけない気がしている。虚構だとしても、この記憶から目を背けることなんてできない。

自分の生きる意味を見つける。

それが、父から母を奪った僕が自分の人生に課した使命だ。

跋濁

11月の初旬、金木は自身が通う中学校の教室にいた。
現在は昼休み。

クラスメイトたちがはしゃぐ喧噪けんそうに一欠片ひとかけらの興味を向けることもなく、窓際の席で只々読書に耽ふけっている。

賑やかな若者のエネルギーと、発火の個性を持つクラスメイトがイタズラで個性を発動したことによって、教室内にはうだるような熱気が籠こもっていた。

「ごめん、金木くん。ちよつと窓開けてもいいかな?」

「あ。うん、どうぞ。というか僕が開けるよ。」

クラスメイトがパタパタと手で顔を仰ぎながら苦笑まじりに近寄り、金木もそれに少しの微笑みを浮かべながら応えて、窓を開ける。

少し風が強い。

例年より気温が低く、開花の時期を遅らせた金木犀きんもくせいの香りが、風に乗って運ばれてくる。

「おお、一気に涼しい！というか寒い!!金木くん顔が青白いけど大丈夫?!」
「僕が青白いのは最初からだよ。」

表情がコロコロ変わるクラスメイトに眉根を下げて微笑みながら返すと、そのクラスメイトは「たしかに!」と笑いながら、また喧噪の輪に戻っていく。

それを微笑みで見送ると、金木は本の続きのページに目を落とす。

物心ついた時から金木は他人と必要以上に関わらないように生きてきた。

クラスメイトとも付かず離れず、同級生らしい適度な距離感を保っていた。

そう、その日の下校時までには。

授業が終わり、帰路につく。

金木の周囲には、同じ学校の生徒たちが何組か歩いている。

新人のヒーローの話だとか、最強のヒーローは誰かだとか、どのグループでも、とかく話題になっているのはヒーローの話だ。

個性が紛れもなくアイデンティティとなるのが、この世界だ。

そして、どんな世界でも勸善懲悪は万人に受ける。

個性を存分に發揮し、悪人を懲らしめる“ヒーロー”という存在に、憧れを持たない者の方が少ない。

金木も例に漏れず、ヒーローには関心を持っている。

ヒーロー向きの個性じゃん！と何人かのクラスメイトに持て囃はやされたこともあるが、自分に務まるとは到底思えない。

関心と志望は違うのだ。

別段、他になりたい職があるわけではないのだが。

俯うつむきながらヒーローについての思考に没頭していると、ヒーロー談義に花を咲かせていた生徒たちから鋭い悲鳴が上がった。

「ちよ……おいつ!!あれ、やばくね?」

「……おいつーあぶねーぞ!!」

ハツと顔を上げる。

数十メートル先の、十字路の中央。

そこに、少女が歩道の途中で呆然と座り尽くしている。

そして、それに猛スピードで迫るトラックが映る。

信号は歩道が青、車道が赤。

つまりトラックの暴走。

四方から悲鳴が上がるこの状況で、金木は気がつくのと少女に向かつて走っていた。

周囲の人間は走る金木を啞然と見つめる。

そして、トラックの正面に躍り出た金木は、足で掬い上げるように少女を車線上から押し退ける。

ふと、少女の顔が視界の端に映った。

呆けた表情でこちらを見ており、1秒にも満たない刹那、少女と目が合った気がした。
…良かった、無事だ。

着地の衝撃で打ち身くらいはあるかもしれないが、それは勘弁してほしい。

ふと、そんなことを考えて、金木は知らず微笑んでいた。

そして、そのまま時速80kmは出ているであろうトラックの下敷きになった。

……。

なつかしい においがする…。

——どこだ…？…

どこにあるんだ……？

おいしそうな におい。

……

……あつた。

——…あぁ、おいしい。

まるで かあさんの てりやうりのような
やさしいあじがする…。

…？

かあさんのの…？

「……っ?!?!」

頭が割れるようだ。

鈍く、それでいて鋭い痛みだ。

形容しがたい痛みにも、金木は意識を取り戻した。

痛みを堪えながら、無意識に自分の体に視線を落とす。

血。血。血。

一面の血。

自分を含めて辺り一帯は血に塗まみれている。

まるで赤の濃淡のうたんのみで描かれた、一般人には価値のわからない高額な絵画のようで、

どこか混沌こんとんとした美しさがあった。

(なんだこれ…？血…？…誰の?)

ふと左に目をやると大きな破壊痕が残る壁と、トラックが見えた。

リヤドアはひしやげ、積荷が散乱している。

食肉業者のトラックだろうか、映画でしか見たことのないような大きな塊の生肉が、幾つかコンテナの中で吊るされているのが見える。

その塊ほどの大きさではないが、周囲にも生肉は幾つか散乱している。

自分の手元にも一つ転がっているのが分かった。

徐々に思考が鮮明になっていく。

(…っーそうだ…事故は!?!…僕はあのトラックに轢かれ…て…?…)

慌てて自分の身体を確認する。

しかし、傷が見当たらない。

血の海と表現するのが妥当なほどの出血であるにも関わらずだ。

少し貧血気味ではあるが、先程の頭痛も治まったようで、まったくの無事と言えた。

困惑する金木は、トラックの反対方向から、ふと視線を感じた。

そちらに顔を向けると、多くの同窓生たちが恐怖に彩られた目でこちらを見ていた。

金木が目を覚ます数分前。

周囲の人間にとって、暴走トラックから少女を救った少年は数秒の間だけヒーローであつた。

著名なヒーローは学生時代から逸話いっわを残す。

そして、その多くが「考えるより先に身体が動いていた」と言う。

金木の行動はそれと同じだったからだ。

走る金木を見て、誰もが、いや彼自身でさえ、あのスピードでも間に合わないと思つたに違いない。

その上で思考し、その身を挺てして少女をかばう。

これをヒーローの行動と言わずに何と言うのか。

だが次の瞬間、眼前の惨劇を見て、誰もが絶望した。

トラックは少年を跳ね飛ばし、吹き飛んだ少年の身体を轢き潰していく。

車体が人体を壊す音、舞い散る血液や肉片。

あまりにも酷い光景に、自己防衛なのか（人を轢いた車ってあんなに跳ねるのか）と場違いな思考に陥る者もいた。

先程まで自分たちが熱く語っていたヒーローという存在と、その根源たる自己犠牲の精神というものが、一步間違えばどういふことになるのかを理解してしまった。

あちこちで悲鳴があがり、誰もがその目を見開いて青褪める。

そんな阿鼻叫喚の地獄の中、やがて激しい衝突音がした。

十字路を斜めに横切って民家の壁に突っ込んだトラックは、コンクリートの壁を半壊させ、コンテナから積荷を撒き散らし、横転して停まっていた。

誰もが心の中で名も知らぬ少年の命を諦める。

あまりの惨劇に動ける者はいない。

その中には金木のクラスメイトもいた。

本の虫と呼んで差し支えない彼がヒーローのような行動をとったことに、そして今日の前に広がる悲惨な光景に、驚愕と恐怖で言葉が出ない。

だが、それでもクラスメイトたちは叫んだ。

「っ誰か!! 治癒の個性持つてる人! いませんかっ!!」

「誰でもいい! 金木を助けてくださいっ!」

金木とは特別仲が良いわけではない。

眼前には身も竦むすくような恐怖の光景が広がっている。

だが、身近な人間の命を諦めるような人間には断固としてなりたくないのだ。

彼らは周囲の人間に向けて必死の形相で叫びをあげる。

いつか金木にヒーロー向きの個性だと持て囃した者もその中にはいた。

ヒーロー向きだ、とは言ったがこんなことは望んでいない。

そもそも荒事など無縁とばかりに、ずっと本を読んでいる金木をからかうつもりで言っ

た言葉だ。

だから、…こんなことは、望んでいない。

そんな想いも彼らの必死の願いも虚しく、治癒の個性を持つ者は誰一人としていなかった。

彼らの表情に再び絶望が落ちる。

ならば救急車を——と顔を上げた時、信じられない光景が映った。

のそり、と。

金木が動いているのだ。

右腕と右脚はあらゆる方向を向き、夥しい血を流しながら這いずっている。

そのB級ホラー映画のような光景に、思わず息を飲む。

しかし、それでも、生きています。

希望と喜びで、すぐさま駆け寄ろうとした。

だが、その足は動かなかった。

金木は、手脚だけではなく肋骨や内臓も負傷しているであろうその傷で、よろよろと立ち上がったかと思えば、コンテナから飛び出した積荷の肉塊に齧りついたのだ。

ブチリと肉が千切れる音が聞こえて、小さな咀嚼音が聞こえる。

そして。

金木の肉体は再生していく。

捻じ曲がった腕や脚は嫌な音を立てながら正常な方向に戻り、細かい擦過傷も塞がっていく。

誰もが声も発さず、まるで行儀の良い観衆のように、その場に立ち尽くしてその光景を見守る。

固唾を飲んで見つめる観衆をよそに、金木の肉体はその損傷をみるみるうちに再生させていく。

観衆を恐怖が飲み込み、思考はどんどん不安定になっていく。

先程、少女を助けたヒーローの記憶はもう残っていない。

そして、観衆は金木の左眼に灯る赤い瞳を見た。

血溜まりの一带にあって、その瞳はこれこそが赤だと主張しているように爛々と輝く。

彼らの中で、英雄が怪物に変わった瞬間だった。

数秒の後、金木は瞳の色を失うと同時に、仰向けに倒れた。

しかし、誰一人として動ける者はいなかった。

「……化け物だ。」

誰かが呟いた。

ポツリとれたその言葉に、周囲の人間は自分が呟いたのかと思ってしまう。

みな内心同じことを思ったからだ。

誰もがその化け物を凝視したまま動けない。

どのくらいの間そうしていただろうか。

彼らが化け物と認定した少年は意識を取り戻した。

再び動き出した金木を見て、多くの人間が警戒する。

恐怖は少し薄れたようだ。

それでも彼を見る目が変わることはない。

化け物は、こちらを向き、自分たちを見て少し悲しそうな顔をした。

その顔を見て、ようやく人々の思考が現実に戻ってくる。

誰かが病院に電話を掛け始め、その声を聞いて、現実へと帰ってきた彼らは手分けしてヒーロー事務所や警察へと電話で事情を説明し始めた。

ほどなくしてヒーローと救急車が駆けつけ、少し遅れて警察がやってきたが、それまで金木に近づく者は誰一人としていなかった。

惹起

事件後、病院へと運ばれた金木は、医師の診断と精密検査を受けた。

途中、憔悴^{しやうすい}しきった様子で飛び込んできた祖母に事情を説明すると顔を蒼白^{そうはく}にさせていたが、元氣そうな金木を見て、いくらか冷静さを取り戻していった。

そして、現在は精密検査の結果待ちのために、待合室で祖母とともに自動販売機で買ったカップのコーヒーに口をつけている。

「…あら、美味しくないわね。このコーヒー。」

「うん、あんまり美味しくないね。」

顔を顰^{しか}める祖母に対し、金木は苦笑して応える。

「…あの、心配かけてごめんね。」

「孫の心配なんて毎日でもしていたいくらいよ。心配できなくなるより何倍もいい。でもね、無茶をしてほしいわけじゃないのよ？…自分の身体を大切になさい。」

祖母の切なくも優しい言葉に、「ありがとう」とだけ返した。

ほどなくしてアナウンスで自身の名を呼ばれた。

祖母とともに医師の待つ診療室へと向かう。

「金木くんの身体には異常は見当たりませんね。至って普通！健康体と呼ぶには些か貧弱ですが！普通のもやしっ子ですな。」

ガハハハと豪快に笑いながら、医師が告げる。

金木も祖母も、あまりにもあっさりとしていて拍子抜けしてしまった。

「今回は本当に個性に救われましたね。少々貧血気味ですが、身体の組織には普通に何の問題も認められませんでした。ただ、金木くんは個性の影響か血液型が『特殊型』でしよう？」

「ほかの特殊型の患者さんにも普通に勧めてるんですが、自分の輸血用にたまに貯血ちよけつしておいた方がいいと思いますねえ。幸い、うちの病院は貯血に適した個性持ちの医師がいます。金木くんの場合は、多少の怪我は普通に治せるでしょうが、大怪我や大病なんかで輸血できないと、普通に手術すら受けることができませんからね。」

この超常社会において血液型は大別して5種類に分けられている。

A、B、AB、O型という従来の分類に加え、特殊型という血液型が存在する。

特殊型といっても、ベースは従来の4種類と変わらない。

だが、例えばA型であっても個性の影響で血液中に特殊な成分を持っていたりする

と、特殊型に区分される。

輸血などの時に、同じA型の血液でも拒絶反応が出ることがあるのだ。

金木の場合、血液型はA B型だが、血中に特殊な成分を含むため、特殊型に分類されている。

この世界において特殊型は珍しいことではない。

だが、A型の特殊型同士なら輸血できるかといえば、それは不可能だ。

ベースの血液型が同じでも、特殊型は多くの場合、自身の血液のみしか受け付けない。だからこそ、貯血が必要になるのである。

個性のなかった時代は、自己血であっても、献血で募ったものであっても、血液は長期の保存ができなかった。

だが、個性がそれを可能にするのが、この世界だ。

もちろん、ヒーロー免許のように特別な資格が必要だが、病院などの医療機関はその認可がおりやすいらしい。

「これまでも何度か勧められてたんですが、どこか他人事のように考えてしまってます。貯血、してみます。」

「うん、普通にそれがいいね！まあ異常なしとはいえ貧血気味なので今日はやめときましょう。金木くんが来られる時に来て、受付で自己血の貯血って言えば、いつでも普通

にできるから。」

「わかりました。ありがとうございます。」

「はい、ではお大事に〜!」

金木は大事なかったことに胸を撫で下ろし、「フランクな医者だったね」と談笑しながら、祖母とともに病院を後にした。

「^と渡我さーん。^と渡我被身子さーん!」

2人が病院のロビーを出た頃、先程まで金木がいた診察室に新たな患者が呼ばれた。名前を呼ばれて診察室に入ってきた少女は、先程の事故で金木が救った少女だった。

金木と同じように病院に搬送され、別々に精密検査を受けていたのだ。

「渡我さんも身体に異常は見当たりませんねえ。至って普通の健康体！普通の健康優良女子！ほんのちよーつと内出血してるのと、膝が擦り剥けちやってるけど、全然問題なしー！」

「そうですかあ、ありがとうございます。」

「またもガハハハハと豪快に笑いながら告げる医師に対し、渡我被身子はニコニコと笑いながら応える。」

「ところで、私を助けてくれた少年は何ていう名前なんです？」

「お、助けてくれた少年に恋しちゃったのかな!? くうー、青春だね！普通に羨ましいねー！」

「楽しそうにサムズアップして応える医師だが、さすがに患者の個人情報と言わなかった。」

「渡我もしつこく追求はせず、病院を後にしたのだった。」

（普通普通うるさいお医者さんでしたねエ。）

（お名前教えてくれなかったからフルネームは分からないけど……）

（制服からして同じ学校だねエ——カネキくんっ！）

時間は事故が起こる少し前に戻る。

渡我被身子は下校中、横断歩道を渡りながら膝から血が出ていることに気づいた。

どうやら体育の授業中に擦り剥いてしまったようだ。

彼女は個性の影響で、血に強い執着心を持っている。

両親からは普通であれと抑圧されてきた。

だが、もう己を抑えるのは限界寸前だった。

(もう自分の血でもいいからチウチウしたい。)

そう考えた時には、もうしやがみ込んで膝の血を吸おうとしていた。

だが、それとほぼ時を同じくして後ろから大きな悲鳴が聞こえた。

ふと顔をあげる。

すると、眼前には大きなトラックが迫っていて、血のことも忘れて呆然としてしまう。

悲鳴もトラックの走行音も消えて、急に激しさを増した自分の鼓動の音だけが聞こえ

る。

身体はピクリとも動かない。

と、そんな彼女の身体に、突如、衝撃がきた。

衝撃がきたのは、トラックが迫る方向からではなく、真横から。

訳が分からないまま飛ばされていく視界の中で、ほんの一瞬、少年の微笑みを見た気がした。

微笑んだと理解するには短すぎる時間で、少年の姿は見えなくなつた。

そして、その代わりに鮮血が舞う。

まるでスローモーションだ。

血の一滴一滴まで見えるようで、渡我にとつてそれはもう幻想の世界のようだった。

大きな衝突音がしてスローモーションが終わり、アスファルトに背中から着地した。

そこでもうやく、自分が少年に蹴り飛ばされて助けられたことを理解した。

そして、このあと渡我は生涯忘れることのできない光景を見た。

血で彩られた一帯の中、少年の左眼を彩る より一層の赤。

周囲の赤を統べる王様みたいだ。

超常の社会でありながら普通を強いるこの混沌の世界で、これほど美しい光景に出逢

うことはこの先ないだろう。

渡我被身子は、カネキと呼ばれていたあの少年に恋をした。

憚勿

事故の翌日。

金木は「念の為に安静に」という医師の言葉通り、学校を休んで自宅にいた。

安静にしているとはいっても、そもそも身体に不調を感じていない。

それに、学校に行っても家にいても、やることはほぼ変わらない。

起き抜けにそんなことを考えつつも、せつかくの休みだと頭を切り替え、今日はベッドの上で本でも読んでいようと決意した。

そんな、いつも通りの日常をいつも通り謳歌おうかするという決意のもと、最近読み始めた本を読み進める。

今読み進めているのは、ヒーローの葛藤かつとちうとヴィランの苦悩、その両者の心象風景が対比されて描かれている話題作だ。

家族を殺され、ヴィランを憎むがあまり、法のもとで裁くことに限界を感じて殺人者へと堕ちていくヒーロー。

自由気儘に個性を使って悪事を働いていたが、ある日、自分のせいでヴィランに大切

な人を殺され、ヴェジラントとして人を救うことを決めたヴェイラン。

2人の主人公の分かりやすい対比と、痛々しいまでの心理描写が話題を呼んでいる。

そんな2人がどう交わり、どう変わっていくのか……

いよいよストーリーが終結に向かっていきそうな展開に、金木はページを捲る手を進めようとして……

——ノックの音が聞こえた。

「研、入るぞ。」

ノックの相手は父だった。

父は部屋に入ってくるなり、金木の部屋をキョロキョロと見る。

部屋に入ってきたのは、いつぶりだろうか。

そもそも、こうして父から会話を試みてきたのはいつぶりだろうか。

そんなふうを考えながら、金木は父に尋ねる。

「父さんだったんだね、てっきりおばあちゃんかと。どうしたの?」

「いや、…身体は大丈夫なのか?」

「あ、うん。もう全然なんともないよ。自分でもよく分からないんだけど、個性で治ったみたい。」

「そうか……」

金木は正直に言つて、自分と会話を試みる父に面食らつていた。だが、考えてみれば当然だ。

息子が事故にあつたと聞いて、無視するほど薄情な人間ではないのだ。自分を心配してくれていたことを素直に嬉しく思う。

「あまり無理はするなよ。お前は母さんに似て他人に優しすぎるところがある。」

「……うん、ありがとう。父さん。」

少しきこちなくも、二人は微笑み合う。

自分も父も溝を埋めようと思つていない——金木はそう考えていた。

だが、それは間違いだ。

父との距離の測り方が分からなかつた自分が、自分にそう言い聞かせて逃げていたのだ。

その溝を今、父は埋めようとしている。

ならば自分も歩み寄りたい、そう思う。

その後も、少し言葉を交わした。

数分ほどそうして実のない会話をした後、父は「仕事に戻る」と言つて出て行つた。父を見送つて、金木は一度だけ頬を緩めたあと、本の続きを読み始める。

そして、数時間後。

(これ…完全に何作か続編出るやつだ。)

一応、ストーリーは結ばれているが、根本の問題は何も解決していない。

続きが気になる終わり方に読了感があまり感じられず、金木はひとつ溜息をついて身を起こした。

(話題作だけあって、すごい惹き込まれる作品だったけど、続きいつ頃発売されるんだろ?)

せっかく学校を休んだのに読む作品のチョイスを間違えたな、と思う。

素晴らしい作品ではあるが、これは金木としては完結してから一気読みたい作品だ。

でも、続編が出たらすぐ買っちゃうんだろうな…と苦笑する。

時計を見やると、時刻は14時前。

朝食も昼食も摂らずに部屋に引きこもってしまったことに気づき、祖母がいるであろ

うリビングへと足を向けた。

「これ以上降りてこないようなら様子を見に行こうかと思っていたところよ。どうぞずっと本でも読んでたんでしょ？」

いつもの悪戯っぽい表情でリビングから祖母が声をかけてくる。

金木は笑ってそれを肯定しつつ、遅めの昼食の準備のためキッチンへと向かう。

金木家は、基本的に祖母と金木の二人で家事を分担している。

当番制ではなく、気がついたら気がついた方がやる、というスタンスである。

といっても、金木は学校もあるので、まあほとんどは祖母がやってくれる。

そもそもここは祖母の持ち家で、父は母と暮らしていた別宅に住んでいるため、ここには二人しか住んでいない。

だから、そこまで家事は大変ではないが、小学生の頃からそうしてきたので、金木の家事スキルは高い。

慣れた手つきでオムライスと簡単なスープを作ると、ダイニングで遅めの昼食を摂る。

食事を終わると、祖母がコーヒーマシンを淹れてくれた。

「父さんが心配して来てくれたよ。」

「…そうかい。」

そのコーヒーを飲みながら、テーブルで向かい合っている祖母にポツリと伝えた。もちろん、祖母も家にいたから父が来たことは知っているだろう。

それでも金木は祖母に伝えたかったし、祖母もまた金木が照れ臭そうにそう伝えてくれることを嬉しく思った。

翌日、金木は何事もなかったかのように登校した。

だが、教室のドアを開けた金木を見ると、クラスメイトは一様に目を逸らした。

その僅かな動作で、金木は彼らの心中を察した。

自分が轢かれた後のあらましは聞いている。

個性の影響とはいえ、化け物じみた肉体再生を目の当たりにした生徒は気味が悪いだろう。

父との関係が少し改善できたと思っただけに、少しだけやるせない気持ちになる。

だがまあ、普段から関わりが薄いクラスメイトとの関係が、さらに希薄になったただだ。

イジメに発展しなかっただけマシだ、と金木は自分を納得させた。

幸いもうすぐ冬休みで、進級もすぐだ。

関係の改善にやつきになることもない。

そうして、クラスメイトと一切会話することなく、学校復帰1日目は終わった。

帰り道。

少し寂しそうに歩く金木に黒塗りの車から声が掛けられた。

「研、今帰りか？家まで送ってやるから乗りなさい。」

声をかけてきたのは父だった。

職務中だろうに大丈夫なのだろうか、と苦笑しながら金木は車へと乗り込んでいった。

車内は冬だというのに暖房もついておらず、先程まで吸っていたのだろう煙草の匂いが漂っていて、父の車だなあと感じる。

少しだけ車を走らせたところで、「ちよつとコーヒーでも飲んでくか？」という父の提案にのつて、少し家から離れた喫茶店へと場所を移す。

祖母も金木もコーヒー好きということもあつて、たまに二人で喫茶店巡りのようなことをしているが、初めて入る喫茶店だった。

店内は程よい暖房が効いていて、焙煎した豆の香りとジャズの音色がゆるやかに流れている。

純喫茶然とした雰囲気、金木は穴場を見つけたと心の中でサムズアップを父に贈る。

注文したブレンドコーヒーを口に運びつつ、父は少し目を泳がせながら口を開いた。

「……実は、今日は研に伝えたいことがあつて、通学路で待つていたんだ。」

その言葉に金木もカップを置いて、父の顔を正面から見据えて相槌を打つ。

「今まで……、すまなかつた。」

「…研も薄々気づいていただろうが、俺はお前のことを少し避けていた。実の息子なのだ。何を言つても言い訳にしかないし、この謝罪ですら俺の自己満足さんげの懺悔ざんげでしかないが——」

父の苦しい謝罪を、金木は右手をかざして止める。

「ストップ！ 父さん、謝るのは僕も同じだ。父さんと距離をとつたのは僕もだ。」

「…おばあちゃんが昔言つてたんだ。父さんは母さんを大切に思いすぎて、周りが見えてなかつたんだって。だから、僕はそんな父さんを恨んでない。」

「いや、だが…」

「そんな謝罪の言葉なんかより、もつと話したいことがあるよ。今日あつたこととか、おばあちゃんと話したこととか、最近読んでいる本のこととか、父さんに伝えたいこといっぱいあるんだ。それに母さんのことも、もつと知りたい。聞きたいことだつて山積みだ。」

父の言葉を遮つて、困つたように眉を下げながら金木は微笑む。

そんな金木を見て、父は心にこびりついて蝕むしばんでいた呪縛むすばが解けていくのを感じた。

ああ、自分はなんて情けない父親だ。

本来なら父親を名乗ることすらすべきではないというのに、この子は自分を父親であり続けさせてくれる。

親がいるから子どもが生まれる、だが同時に子どもがいるから親でいられるのだ。

なんと立派に育つたことか。

もうすでに上がらないが、義母には本当に頭があがらないな。

そんなことを思い、一筋頬に涙がつつた。

涙を流す父を見て金木は少し慌てたが、父はただ一言「ありがとう。」と、深々と頭を

下げながら言った。

次に顔をあげた父は憑き物が落ちたように朗らかに、「母さんの話をしようか。」と笑った。

「母さんも俺も、昔はヒーローをやってたんだ。」

母と父の話は、そんな言葉から始まった。

鰥寡

今から20年以上前、金木の父・金木かねぎ 啓示けいじがまだ20代だった頃。

彼はヒーローとして活躍していた。

シンプルな肉体強化の個性を用いて、日々ヴィランと戦っていた。

ある大規模な爆発を伴う災害現場で、彼は人々を治療している女性のヒーローと出会った。

彼女は細胞を活性化させる個性を持ち、その個性で、負傷した人の治療にあたった。

まだ20代にもなっていないのでは？という幼さでありながら、その姿はまるで女神のようで、彼はその姿にしばし見とれてしまった。

それが、のちに彼の妻、つまり金木の母となる女性との出会いだった。

彼女の名は細包さいほう 清晴せいせい。

それ以降、現場でたびたび顔を合わせるようになった二人は互いの距離を縮めていった。

だが、ある事件で、彼女が決して軽くない怪我を負うほどの激しい戦闘を経て、ようやく彼が拘束したウイルスを彼女が治療をしたことで、口論へと発展してしまふ。

「なぜウイルスを治療する必要があるんだ！君をそんなになるまで傷つけたヤツだぞ！？」

そう激昂する彼に向かって、彼女は悲しみを多分に含んだ微笑みを浮かべて応えた。「命は命ですから。」

その言葉と顔にハツとさせられたが、それでも、納得などできない。

そんな彼に向けて、彼女はなおも言葉を紡ぐ。

「私の個性、知ってますよね？『細胞活性』さいぼうかっせいです。今は怪我人の治療のために個性を使っています、少し前まで私はこの個性を戦闘に使用していました。」

「細胞の活性は何も治療だけに使える個性ではないんです。触れなければ発動できませんが、触れることさえできれば私の個性は人体を破壊できます。」

いつもの悲しみを含んだ微笑みではなく、感情の込もらない瞳に少し背筋が冷える。

「ウイルスは倒すもの。ヒーローはウイルスを倒すための存在。強敵を相手にする時は

個性の手加減も出来ませんでした。そうやって来る日も来る日もヴィランを倒しているうちに、すごく悲しくなりました。」

「私の個性は人を壊すことしかできないのか、って。……ヴィランを倒すことはもちろん必要です。でも、罪を犯した人間でも命は命なんです。ヴィランを更生させることだつて必要なんです。」

「…私ね、ヒーロー辞めてカウンセラーになろうと思うんです。」

そうやって何かを振り切るように笑った彼女を見て、何も言えなくなってしまうた。

しばらくして、彼女は宣言通りヒーローを辞めてカウンセラーに転職した。

個性に悩む子どもたちや、災害や事件で心に傷を負った患者を癒し、そしてヴィランの更生に努めるその姿は、彼にとつてはさらに眩まぼゆく見えた。

だが、彼はヒーロー業に忙殺されていた。

彼女に会いに行く気概もそんな暇もなく、ただ遠巻きに彼女を何度か見かけただけ。

そんな風に日々を過ごしていると、いつの間にか彼女と最後に言葉を交わしてから2年の月日が経過していた。

そんなある日、彼はヴィランを追い詰めすぎてしまう。

追っていたヴィランが、目の前で自ら命を絶ってしまったのだ。

涙をボロボロと流しながら「お前のせいだ」と笑って死んでゆく。

そのヴィランの姿が頭から離れず、彼の心は引き裂かれ、ノイローゼになってしまった。

そんな彼を見かねた上司が連れて行ったのが、彼女のいるカウンセリングサロンだった。

「事情はお聞きしました。」

「こんな形になってしまいました。私はあなたと再会できて嬉しいです。」

慈愛を感じさせるその優しい笑顔に、彼は年甲斐もなく涙を流した。

実は、彼は2年前のあの口論のあと、納得がいかず、先輩ヒーローに愚痴った。

その先輩に教えられたのだ。

彼女が昔、個性で倒した覆面のヴィランが、実は彼女の婚約者だったと。

そして、治療中に亡くなってしまい、彼女もまた心を病んでいたと。

それで治療にのみ個性を使うようになったのだと。

自分と同じような境遇にあつて、いや婚約者が相手だったのだ、もつと苦しかったに違いない。

だが、彼女はそれを嘆くだけに止まらず、自分のやるべきことをちゃんと見据えて、今こうしてまた人を救っている。

あまりに眩しくて、自分が霞んでしまいそうだ。

「君の言う通りだった。…命は命だ。俺は…ヴィランを倒すのがヒーローだと思っていた。でも…違った。ヒーローは……人を傷つけるだけの人間でも、傷つけられるだけの人間でもない。人を傷つけようとも自分が傷つこうとも、人を救ける人間だ。」

数ヶ月にわたつて、二人はカウンセリングを重ねた。

そして、彼はやつと過去と決別し、前を向くことができた。

カウンセリング初日に自嘲気味に吐いた言葉だが、真実だったと思う。

人を救ける人がヒーローだ。

人を救けるためには、敵を倒すのも必要だ。

だが、目的を履き違えたヒーローは、ただヒーローという肩書きを持つているだけに過ぎない。

「ヒーローを辞めても、個性を使わなくても、君は俺にとってヒーローだ。」

最後のカウンセリングの日、彼はそう言って笑った。

そして後日、ヒーローを辞めて警察官となった。

もう個性を人に向けて使う気にはなれない。

それに、自分ではどうしても勝てないヒーローが目の前にいる。

今の自分は、この人を守ることに全力を尽くしたい。

そして、二人は夫婦となったのだった。

「…と、まあ馴れ初めはこんな感じだ。」

照れ臭そうに話し終えた父に、金木は微笑む。

自分の個性のこともあり、両親の個性のことは知っていたが、両親ともにヒーローをやっていたのは初耳だった。

母のことも父のことも、初めて聞く話ばかりだ。

だが、金木は二人の生き方を素直にかっこいいと思った。

少し、自分の生きる指針が見つかった気がした。

「ありがとう。母さんのこと知れて良かったよ。父さんの若い頃のことも。」

そのほかにも、子どもができたのは結婚して何年か経ってからだとか、最初は祖母に結婚を反対されたのだとか、辺りが暗くなるまで二人は会話を楽しんだ。

そして、店を出て家に向かう車内で、父は金木に向けて最後に言った。

「母さんは俺を含めて多くの人間の命と心を救ったヒーローだ。そんな母さんの子なんだ、きつと研は強くなる。」

「…ありがとう。ヒーローになるかどうかは分からないけど、僕は母さんと、父さんの子だ。人を救われる人になるよ！」

「父さんの」という部分で少し照れ臭そうに自分の目を見つめてくる我が子を見て、

清晴にも研にも救われてばかりだと苦笑した。

(…清晴、きつとこの子はヒーローになるよ。)

偏心

春、中学3年生になった金木は、新たな教室で途方に暮れていた。

例の事故以降、学校で金木に近づく者も話しかける者もいなくなつた。クラスメイトが変わつた今も、それは変わらない。

おそらく話しかければ無視されることはないだろうが、金木はその努力を諦めていた。

ゆえに金木は空気と等しく、今となつては奇異な目で見られる者もない。

だが、クラス替えが行われてわずか2日。

その2日間ずっと、授業中も休み時間の間も、ある一人のクラスメイトからガン見され続けていた。

睨んでいるわけではない、ニコニコと笑顔で見られ続けているのだ。

話しかけてくることもなく睨んでいるわけでもないのに、気にしないようにしているが、さすがに理由が気になる。

(えっと……トガさん? だつたっけ? ……なんでずっと見てくるんだろ……?)

本を読みながら、チラリと自身を見つめる渡我を見やると、必然、目が合う。

渡我は目が合うと、鋭い犬歯を見せながら満面の笑顔になる。

髪型の特徴も覚えていたし、誰かが話していた噂話も耳にしているので、彼女が事故の時の少女だということは、さすがにもう分かっている。

だが、この見つめ続けられるという状況に、どう対処していいのか分からない。

(…こういう時、どうすればいいんだろう…)

ちなみに余談だが、新しいクラスメイトは金木を恐れてはいない。

事故のことは聞き及んでいるが、実際に見たわけでもないのに気味が悪いと言われているピンとこないのだ。

前学年から同じクラスの者もいるが、事故の現場にいた者は新しいクラスにはいない。

では、なぜ金木との間に壁があるのかと言えば、そもそも読書ばかりして人を寄せ付けないオーラを発しているばかりか、渡我がやたら熱視線を送っているからである。

金木に話しかけようとするやと渡我から殺気を感じたという者もあり、ひとまず2人には関わらないでおこう、というのが、新クラスになって2日目にして誕生した暗黙のルールであった。

ルーラー 「金木と渡我に関わるな」

帰り道、金木はまたも途方に暮れていた。

30 mほどの距離を空けて、後方から視線を感じるからだ。

(今日は下校中もついてくる……………本人にやめてほしいって直訴した方がいいのかな？

…いやそれは……………うーん。)

……………よし、撒こう……!

そう思うが早いか金木は個性を発動し、パルクールのような動きで路地裏へと姿を消した。

渡我はその動きを見切れず、あえなくほんの1秒で金木を見失ったのだった。

「……………まで来れば大丈夫かな？」

登下校のルートから大きく離れた暗い路地裏に金木はいた。

正直ここがどこか把握できていないが、まあだいたいの方角は分かるし、迷うこともないだろう。

(トガさん……………どう対応すればいいんだ……………)

女の子に見つめられて逃げる、という男としての意義を問われそうな自分の行動を少し情けなく思いつつも、明日以降の対応について考えると、さらに頭を抱えたくなくなってしまう。

“あの事故のお礼が言いたいけど話しかけづらいただけ”

それが、学年上位の学力を誇る秀才にして、絵に描いたような草食系男子でもある金木が導き出した渡我の行動原理だ。

(いや、待てよ……………)

ならばこちらから、「あの時は蹴飛ばしてごめんね」と言ってやればいい。

そうだ、簡単なことじゃないか！

そしたらトガさんだってお礼が言えてスッキリするはず！

明日への希望を見出した金木は、意気揚々と帰り道のルートに戻ろうとした。

が、少し離れた場所から聞こえてくる不穏な声に足を止めた。

「オイゴルア！このっ！程度でっ！！捕まえるとかぬかしてんじやねえぞっ！！オラア！」
「ツぐー……つつ……うあー！」

明らかに事件の匂いがする声。

金木は個性を発動して気配を抑えたまま路地の壁を駆け上がり、上から現場を見下ろした。

一人のヒーローと思しきコスチュームを身に付けた男性が、ヴィランに暴行を受けている。

幸い、まだヒーローの男性は重症というほどの怪我ではないが、このままではマズい。助けを呼ぼうとスマホを引っ張り出し、画面をタップする。

（ヒーロー事務所か、警察か、どこに連絡すれば……）

そう逡巡しゆんじゆんしていた時、完全な第三者の声が上がった。

「ケンくん！見つけましたあー！」

その声に反応したのは3人。

暴行を受けていたヒーローは援軍がきたのかと思いい、顔をあげて声の主を見るが、明らかにその顔に絶望を貼り付けてしまう。

暴行していたヴィランは警戒心を剥き出しに振り向いたが、声の主を見ると歪んだ笑みを浮かべる。

そして、その名を呼ばれた金木は驚いてスマホを落としてしまう。

ガシャン！と派手な音がした。

内部の部品が飛び散り、辺りにほんの刹那、静寂が訪れる。

通報手段を失ったことに一瞬歯噛みしながらも、金木は渡我の目の前に降り立った。

「トガさんっ……こは危ないから、ひとまず逃げて!!」

金木の必死な形相に対し、渡我はニコニコと疑問符を浮かべる。

さらに現状を説明しようと思死になるが、渡我はニコニコと首を傾げるだけ。

この2人だけを見れば微笑ましい中学生同士の放課後の日常だが、現実是非情で、今2人が巻き込まれている状況は非日常だ。

「クククツ、おいガキども。ヒーローごっこかあ？なんでこんなモンに憧れんのかねえ？」

筋骨隆々。

肉体強化系の個性だろうか？

肥大した筋肉を纏まとうヴィランは、気を失ったヒーローを引き摺ひりながら現れた。

(まずい まずい まずい まずい…)

この状況は最悪だ。

スマホは使い物にならないだろうし、逃げて通報するにしても、抗戦するにしても、人質となりうる者が2人もいる。

ヒーローの方は怪我の度合いによっては早急な治療が必要かもしれない。

となれば…

(考えるより先に状況を変えるっ…！)

金木は個性を全開にして、人間離れた速度でヴィランへと突っ込んだ。

「…っ!？」

腰の捻りも何もない、人を殴り慣れていないのが分かるパンチだ。

だが、それでも不意をつかれたヴィランは、顔を殴り飛ばされる。

そして、金木は勢いそのままにヒーローを抱えて距離をとった。

ヴィランはヒーローを奪還されたことに加え、唇を切ったのか少し出血していることに気づき、一瞬驚いたあと、不敵に笑った。

「トガさんっ！この人をお願い！あと通報もしてくれると助かる！」

奪還したヒーローをトガに引き渡し、金木はヴィランと再度向き合う。

一方、ヴィランは額に青筋を浮かべてヘラリと嗤った。

「…いいねえ。その気絶してるゴミなんかより…よっほどヒーローだなあガキイ!!」
血の混じった唾を撒き散らしながら、ヴィランは金木に向かって突撃する。

「くっ……」

個性を発動し、軽々とその突進を避けるも、再び追ってくる。

どうやら標的は完全に金木一人に絞られたらしい。

(…簡単には逃げきれないか。でも避けられないこともなさそうだ。)

(僕が囿になって時間を稼げば、トガさんが誰か呼んできてくれるはず…!)

金木は個性を維持したまま路地裏を自在に駆け回る。

ヴィランも金木を視界から外すことなく追い続ける。

そうして、怪我人とクラスメイトから距離を取りつつ、ヴィランを引き連れて金木は
どんどん暗く人気がない方へと進んでいった。

一方、金木が命懸けの鬼ごっこに興じている頃。

渡我は金木に押し付けられたヒーローを路地裏に放置したまま、笑っていた。

そして、出血しているヒーローの傷口から血を拭い取ると、ベロリとその手を舐め上げ、恍惚とした表情を浮かべる。

(……ケンくんがお名前呼んでくれたア)

「クソがつっ！どこ行きやがったガキイ!!」

八つ当たりとばかりに周囲の壁を破壊しながら、ヴィランは金木を探していた。

地獄の鬼ごっこ開始から数分。

つい先程、金木の姿を見失ってしまったのだ。

(…あのガキ、肉体強化系の個性だな。なら建物の上にいる可能性もあるな。)

そう考えたヴィランは金木を探すため、近くのビルの非常階段を駆け上がり始める。そもそもこの事件の発端となったのは、路地裏で個性を用いて喧嘩していたところをヒーローに見られたことだ。

彼はただの喧嘩好きで、別に犯罪が犯したいわけではない。

個性使用自体が犯罪にあたるといえばそれまでだが、彼には別に大それた目的などないのだ。

(なあんで生まれ持った個性を喧嘩に使っちゃいけないんだ?)

彼は喧嘩している時が一番楽しい。

別に誰彼構わず喧嘩を吹っかけるわけではない。

強気でいかにも自分が最強だと信じて疑わない奴を叩きのめすのが楽しいのだ。

劣勢になった相手がどんどん自滅していく姿を見るのが最っ高に楽しい。

だが、個性の使用も喧嘩も、ヒーローや警察に目をつけられては自由に楽しめなくなる。

だから今まではヒーローや警察から隠れて喧嘩を楽しんできた。

そのおかげで、このヴィランは今まで見つからずに生きてこられたのだ。

もし見つかっていれば、このヴィランが持つ規格外の個性でヒーローの幾人かは犠牲

となっていたかもしれない。

変身

(やっとな撒けた……。)

金木は息を切らしながら、と渡我と別れた場所へと戻ってきていた。

あのヴィランは相当危険だ。

冷静な判断力とおそらく肉体強化系の個性。

とても自分が太刀打ちできる相手じゃない。

渡我が誰か呼んでくれていたとしても、それがプロのヒーローであったとしても、ひとりて闘うのは危険だ、と伝えるために、この場所まで戻ってきたのだ。

ザツと辺りを見渡す。

渡我の姿も、傷ついたヒーローの姿も見当たらない。

上手く逃げられたか、と安堵している金木に、後ろから声がかけられた。

「やあ、君ーさつきは助かったよーありがとうー」

金木の意思に反して、ビクツと肩が跳ね上がる。

声をかけてきたのは、先程まで傷つき、気を失っていたヒーローだった。

一瞬前に見渡した時には、影も形も見えなかったのに。

「え……いつの間に……あの、大丈夫なんですか？さっきまで傷だらけで……」

「大丈夫！個性でちよちよいつとね！応援も呼んであるからもう安心だよ。そんなことより、君も早くここから逃げた方がいい。」

困惑する金木に対し、ヒーローはにこやかに笑いながら金木を表通りの方角へと促す。

確かに、見る限りもう怪我はなさそうだ。

コスチュームは先程のまま血がついていたり、破れていたりするが、その破れた箇所から見える肌には傷はない。

顔も殴られた痕や口の端が切れていたはずだったが、今はそれも無い。

回復できる個性があったなら何故やられたんだ？という疑問はあるが、しよせん自分は中学生で相手はプロだ。

ここはプロに任せるべきだろう。

応援も間も無く来るとのことだったので、金木は安心してヒーローに背を向けて表通りへと歩み始めた。

突然。

脇腹に激痛が走った。

「ツツ…!!!」

歩き始めたその瞬間、いや、ヒーローに背を向けた瞬間にその痛みはやってきた。

驚いて振り向くと、ヒーローは恍惚の表情でナイフを握っていた。

頬を上気させながら、ナイフに付いた血液を眺めて満面の笑顔を浮かべ、なおも金木にナイフを突き立てようとする。

金木のコンディションが万全ならば、追撃は避けられるだろう。

この程度の傷はすぐに再生もできる。

だが、初めて刃物で刺された少年が、そう冷静でいられるだろうか。

脇腹からは焼けるような痛みがズキンズキンと自分の鼓動に乗るようにやってくる。

そして、金木の個性は万能ではない。

そもそも「身体活性」という便利な個性を持つてはいても、金木は何のトレーニングも積んでいない、ただの中学生でしかない。

率直に言って、この個性を使いこなせるほどの体力がないのだ。

筋肉を酷使^{こくし}するため、個性を解除したあとの反動も大きい。

つまり、先程のヴィランとの鬼ごっこで、もう体力は残っていない。

ザグリ。

息切れが回復することもなく、金木は2度目のナイフをその身に受けた。

「ぐ……っ。」

体の中心を狙って突き出されたナイフを右腕で庇い、なんとか少し距離をとる。

だが、2歩ほど歩けば詰められてしまう距離だ。

そして、それ以上距離をとる体力はもうない。

右腕は裂け、脇腹と右腕からの出血で制服も血に塗れている。

ダラダラと血を流し続けている傷口が、焼けるように熱い。

「ケンくん！ちよつとだけ血をチウチウさせてください!!」

先ほどまでの口調が変わっていること。

自分の名前を知っていること。

言っている内容が狂気じみていること。

訳がわからないことばかりだ。

痛みと混乱で顔が歪むが、その先の光景を見て驚愕した。

ヒーローがドロドロと溶け始めたのだ。

そしてドロドロと溶けたヒーローの中から、恍惚の表情をした渡我が現れた。

渡我はそんな至福の極みといったような表情のまま、金木との距離を正しく2歩で埋め、一糸纏^{まと}わぬ姿のまままでピタリと身を寄せた。

そして、無言のままに金木を押し倒し、傷口に優しく口付けをする。

「はっ!?……トガさ……なに……を……えっ……」

息も絶え絶えに渡我を押し退けようとするも、全身に力が入らず、個性発動もままならない。

ゾクリ、と身を震わせるほどの嫌悪感とその身を襲う。

(なん……だ……これ……血を……吸われてる……?)

じゅるり

じゅるり

と、不気味な音が路地裏に小さく響^{こだま}する。

(……なんだよ……これ……なんだよこれっ!?)

じゆるり

じゆるり……………

「…ケンくん！改めて自己紹介します。私、渡我とが被身ひみこ子と言います！」

ぷはあ！と、まるで仕事終わりの一杯を飲んだサラリーマンのように快活な音と表情で、患部から口を離す。

そして、渡我は口の周りを血で濡らしながら恍惚とした表情で続けた。

「数ヶ月前ですが、あの時は助けてくれてありがとうございます！あの後のケンくんの血塗れの姿と、きれいな赤い眼を見て好きになっちゃいました！」

なおも迫る渡我に、金木は命の危険を感じる。

距離をとって個性での再生を…と思うが、血を失いすぎたのか身体が言うことを聞かない。

次第に意識も遠のいてゆき、痛みも寒さも分からなくなっていく。

意識が、飛ぶ。

だめだ。まだ…。死にたく…。ない。

壊れたブラウン管テレビのように、ブツリブツリと何度も意識を手放しては覚醒し、

また意識を失う。

「…好きな人の血が見たいっていうのは『普通じゃない』んでしょうねエ。でも、私は血が好きなんです。あの血溜まりにいたケンくんはホントに美しかったです。」

頬を染めながら上気した顔で渡我はそう語る。

何度目になるか分からない意識の浮上。

金木は、朦朧とした意識の中、その言葉でふとあのトラック事故の光景を思い出した。

今自分が置かれている状況も、もはや何も理解できない。

あつさも、さむさも、いたみも、こわさも、なにも感じない。

判然としない意識の中、金木は渡我と同じ光景を思い描いて、ゆるやかに微笑んだ。

「……たしか、に……ゴポツ……きれ……い……だっ たね。」

言葉に乗って、口腔内に溜まった血液が気泡混じりに吐き出される。

何度か途切れながら、微かな音量で告げられた同意の言葉。

その言葉を聞いた渡我は、ピタリと動きを止め、金木を凝視した。

今までこの異常な感性を理解してくれた存在はいなかった。

親は『普通に』生きることを強要し、そうしなければと自分を抑圧してきた。

だが、この少年は自分を認めてくれた。

ここまで強烈に憧れた存在が、さらに自分を認めてくれる…

こんな幸福はあるだろうか。

渡我はこれまでの人生で最高の幸せを噛みしめる。

だが。

渡我にとって憧れの存在とはイコール血を見たい相手なのだ。

相反する感情を内包したまま、渡我はさらに金木の血を口にしようとして――

突如、その身をくの字に折り曲げて苦しみ始めた。

「あつ…が…う…い…」

突然苦しみ始めた渡我を見て、金木の意識は次第に冴えていく。

だが、眼前の光景を見ても本当に訳が分からない。

なおも苦しみ続けている渡我を見ながら、少しずつ自分の意識が覚醒していくのを感じる。

なにがなんだか分からない。でも、

(…まずは傷を塞がないと)

大きく視界がふらつく。

刺し傷からの出血と渡我の経口摂取によつて血を失つたせいだ。

人は血液の50%を失うと失血死する。

30%で命の危険、20%で出血性ショックに陥る。

早く血管を繋がなければ、多臓器不全を起こしてしまう。

そうなつてしまえば、もはや個性の発動など不可能だ。

逆に、そうなる前に血管を繋ぎ、傷を塞げばこれ以上の悪化はないはずだ。

自分の身体のみ集中する。

人体の構造をイメージし、患部の血管をイメージする。

このイメージが個性に影響するのは分からないが、人の体は案外思い込みの影響を受けやすい。

筋肉がついた自分をイメージして筋トレをするのと何も考えずにするのでは結果が違う、と何かで読んだ気がする。

そのイメージが役に立ったのかは分からないが、なんとか傷口を再生させることができた。

だが、嫌な汗が止まらない。

個性の反動によって筋肉は悲鳴をあげているし、血を失ったせいで気分もすこぶる悪いが、うまく個性を使うことができたことに安堵しつつ、渡我を見る。

先ほどまで謎の苦しみで苦悶の声をあげていたが、今は焦点の定まらない目で肩を下させながら静かに呼吸を荒げている。

痛ましい姿だ。

自分を刺したこと、血を吸われたこと、そして突然倒れたこと。分からないことばかりだが、このままにはしておけないだろう。

「…トガさん？あの、——」

「こんなとこにいたか!!ガキイ!!」

渡我に声をかけようとした金木は、頭上から本日何度目か分からない災厄の声を聞いた。

變糺

「探したぜえ！まんまと同じ場所に戻つてるとはなあ！」

先程より何倍も状況が悪い。

謎の苦しみに喘ぐ渡我とがを凶悪なヴィランの前に放ほうつて逃げることもできない。

さらに、傷は塞がったものの、戦闘不能と言つても過言ではない自分の現状。

まさに最悪の状況である。

(あのヴィランは僕を狙つてくるはず…。なら、まずトガさんから離れないと…)

自身の不調を悟られないよう、ゆっくりとした動きで渡我から離れて、飛び降りてきたヴィランと対峙する。

ヴィランは歪んだ愉悦ゆえつを感じさせる笑みを浮かべながらジリジリと距離を詰め、金木はそれに合わせて少しずつ後ずさる。

そうやって、お互い一足で仕掛けられる、謂いわゆる間合いのギリギリ一歩外を保つ。

(この状況で何ができる…?)

(考えろ！考えることを止めるな！)

この状況にあつて、金木は感情は過去最大に焦つていても、思考は冷静だった。こうまで最悪な状況が重なれば、逆に冷静になつてしまふ。

祖父の遺した大量の本の中にあつた、犯罪心理学の本や様々な個性についての本の内容を思い出す。

（あの体格から考えて肉体強化系の個性だとは思うけど、異常なほどの筋肉量じゃない……）

（肉体強化つて決めつけるのは早計か？……でも特殊な個性なら、すでに発動していてもおかしくない。……くそつ、本当に最低な日だ……！）

思考を巡らせるが、内心で悪態をつく。

焦りを浮かべる金木に、ヴィランは笑みを深めた。

そして、一瞬。

眼前へと距離を詰め、拳を振るつた。

それを間一髪で避ける。

だが、ヴィランは次いで右脚を振り上げ、金木に目掛けて踵かかとを振り落とす。

ビュッ！という風切り音の後に、轟音ごうおんと粉塵ふんじんが辺りを包んだ。

「……ッ！」

またもギリギリで金木はその身を躲かわしていたが、あまりの威力に肝を冷やした。

先程まで自分がいた場所をヴィランの踵が砕いていた。

(つあぶなかつた……！僕の予想より速い。)

(それにあの力……地面がありえない壊れ方してる。)

(コンクリートの地面をあんなに簡単に……やっぱり肉体強化系で間違いない。)

この場合、単純な肉体強化が一番厄介な個性だ。

背を向ければ一瞬でやられかねないし、先程と違って逃げ切れるとも思えない。

そして、戦うという最後の選択肢は、もはや自殺と言いつつ換えても同じだ。

そんな大量に汗を流しながら顔を歪める金木に向かって、ヴィランは耐えきれないと
言わんばかりにゲラゲラと笑い始めた。

「こええか、ガキ？」

「……………そりや、こわいですよ。」

「だろうなあ、お前の恐怖はちやあんと分かってる。まあ数字で言うなら70つてところだ。並みの中坊にしちや必死に恐怖を抑えてる、つてところかあ？」

「70……？」

「そうさ！俺の個性はなあ！相手に恐怖を与えれば与えるほど自分の肉体の能力が上がるって個性だ。『恐喝』つつつてな、相手の恐怖の度合いもだいたい分かる。」

個性／恐喝^{きょうかつ}

相手に与えた恐怖の分だけ自分の戦闘力を上乗せする。

上乗せなので元々の地力から下がることはない。

相手の心象次第で戦闘力が変わるので、相手の恐怖を引き出すため、適度な体格や筋肉は維持し、乱暴な言葉遣いをして派手な見た目になっている。

恐怖を測ることができる対象は一人だけなのでタイマン勝負が好き。

(…僕が恐怖すればするほど強くなる?)

(……っ!!?そんなの反則じゃないか!!)

そう、この個性は、相手に自分の個性を教えた方が効果的なのである。

自分の恐怖が相手に力を与えると分かっている、人は恐怖を完全に忘れることなどできない。

怖がるな、と思えば思うほど、現状を考えれば考えるほど、恐怖の数値は上がっている。
く。

「お、80に上がったな!理解しちまったんだなあ、頭良くて助かるぜ。」

「ガキ、もうひとつ教えといてやる。恐怖の度合いが90を超えるとなあ、俺のパワー

アップは1上がることに倍以上になってくんだよ。ケハハツ、相手が俺に100ビビつちまつたらどうなるのか、分かるか？ヒーローだろうが、何だろうが、俺に敵う奴かななにかいねえんだよっ!!」

ヴィランはそう叫びながら、先程までの慎重な動きと打って変わって、ただただ力任せに腕や脚をふるう。

その一撃ごとに壁や地面にはヒビが入り、避ける金木は神経をすり減らす。

「っ……!!…あぶなっ…くっ!!」

今はまだかろうじて避けられているが、相手が落ち着いてきつちり狙ってきたら…。

こうやって相手に恐怖して相手をさらに強化してしまつたら…。

そんなことを考えながら、金木は痛みも倦怠感けんたいかんも忘れて個性を全開にして避けること

だけに徹していた。

そもそも、自分の今の状態を考えれば、そんなチート性能がなくても地力で負ける。

どうすることもできず、ただただ避けることのみ徹する。

だが、これは解決策にはなりえない。

相手が最悪の一手を打ってくるまでの、時間稼ぎにしかない。

「ちよこまかうぜえな…なら、これは——どうだっ?」

歪に笑いながらヴィランがとった行動は、金木が想像した最悪の一手だった。

ヴィランが振り返り、爆発的な加速で走り出す。

その先にいるのは。

先程から浅い呼吸を繰り返し、虚ろな目をしている渡我。

つまり人質。

もしくは、ただの破壊衝動。

「…っ!!」

「おお！90まで一気に上がったぞ！」

「お前あれか、友達とかが傷つく方が怖えてやつか？ヒーローらしくて最っ高だな、オ

イ！」

ヴィランが渡我の目の前までに着いた。

金木はそれを必死に追う。

——間に合わない。

ヴィランはニタニタと笑いながら、金木を見る。

——あと2歩。

先程までと比べ物にならないほどに肥大化したその拳を振り上げる。

——あと1歩。

そして、物理法則を感じさせないほどのスピードで振り下ろした。

ごぼつつつ!!!

およそ肉と肉がぶつかり合ったとは思えない破壊音が響く。

金木は個性を限界以上に引き出して鼻血を噴き出させながら、渡我へと向けられた拳に自分から突っ込み、その身を挺てして渡我を庇い切った。

そして、ヴィランの拳は、金木の脇腹を貫いていた。

ヴィランはその拳を引き抜くと、腕を振るって、びしやりと血を払う。

金木は、ごぷりと僅かな気泡とともに血を吐き出し、そこで膝をついて動きを止めた。

「はっ！マジでヒーローじゃねえか少年よお!!!ハハハハハハハッ!!」

「こんなになつてまで人助けする奴、本職のヒーローでも見たことねえよ!!」

「ヒーローつつうのはなあ、ただの人気商売なんだよ！自分でも勝てる弱いヴィラン相手に、派手に個性振りかざす奴のこと言うんだよ！そんなもんに憧れて無様に死ぬとか…ハハハハハハハ！」

動かなくなった金木に対し、ヴィランは目尻に涙を浮かべるほど心の底から愉快そう

に嘲笑う。あざわら

——ちがう。

「……ち……ア……う。」

「あ？」

「ちが……う。……ほん当の ヒーローは……ア」

腹に風穴を空けられた金木が俯いたまま言葉を返してきたことに驚愕して目を見張る。

その瞬間、金木の腹の穴が塞がった。

ギョルリと肌色の肉が傷口の風穴を埋める。

継ぎ目もなく、健康そのものの血色で完全に治癒している。

「は……？」

俯いたまま驚異の肉体修復を見せた目の前の子どもに、ヴィランはただただ驚くことしかできない。

——何なんだ？こいつ…

……なんだこの回復力。

それに「恐喝」の数値がゼロになって、俺の身体が素の状態に戻っちまってる。

どういうことだ…？

それに何より——

「…なんだお前っ…なんだ？その眼…？」

左眼を真紅に染め、ゆらりとその身を揺らしながら金木は立ち上がった。

そして、緩慢な動きで右手を上げると、人差し指を親指で押さえる。

パキリ。

(なんだ…こいつっ！やべえ！恐怖がないだど？あの傷の再生、あの眼…なんなんだ？)

冷や水をかけられたかのように慌てふためくヴィランに向けて、金木は穏やかに告げた。

「僕は…人を傷つけるくらいなら傷つけられる方がマシだと思ってました。」

「……でも。人を傷つける人がいるなら、僕はそれを許さない。」
「僕は、人を救える人になりたい。」

だから――
殺しません。

その言葉を最後に、ヴィランは一瞬で意識を刈り取られた。
同じく腹に一撃を受けたのだと理解するまで、意識は保っていられなかった。

血掟

ヴィランが白目を剥いて倒れる。

それを見て、金木は全身の力が抜けていくのを感じる。

よろり、と身体が揺れる。

どうにか渡我へと向き直り、その無事を確認する。

未だ虚ろな目をしているが、どうやら怪我はないようだ。

覚束おぼつかない足取りで渡我のもとへ歩みを進めるが、そこで完全に体力が限界を迎えた。

渡我の横に。パタリ、と倒れ伏してしまった。

「……………トガさん。もし先に起きたら…助けを呼んでくれないかな。」

刃物で刺され、血を吸われた相手に言うセリフでもないが、他に頼む相手も、打てる手もない。

少し微笑みながら金木は意識を失った。

——
べちやり。

べちやり。

べたべた、べちやり。

ひやっと冷たい何かが顔面を往復している。

……なんだ……これ。

すごい不快つ……。

目を開けると、ぼやりと霞む視界の中で、どうやらここが屋内だということに気づく。そしてさらに、べちやりと顔面の上を往復しているのが生肉だということにも。

「ケンくん！起きましたかっ!!生肉をどうぞ!!」

「トガさん……あの？えつと……なんで起き抜けに生肉なのかな……？」

「ここが病室であることは理解できる。」

「妙に生々しい、というか生の肉の感触からして夢でもなさそうだな。」

「病室にいるのは自分と渡我だけで、窓の外は暗くなっている。」

「ケンくんは生のお肉食べると回復するのでは？」

「ああ、あの事故の時の……いや。それより、あの、現状を教えてくださいませんか？」

「生肉を食べると消化するまで個性がパワーアップする。」

「これは、金木自身も、トラック事故の件で初めて知った。」

「そもそも生肉を食べる機会などなかったのだから仕方のないことなのだが、自分の個性が単純な肉体強化と少々の怪我の自己治療だと思っていた金木にとっては驚きの事実だった。」

「現状の把握よりも、体調の復活です！どうぞ！生肉食べてください！」

「……………はい。」

「病院なのにこの生肉はどこで用意したんだ、とか」

「さっきまで僕のこと殺そうとしてたよね、とか」

たぶん貯血してた分を現在進行形で輸血してもらっているから生肉は不要だ、とか
生で肉を食べるのはだいたいぶ気持ち悪い、とか

そんなことは、目の前でキラキラと瞳を輝かせて満面の笑みで生肉を差し出してくる
少女に言えるはずもない。

金木研は押しに弱いのだ。

金木は、グイグイと押し付けられる生肉を涙目になりながら完食した。

そして、さらに瞳のキラキラを倍化させた渡我にたじろぐ。

「やっぱり生肉食べると左眼赤くなるんですねエ。」

「ん？左眼…？」

何の味付けもない生肉を食べるといふ苦行で、たしかに涙目になっているのは自覚し
ている。

そんなに充血しているのだろうか？

おもむろに渡我が手鏡を渡してくる。

そこには左眼を赤く光らせている自分が映っていた。

白目を黒に、黒目を赤に光らせ、その赤を中心に血管のようなものが広がっている。

「なっ…なんだこれ！」

「あれ？知らなかったんです？ケンくん、事故の時も生肉食べて左眼赤くなりました

よ？あと一昨日の事件の時も。」

手鏡に映る自分から目を離せず、渡我の言葉に返事も忘れて左眼をまじまじと観察する。

この左眼を表現するなら、ただ一言「悍ましい」。

なるほど、生肉食べて再生してこの左眼じゃあ化け物とも呼ばれるか、とトラック事故の後の周囲の反応を思い出して妙に冷静に納得してしまった。

その後、渡我から事件後のあらましを聞いた。

曰く、あれから数分後に、最初にいたヒーローが仲間を連れて現れたそうだ。

そして、救急車の手配とヴィランの拘束などをしてくれたらしい。

渡我は搬送中、病院に着く前に動けるようになり、今はもう元気だという。

突然の不調の原因は、精密検査でも分からなかった。

そして、驚愕の事実だが、あの事件からもう丸一日以上が経過しているというのだ。

金木はその間、眠り続けていた。

途中、金木の祖母を名乗る人が血相を変えて病室に飛び込んできて、医師が「輸血と点滴で身体は問題ないはず」と伝えているのを聞いたそうだ。

それでも目を覚さない金木を見て、渡我はなぜか（生肉だ！）と判断して、病院を抜け出して調達してきたという。

「調達って…ありがたいけど、よくそんな簡単に抜け出せたね。」

「ああ、それはですねエ——」

思考がぶっ飛びすぎている渡我に、苦笑しつつ相槌程度にそう返す。

すると、渡我はニヤリと笑っておもむろに患者衣に手をかけ、「じゃじゃーん！」と言いながら全裸になった。

「ちよ!!!トガさん!!ちよっつ!!!」

金木は渡我の謎の痴態に困惑する。

（そうだ裸見るの2回目だ！謝らなきやー！）と、少し的外れの感想を抱きつつも、頬を染めながら目をつぶり、手をワタワタとさせる。

「ケンくん、これで分かってもらえるかな？」

「え？」

恐る恐る目を開けると、そこには服を着たおじさんがいた。

なんだこれ？

……いや、そういうえばあの時トガさんはヒーローの人になりすましてたんだっけ？

その後ドロドロ溶けて、トガさんに――

そんな思考をする金木をよそに、ふっふっふーと笑いながら、おじさんはドロドロに溶けていく。

ドロドロと溶けながら、おじさんはトガさんに変わっていく。全裸の。

「いやー！服着てよ!!」

いそいそと患者衣を着つつ、背を向ける金木に渡我は自身の個性について語った。

「私の個性は『変身』なんです。血を摂ることです。人に変身できます!」

個性／変身^{へんしん}

血を摂取することで、その血の持ち主に変身できる。

摂った血をエネルギーにしているので、変身時間は摂取量と比例する。

ちなみに相手の服まで含めて変身できるので、裸にならないと服が重なってしまふ。

なるほど、と金木は頷く。

ここは病院だ。

採血など毎日行われているし、採血済みの注射器を1本くすねたのだろう。その個性を使つて変身して病院を抜け出したわけか。

そして、個性は性格に大きく影響を与える。

渡我が血に固執(こじつ)するのは、やはり個性の影響に他ならないだろう。

今はなぜかフレンドリーに話しているが、一昨日は殺されかけたのだ。

「……いや、ていうか採血の血、とつちやダメだよ……。」

「はい、私も後悔しています。なぜかケンくんの血を飲んでから味覚が少し変わってしまつたようで、他人の血がすぐく不味く感じるんですよねエ。」

「いや、味うんぬんじゃなく……。」

「……僕の血を飲んで何かが変わったのなら、それはもしかしたら僕の血が特殊型だからかもしれない。一応A B型なんだけど、血液中によく分からない成分が大量に含まれてるみたいで。医者が言うには何かの細胞らしいんだけど……。」

おそらく、あの時の渡我がの急激な体調の変化も、その細胞を大量に口にしたことによるものだろう。

味覚の変化もしばらくすれば元に戻るのかもしれないが、少し申し訳なく思つてしま

自分を刺した相手にこんなことで罪悪感を持ってしまふところが、金木の金木たる所以ゆえんなのかもしれない。

「それで…、なんで助けてくれたの？」

「助けられたのは私ですが？しかも2回も。感謝してます。」

「あ。たしかに…。いや、でも僕のこと刺して……」

「私、好きな人と同じになりたいんです。血をとれば好きな人と同じになれますから、血を飲みたいって思うんです。」

「…でもケンくんは2回も死にかけながら助けてくれました。ケンくんが死んじやったらもうケンくんの血を飲むこともできませんし、たぶんあなた以上にポロポロで血が似合う人いないと思うんです。」

いつものニコニコした表情は鳴りを潜め、渡我はじつと顔を見つめてそう語る。

個性は良くも悪くも持ち主に影響を与えすぎる。

人類が持つには少し早すぎたチカラなのかもしれない。

渡我が血に惹かれるのも、好きな相手と同じになりたいという想いですらも、個性が影響を及ぼしていることを否定できない。

そして、それはきつと社会に受け入れられることはない。

それは、渡我自身も分かっていることだった。

死にかけてまで自分を救ってくれたポロポロで血塗れちまみの金木に恋をしてしまった。

そして、その狂おしいまでの想いは彼女を凶行に駆り立てた。

だが、そんな狂気で殺そうとした自分を、金木はまたも死にかけてまで庇った。

その時、渡我はかつてない感情を抱いた。

ただただ、金木に死んでほしくないと思ったのだ。

血が飲めなくなるから。

金木以上に好きになれる相手と出会えるか分からないから。

先程口から出たそんな理由など後付けの建前にすぎない。

そして、ヴィランを討ち果たした時——

王の風格を漂わせながら人を救うと言い放ち、ヴィランにさえ情けをかける、その圧倒的なカリスマに衝撃が走ったのだ。

この人の隣なら私は自分を殺さずに自分を変えられるのではないかと。

「私は結局動けず、ケンくんを助けることもできてません。殺そうとしたのも事実ですし、自分が普通じゃないってことも分かっています。受け入れてもらえるとは……思いません。」

でも私は……と言ったきり俯いてしまった渡我を、金木はジツと見つめた。

普通のクラスメイトだと思っていた彼女の真実。

殺されそうになった事実。

そして、今こうして自我と常識の狭間はざまで葛藤している彼女。

悪人だとはどうしても思えなかった。

「助けてほしいってトガさんに頼んだのは僕だ。で、経緯がどうあれ、今僕は無事に生きていられる。だから、やっぱ僕はトガさんに感謝してるよ。」

「ありがとう。」

金木がにこやかにお礼を伝えると、渡我は眉根を下げつつも顔をあげた。

そんな渡我に対し、金木はなおも言葉を続ける。

「たしかに君は個性に振り回されてる。でも、現に今、踏み止まってるじゃないか。だから、異常だとかそんな言葉で君を断じたくない。好きって気持ちにはどう応えればいいか分からないけど……」

「……………君がどうしても血を飲みたいなら僕が提供するよ。」

自己犠牲。

そう断ずることもできる。

だが、これはそんな高尚なものではない。

渡我がその言葉から受け取ったのは、金木の純粋な「やさしさ」だった。

「でもね。」

「君が誰かを傷つける人になるなら、君は僕の敵になってしまう。」

「僕は僕を助けてくれたトガさんを敵にしたくないよ。」

そう言って少し悲しそうに微笑む金木に、渡我はまたも恋をした。

「ケンくんっ!!!」

「王サマみたいな強気のケンくんもいいですが、優しいケンくんもいいですねエ!!」
「わああああ!好きです!さっそく血吸っていいですかっ!?!」

金木研14歳。

女子から初めて受けた告白は、熱烈で、過激で、思ってたのとだいぶ違った。

彼女は良くも悪くも、きつと純粋なのだ。

誰かが手を差し伸べることで、共に正しい道を歩めるかもしれない。

そして、僕自身、殺されかけたにも関わらず、彼女を憎からず思っている。
今ならまだ彼女を救える。

なら、迷う理由はない。

「でも、その代わり約束してほしい。」

金木は指を一本ずつ立てながら続けた。

「一度に摂取するのは少しだけ。」

「身体から直接吸うのはナシ。どうせ貯血するし、その時に予備を採つとくから。」

「あと、他人を無闇に傷つけないこと。」

「個性を制限するようなこと言っちゃって悪いけど……。この約束を守ってくれるなら――」

――

「まもります!!」

言葉的にも身体的にも被せるように即答して身を寄せた渡我に、またも慌てながら金木は苦笑した。

こうして金木と渡我は中学生にして、人には言えない血の約束を結んだ。

立志

金木の意識が戻ったことが分かると、病室は少し慌ただしくなった。

医師や看護婦が忙しなくやってくる。

少し遅れて祖母もやってきた。

そして、金木の身体に異常がないことが分かると、翌日には事件の捜査のために警察が押しかけた。

その際、事件の時にヴィランにやられていたヒーローも警察と共に現れた。

詳しい事件の経緯を照らし合わせるためらしい。

金木は、渡我が自分を襲ったことは伏せて、事件の経緯を話した。

「出血して意識が朦朧もろうとうとしていたので、ハッキリとは思いつきませんが、なぜか急に身体が軽くなって反撃できたんです。その一発でヴィランが倒れて、僕もそこで体力が尽きて……」

「……すみません、そこからは覚えてないです。」

ヒーローも警察も、ただひたすらに驚愕した。

強い個性をもつ少年と少女が協力して、なんとか倒したのだと思っていたからだ。

倒れた少女を守りながら戦って、しかも一撃で倒した……？

ヴィランの個性についての情報も踏まえて考えると、正直プロヒーローでも厳しい相手だ。

ヒーロービルボードに入るような者ならまだしも、そこらの事務所にいる新米のヒーローでは一人で戦える相手だとは思えない。

だが、この少年は嘘を言っているようには見えない。

さらに、少女も少年の証言をその通りだと認めた。

拘留中のヴィランは黙秘を続けており、今は裏付けがないが、きつと全て真実だと感じた。

金木は自分の個性使用が罪だと申し訳なきさそうにしていたが、この場合は完全に正当防衛である。

金木の年齢や状況を考えれば、表彰ものの功績である。

「金木くん、本当にすまない。そしてありがとう。俺はあのヴィランを倒すことも、君たちを逃がすこともできなかった。∴しょうじん精進するよ。今度はちゃんと人を助けられるよう

に！」

ヒーローは事件のあらましを聞くと、深々と金木に頭を下げた。

恐縮する金木に向かって、ヒーローはさらに言葉をおくる。

「君はヒーローになった方がいい。いや、なるべきだ。金木くんは中学3年生だろう？
高校は雄英ゆうえいを受験してみたらどうだい？」

ヒーローの熱量のこもった言葉に、警官もウンウン！と力強く首肯する。

金木はその熱量に少し押しされながらも、「考えてみます」と少し恥ずかしそうに返した。

事件から1週間。

病室を訪れた祖母や父から心配されたり、渡我の両親から感謝されたりと色々あったが、ついに明日、晴れて退院となる。

「いよいよ明日には退院ですねエ。私としては、もう少しケンくんの側にいられるこの時間を愉しみたいところですが。」

「まあ退院しても同じクラスだし、すぐ会えるよ。」

この数日間、渡我とは色々な話をした。

お互いの両親の話、個性の話：

渡我が今まで好きになった人の話や、スリーサイズの話など、聞いてもいないのに乙女の秘密も聞いてしまった。

こうして話していると本当に渡我はクラスメイトと変わらない、普通の女の子だ。

血が関わること以外は、渡我の感性は歪んでいない。

だが、彼女の両親が来た時、両者の間に少しの溝を感じた。

両親はきつと娘の将来や人生を心配して、彼女を抑圧してきたのだろう。

渡我も両親の言葉に納得はしていなくても、斯く^かあろうとそれに従っていたのだから。

きつとそれは、自分と父の関係のように他人がどうにかできる問題ではない。

金木は彼女と両親の関係改善を祈りながら、両者を見ていた。

そんな金木の想いとは裏腹に、渡我の両親は安堵していた。

嬉しそうに金木を紹介する様子や、少し困り顔ながらも仲良く接している金木を見て、我が子がようやく普通になったのだと。

その安堵は、もちろん金木と渡我の血の約束を知らないからに他ならない。

それでも憑き物が落ちたように笑う娘の姿に、両親は喜んだ。

そして、ここ数日は渡我が金木の血を欲することはなかった。

金木が本人に聞くと、血はいつでも吸いたいが今は抑えきれないほどでもないのとこのだった。

渡我が少しでも変わろうとしてくれているのは本当に嬉しいことだが、それよりも金木は自分から「血、吸わなくて大丈夫？」と聞くのは少しどうなんだ、と悲しくなった。そんなこんながあつた一週間も明日で終わりだ。

「ほんとに、ヒーロー目指すんですか？」

「うん。僕はやっぱり人を救いたい。だから、雄英を受けてヒーローになる。そのためにも、もっともつと強くならないと。」

「なら、私も目指すしかないですねエ。」

「……えっ?!」

ニコニコと笑いながらそう呟く渡我に、金木は声をあげて驚く。

「ケンくんと離れるのも嫌ですし、私好きな人と同じになりたいタイプなので!!」

……僕はもしかして一人の少女の人生を歪ませているのでは？

と、内心不安になる。

いや、でも渡我を正しい道に導こうと決めたのだ。
ならば理由はどうかあれ、彼女がヒーローを目指すのは悪いことじゃない。

受験倍率は毎年300倍。

国立の高校で最難関と名高い名門校、それが雄英高校。

はつきりとヒーローになりたいと自覚した今、目指すはヒーロー科だ。

ペーパーテストはこのまま勉強していれば大丈夫だろうが、体力面は今のままでの合格は厳しいだろう。

個性に頼った今のままではダメだ。

そもそも個性をちゃんと扱いきれていないのも問題だ。

どちらにせよ、課題は山積みだ。

夢と目標を見定めた金木は、渡我に微笑みながら、気合いを込めて言い放った。

「じゃあ、二人で合格しよう！」

从瑕

退院した翌日、登校中の金木を待っていたのは好奇の目だった。

金木の姿を見た学生たちがヒソヒソと噂うわさばなし話に興じる。

いよいよもって本物の化け物扱いか…。

と、精神的にまいりそうになるが、昨日誓った目標と夢のために、今日からは勉強もトレーニングも本格的に始めなくてはならない。

こんなことで折れていられない…！

そんな強い決意を抱いて教室のドアを開くと、まるで怒号のように声が殺到した。

「金木い！お前まじですげーよ!!」

「ヒーロー金木の登場だあああああー!」

「退院おめでとう!」

「怪我はもう大丈夫なの!？」

「新聞見たぜ金木！お前すげーやっだったんだな!」

いつも賑やかな男子も、いつもは金木と同じように物静かに本を読んでいる女子も、

少し警戒した目で金木を見ていた子も、教室にいる生徒全員が金木の元へと押し寄せて言葉を贈る。

何が何やらといった様子で目を白黒させる金木を見かねて、クラスの学級委員の男子がみんなの言葉を遮さえぎった。

「まあ待て待て。金木は何が何だか分かってないようだから、俺が説明するよ。…この間の事件な、新聞に載ってんだよ。ホラ。」

学級委員から受け取った新聞を見てみる。

見出しには『大手柄！ヒーローを救けた中学生!!』と平体のかかったゴシック体の文字が大きく書かれている。

病室でヒーローが金木に頭を下げているシーンの写真まで大きく載せられている。

いつの間にもどこからどうやって撮られたのか全く分からない。

「他にも、こっちの新聞には女の子を庇かばったって記事も出てる。」

「こっちには凶悪なヴィランを一撃で倒したって書いてあるよ!」

「ほとんどの新聞で金木くんの記事出てたよ?」

「テレビでもめっちゃ取り上げられてた!」

次々と手渡される新聞や週刊誌にザッと目を通す。

その全てにおいて、自分は『中学生ヒーロー』と煽おだてられている。

さすがに未成年なので金木の顔や名前が一目見て分かるようなことはない。

だが、写真の中で頭を下げているヒーローは、ヒーロー名はおろかフルネームや個性にいたるまで公開され、さらには「力が足りない」と批判的な記事まで書かれている。

金木は「何だよ、これ……」と、頭を抱える。

正直、頭が痛くなるような僻見へきけん的な記事ばかりだ。

「あー、金木？その……色々思うところもあるだろうが、まずは俺たちの言葉を聞いてほしい。……」

「「「今までごめんなさい!!!」」」

数十人もの生徒たちが一斉に金木に向けて頭を下げた。

いつの間にも増えたのか、周囲には前のクラスメイトまで集まっていて、男子も女子も今のクラスメイトも前のクラスメイトも関係なく、全員が一樣に頭を下げている。

啞然とする金木に、学級委員がみんなを代表して言葉を続ける。

「俺たちは金木のこと誤解してた。噂に流されてお前を怖がってたやつもいるし、俺は

お前を不気味なやつだと思ってた。こうやって新聞に載ってることを鵜呑みにするのも噂に流されるのと同じかもしれないけど、お前が誰かのために行動したのだけは間違つてないと思うんだ。だったら俺は、いや俺たちは金木を誇りに思うよ。」

「すげーよ、金木！」

——別に僕はいじめられてたわけじゃない。

自分から距離をおいていた部分もあるし、彼らだけが悪いわけじゃない。

なのに、彼らは非を認めて頭を下げてくれる。

僕をすごいと褒めるけど、そうやって素直に謝ることができるのも十分すごい——

金木は微笑みながら、「ありがとう」とだけ返した。

ここにいる生徒全員に、ほわっとあたたかな空気が広がっている。

「で、渡我さんとは付き合ってるの？」

そんな空気を一撃で破壊したのは、目をキラキラと輝かせた女子の一言だった。そこからはもうあんまり記憶が定かじやない。

トガさんとのことでさつき以上に質問攻めにされ、トガさん本人が登校してくるまでの間それは続いた。

登校してきたトガさんにも当然、同じ質問が飛ぶ。

トガさんはニコニコしながら「はい！ケンくんは私のものです！」とケロリと言つてのける。

周囲の喧騒は絶叫に変わった。

ひやつほおおお!!とヨダレを撒き散らす勢いで狂喜乱舞する女子。

うおおおおお!!と鼻水と涙を流して悲しみと怒りに震える男子。

新クラスになって9日目にして、新たな暗黙の(?)ルールが追加された。

ルール2 「金木と渡我は公認カップル」

誤解を解こうとする金木の声も虚しく、教師たちが騒音を注意したことで騒ぎは落ち着き、強制的にホームルームが始まってしまった。

後日、金木は事件のことを詳しく話し、被害者だったヒーローの誤解は解くことができた。

ヒーローの汚名をそのままにしてはおけない。

だが、渡我と付き合っていないという弁明は、何度言っても照れ隠しだと笑われたのだった。

季節は巡って初冬。

金木と渡我は、屋外でトレーニングに励んでいた。

「そこですっ!」

「つと。まだ甘いよ、トガさん。」

視界から一瞬で消えたと思えば、死角から肘を打ち下ろす渡我。

それに対し、金木は片目を瞑ったままひらりと身を躲す。

風は強くないが、気温が大きく落ちる夜。

にも関わらず、金木も渡我も半袖のTシャツにレギンスとハーフパンツという軽装で

飛び跳ねる。

絶え間なく動き続ける2人は、寒さを感じていない様子で軽やかにトレーニングを続けている。

この半年余りで金木の肉体は見違えるほどに逞たくましくなっている。

腕や脚は筋肉で引き締まり、時折ときおり覗く腹筋は、くつきりとシックスパックが確認できるほどに割れている。

普段、服を着ていると見た目には分かりにくいのが、筋肉量は金木が思い描いた理想通りだ。

この短期間にここまでの肉体改造ができたのには、理由がある。個性によるものだ。

金木の個性は身体活性。

つまり、個性を使用してトレーニングをすることによって効果的な負荷をかけることができ、常人より酷使用することが容易なのだ。

酷使して悲鳴をあげる筋繊維は、より強靱になっていく。

そのトレーニングを数ヶ月続けたことで、以前とは見違えるほどの動きを可能にしている。

そして、金木が最も注力したのが気配の察知だ。

これを強化できたのは、現在、金木に向かって何度となく打撃を叩き込もうとして、何度となくそれを躲かされている渡我のおかげに他ならない。

渡我には天性の才能があつた。

初めて組手くみてをした時に金木はその才能に舌を巻いた。

そして、個性を使ったにも関わらず圧倒的な敗北を喫きした。

敗北の原因は、相手の死角に潜り込む渡我の動きである。

そのしなやかな体捌たいさばきはもちろん、相手の視界を把握する圧倒的な空間把握能力。

忍者の末裔まつえいか：!?と、悔し紛じやすいれに邪推じやすいしたことを覚えている。

そんな渡我の動きについていくために、金木は気配を読むことを覚えた。

気配を読むと言つてもゲームや漫画のようにオーラが見えるわけでもないし、目を閉じれば死角の映像がサーモグラフのように見えるわけでもない。

ただ単に、息遣いや相手の動作をくまなく観察し、どう動くかを予測する。

渡我が体捌きの天才なら、金木は情報処理の天才である。

脳に取り込んだ膨大な情報から最適な動きを引き出す。

これは、本ばかり読んできた金木ならではの特技なのかもしれない。

一方で渡我も大きく成長していた。

個性の使用は控えているが、その肉体は常人を遙かに上回るペースで強化されている。

金木には劣るものの、すさまじいバネのある動きを見せる。

この俊敏しゅんびんさで死角に入り込まれば、取り得る手段などほぼないに等しい。

さらに個性を解禁すれば、対人戦闘における優位性は計り知れない。

そして、金木と共に定めた「血への固執を薄くする」という課題も、少しずつではあるが改善されてきている。

血の摂取は月に1度のペースに落ち着き、もう金木の血を摂って体調を崩すこともなくなった。

あと、座学も金木の指導のもと、ものすごく頑張った。

彼女が一番苦労したのは、他ならぬこの座学だった。

そうして、見違えるほどに強くなった二人だが、受験まであと2ヶ月を切った今でも鍛錬を欠かすことはない。

学校が終わると、毎日毎日鍛錬。

深夜まで行われることもしばしばあり、現在ではクラスメイトはおろか祖母や渡我の両親からも2人の関係を誤解されている。

これが今もつとも金木を悩ませているのだが、いくら強くなってもこればかりはどうしようもない。

「ケンくん、足元がおルスですよっ!」

「つと、うわっ!」

少し思考が脱線していたようで、その隙について渡我が金木の足を払う。

バランスを崩したところに、またも死角に潜り込んで当身あてみで重心をさらに崩す。

地面に手をついた金木に向かって、渡我は木の棒をナイフに見立てて首筋に向けた。

「わあ! 久しぶりに私の勝ちですなエ!」

「やられたー…また速くなったね、トガさん。」

「とは言っても、ケンくんはアレ使ってませんし。本気でやったら勝てる気がしません。」

「アレは組手で使うにはリスクが大きすぎるから…。それに、お互い本気だったらトガさんも個性ありになるから、たぶん奇襲で僕の負けだよ。」

「…受験まであと少し。このままでいけばトガさんもきつと合格できるよ!」

「ケンくんはいいですねエ…推薦決まっちゃいましたし。一人で受験寂しいです。」

そう、数週間前に金木には雄英高校からの推薦がきていた。

例の事件の功績が雄英高校の教員たちの目に止まったのだと電話で説明された。

正直、受験のために渡我にも内緒のトレーニングメニューまで一人でこなして肉体改造に挑んできたのに、と少し拍子抜けしてしまった。

渡我やクラスメイトはもちろん、中学の担任教師の喜びようは凄まじく、祖母や父も喜んでくれたので、金木は甘んじて推薦を受けることに決めた。

だが、鍛錬を自粛するつもりはない。

たしかに雄英合格は目標だったが、推薦とはいえ確実にではないだろう。

それに、この鍛錬はもつと先、ヒーローになった時のためのものだ。

あの日病室で誓った「二人で合格する」という目標達成のためにも、受験までは渡我と共にトレーニングを行うつもりだ。

組手で汗をかき、肩で息をしながら、二人は夜空を見上げる。

他の受験者たちもこうして鍛錬して今頃空を見上げているのだろうか…

そんな、口にすれば渡我に「ロマンチックですねエ!!」と言われそうなことを思いながら、金木は少し微笑んでぽつりと呟いた。

「がんばろうね。」

入試

2月中旬。

金木は現在、推薦入試の筆記試験に挑んでいる。

偏差値が驚異の79という最難関高校の受験問題は伊達^{だて}ではなく、各教科ごとに様々な知識を求められる。

だがまあ、匙^{さじ}を投げるほどのレベルではない。

金木はもともと秀才である。

そして、受験を決めてからは肉体改造と並行して勉強にも力を注いできた。

そんな金木にとっては、まあ想定内の範囲内と言える程度の問題だ。

推薦入試だからこの難易度なのか、一般入試も同じような難易度なのか…

「がんばってくださいねエ!!」と満面の笑顔で送り出してくれた一人の少女の顔を思い浮かべる。

(…これは…帰ったら最後にもう一回勉強会しないと…)。

優しい笑みを浮かべながら猛スピードで問題を解いていく金木に、周囲の受験者たち

は少し焦りを感じるのだった。

「筆記は以上で終了だ！次は実技!!」

ジャージに着替えた金木ら受験生は、屋外へと連れられ、実技試験に臨む。

周りを見渡すと周囲の受験者たちは自信に満ちた表情をしていて、金木の心の中で芽吹いた不安の種は、水を得た若葉の如く、さらにグングンと大きく育つ。

少し逸^{はや}る心臓を落ち着けていると、会場で試験官が説明を始めた。

（あの人：『プレゼント・マイク』だっけ…？雄英の教員は現役ヒーローって聞いてたけど、本当だったんだなあ。）

プレゼント・マイクが、金木とは180。違うテンションで語った試験内容は、要約すると6人ずつ行われる3kmのマラソンだ。

個性の使用もOK、というか個性を使わなければ完走は難しいということらしい。

鍛えた身体と自分の個性がどこまで通用するのか…

当然、不安はある。

だけど、ちよつと、ほんの少しだけ楽しみだ。

先程からプレゼント・マイクが何度か言っている「Plus プラス Ultra ウルトラ」という言葉。

スペインのローマ皇帝の言葉だったか。

さらなる前進、を意味する言葉である。

そして、「Plus Ultra」と共に語られた、ナポレオンの言葉。

『真の英雄とは、人生の不幸を乗り越えていく者のことである』

多くの偉大なヒーローを輩出した雄英高校らしい言葉に、少し気分が高揚していく。大きくひとつ深呼吸をして平常心を保つように努める。

少しの緊張と少しの期待を新たに芽生えさせながら、スタートの合図を待つ。

そして――

バン!!と号砲が鳴り響いて、金木と同じグループの受験者は一斉に走り始める。

目指すは3km先のゴール、さらにその先、雄英高校の合格。

そして、さらにその先に待つヒーローという夢に向かって、

金木はスターターピストルの号砲とともに駆け出した。

3 kmのマラソン自体はタイムを度外視すれば多くの受験者にとって簡単だ。

金木もその例に漏れず、日々その倍以上の距離を走り込んでいる。

スタミナは大丈夫だ。

だが、そのコースはマラソンというより障害物競走では？と思わせるような地形だった。

切り立った崖もあれば、至る所にトラップまで仕掛けてある。

受験者は個性を使い、それらを切り抜けていく。

6名ずつ審査されるこの実技試験。

全長の1/3ほどの距離：つまり1 km地点に着く頃には、先頭走者と最後尾では大きな差が開いていた。

同じ中学生、同じ推薦受験者といえど、実力の差は出てしまう。

金木は中間あたりで、自分のペースを保ちながら走っている。

マラソン上位者たちの個性や身体能力に素直に感心しつつ、金木も少しペースを上げる。

眼前には大きな岩壁があり、周囲の受験者は個性を使ってその岩壁をよじ登っている。

る。

(負けてられないな！)

金木もクライミングの要領で登りきる。

そして、岩壁の頂上から個性を全開にしてコース上の遥か先へと跳躍する。

『ゴール！受験番号103番1位です。タイムは全体の5位。』

『面接までの間、クールダウンしておいてください。』

実技試験が終わった。

人工音声アナウンスの通り、金木は6人の中で1番早くゴールラインを通過した。

今年度の受験者の中でのタイムは上から数えて5番目。

まあ上位5位以内なら合格圏内だろう。

今の全力をぶつけた結果だし、十分に上位と言える。

だが、全体順位の上位3人には、このレースでは何度やっても勝てないだろう。

現状に安堵しつつも、少し悔しく思う。

次の面接は受ける人数も少なくなっているので、おそらく早い段階で自分の番がくるだろう。

金木は思考を切り替えて、面接の応対について考え始めた。

雄英高校の推薦入試の制度は、一般的な推薦入試とは大きく異なる。

まず1つに雄英側からのスカウトがある点。

スカウトがあつたとしても、試験そのものは受けなくてはならないのでイコール合格ではないが、スカウトがある時点で見込みがあると見ていいだろう。

スカウトの基準になるのは、雄英高校からの正式な見解は発表されていないが、人を救つたことがあつたり、事件に巻き込まれたことがあつたりなど、おそらくヒーローとしての実績だと噂されている。

金木は実名は伏せられていたものの新聞やテレビなどのマスコミで一時期中学生ヒーローとして報道されたこともあり、今回、金木がスカウトをされたのはある意味セオリー通りと言える。

そして、推薦入試といえど倍率は高いというのが、もう1つ違う点である。

一般入試のヒーロー科が倍率300倍ということもあり、推薦入試も恐ろしい倍率を誇る。

全国の中学校は学校の面子にかけて生徒を推薦で雄英に送り出すが、合格できるのはほんの一握り。

筆記・実技・面接と、一般入試とは違って面接があるのも大きなポイントで、この個性飽和の超常世界において面接で自分をアピールするのは難しい。

テンプレ通りの優等生な回答が好まれるとも思えないが、奇を衒^てつたことを言えばいいというものでもない。

それでも、金木は模範回答を貫こうと決めており、質問を想定して何度も脳内シミュレーションを重ねてきた。

「金木くん、君がヴィランと対峙した時のことを教えてくれるかな？」

思った通りだ、いぶ早めに面接の順番がまわってきた。

だが、順番のことよりも、予測していた質問とまるで違う問いをぶつけられたことよりも。

その質問をしてきた、自称校長のネズミの姿に驚いていた。

だが、この世界には異形型の個性で常人とは異なる見た目をした人間も多い。

気を取り直して、事件を要約しつつ説明する。

「ふむ。では金木くん、個性とは何だと思う?」

「個性はその人だけが持つ特殊な能力です。ですが、現代において、本来その言葉がもつ意味の範囲を超えてしまっています。個性は自身の一部であるはずですが、個性に振り回されてしまう人が多い、と思います。良きにせよ悪しきにせよ、個性に影響されて人格に歪みをきたしている人もいます。僕は、個性を含めて自身を正しく認識することが大切だと思っています。」

「うん、そうだね。では、ヴィランについてはどう思う?」

「先の話と重複する部分もありますが、個性に振り回されているだけなら更生させるべきだと思います。悪いことをしたとしても、いつまでもその人が悪いままだと決めつけるのは早計です。ただ……人を傷つけるヴィランを相手にして情けをかけることはいけません。更生はあくまで拘束後に考えるべきことだと考えています。」

「なるほどね。じゃあ最後に、君にとってヒーローとは?」

「人を、救けられる人のことです。災害や事故での人命救助はもちろん、市民を襲う凶悪なヴィランがいるならそれを倒すことも必要です。でも、ヒーローや警察は悪人を排除する人ではありません。僕が本当に心の底から尊敬し、なりたいと思うのは、人々の心まで救つてしまうようなヒーローです。」

「僕は、人を救けられる人になりたくてここにきました!」

予期せぬ質問で出鼻くじかれ、想定していた模範回答を全て忘れて完全に自分の意見だけで答えてしまった。

ヴィランを更生させるとか、微妙に反感を買いそうな言葉まで言ってしまった。

……大丈夫だろうか。うーうーん。。。

金木は合格発表までの数日間、時折このように「うーうーん。。。」と我を忘れて頭を抱えてしまったのだった。

称辞

ついにこの日がきた。

今日は雄英高校一般入試の実技試験の日だ。

ある種の開放感を感じながら、渡我は雄英高校を見上げていた。

金木とトレーニングに励む日々は楽しかったが、勉強漬けの日々は苦痛だった。

(…勉強教えてくれている時のケンくんは怖いです。)

問題を何度間違えても、

もう嫌だ！と何度喚わめいても、

金木はニコニコと微笑みを絶やさなかった。

だが、勉強から逃げることは絶対にさせなかった。

金木の推薦入試が終わってから数日間はトレーニングも無しで、さらにドツプリと勉強

強ばかりさせられた。

しかも、なぜか一般入試の筆記試験が終わっても勉強会は続行された。

渡我は金木の新たな一面を垣間かいまみ見てしまったような気がしていた。

その仕返しとばかりに、渡我は金木に推薦入試の結果を見ることを禁止した。一緒のタイミミングで見たい、と何度も駄々をこねた結果、金木が折れたのだ。

(まあケンくんが落ちるなんて万に一つもないでしょうし！)

少し感慨かんがい深いのが、戦いはここからだ。

まさか自分が雄英を受けるとは考えていなかった。

でも今は、金木との誓いのためにも、

純粹に金木と一緒に学生生活を楽しむためにも、

揃って合格したいと思う。

さて、と顔を前に向けると、眼前でモサモサ頭の地味な少年が躓つまずいていたが、まあ関係ない、とばかりに渡我はスタスタと歩みを進めた。

先日の筆記試験では、終始苦悶の表情を浮かべ続けていた渡我だったが、今日は実技試験。

説明会が始まると、期待に胸を膨らませ、ニコニコと微笑みが溢れていた。

どうやら実技試験は、仮想ヴィランを倒してポイントを稼げばいいらしい。

(1P、2P、3Pの仮想ヴィラン、そして0Pのお邪魔虫ですか。)

(…ワクワクしますっ！)

説明が終わり、実技試験の行われる会場へと移動する。

受験者たちは今か今かとスタートを待ち構えていた。

同じ会場内で一人、ヒーロー志望とは思えないほどの殺気を放っている少年が目にした。

渡我は名前を知り得ないが、彼の名前は爆豪勝己ばくごうかつぎという。

爆豪は少しの緊張も感じていないような顔で、獰猛な笑みを浮かべてすでに臨戦態勢に入っていた。

(あの人強いんでしょねエ…)

と、急に「はいスタート」と軽い口調で試験開始が伝えられた。

実技試験が始まったのだ。

爆豪は急に始まったにも関わらず、受験者の群れから逸早く飛び出す。

そして、個性を使つてすでに仮想ヴィランを破壊し始めていた。

渡我を含め、受験者はまだ遭遇すらしていない。

にも関わらず、大きな爆発音を上げながらどんどんポイントを稼いでいるようだ。

(負けてはいられませんねエ：私も、ちよつと本気でいきます！)

渡我也負けじとその身体能力を生かして仮想ヴィランを探して縦横無尽に会場を駆け回る。

：いた。1Pのやつ——！

爆豪の爆破によつて倒壊したビルの残骸から鉄パイプを拾う。

そして、そのまま仮想ヴィランへと迫る。

機械仕掛けの仮想ヴィランに対して意味があるのかは分からないが、まず死角へと潜り込む。

その勢いのままに下から鉄パイプで突き上げる。

そして後ろへと回り込み、鉄パイプをメインカメラのある頭部と思しき箇所叩き込む。

少し手が痺れたが、どうだろうか？

これで倒せた？まだなら次は——

と、次の動きに入る直前、仮想ヴィランはその動きを完全に止めた。

(ふむ、見た目ほど強くはなさそうです。)

そう判断した渡我は、次の標的を視界の端に捉え、素早くその身をひるがえ翻して違う仮想ヴィランへと迫る。

開始から数分。

次々と仮想ヴィランを発見し、破壊していくうちにその動きは洗練されていく。死角に潜り込んでから一撃で破壊し、その動作の中で次の標的を見つけて動く。

渡我の近くで試験に挑んでいた受験者は、その流れるような動きに圧倒されていた。彼を含め、多くの受験者にとって、そもそも試験とはいえ実戦は初めてだ。

それに自分の今のポイントで合格できるのかどうかも分からない。

そんな不安からくる苛立ちで、彼は内心で渡我に悪態をつく。

(あいつマジで中学生か？なんだよあの身体!?!しかもまるで暗殺者みてーな動きだな…)

(てかさつきから何ポイント稼いでんだよクソっ)

そんな彼の背後から3Pの仮想ヴィランが腕を振り上げて近づき――

「あぶないですよっ」

全く視覚で捉えられないまま、すれ違いざまに渡我に声をかけられる。

その声を認識するのとはほぼ同時に、背後で仮想ヴィランが倒れる音がした。

少し離れた場所では、爆発音が絶え間なく鳴り響き、爆炎が轟々と上がり続けている。

(あ、これは受ける高校間違えたな…)

なぜか達観した表情で、彼は合格を諦めた。

試験終了の合図が響く。

渡我はようやくその動きを止めた。

少々張り切りすぎたせいか、呼吸は荒れている。

Tシャツを破らんばかりに隆起した胸筋が規則正しく上下している。

汗をぬぐう。

……ヒゲがちくちくする。

そそくさとトイレに移動し、身につけていたボディバッグから着替えを取り出す。

そして、筋骨隆々のヒゲ男の身体をドロドロと溶かして、正真正銘15歳JCのトガヒミコ（裸体）が現れた。

実は、試験が始まる前に、渡我はあらかじめ変身の個性を使っていた。

試験の対策として、金木の協力のもと金木の父の同僚だという警察の武闘派の方に頼んで血液を提供してもらったのだ。

もちろん、試験前に雄英高校にも申請済みである。

血は金木のものと違って不味かつたし、見た目も全くかわいくない！と何度も金木にごねた渡我だったが、贅沢は言っていられない。

こうでもしなければ、ここまでポイントは稼げなかつただろう。

何ポイント稼げば合格なのかは分からないが、まあこれだけ稼げば大丈夫だろう。

問題は筆記試験の結果のみ……。

トガヒミコ 敵ポイント67 救助ポイント10

数日後。

雄英高校からの届いた郵便物を手に、金木と渡我は金木の自室で向かい合っていた。おそらく合否通知だろうその郵便物。

金木の分は随分前に届いていたものだ。

どうせなら一緒に見たい！という渡我の意見に押されて、封を開けるのを自ら禁止してきたのだ。

目の前に結果が分かる手段があるのに、それを見られないというのは中々に酷だった。

金木の精神力が試された期間でもあった。

そして今ようやく合否を確認する。

中に紙以外のものが入っている感触があるが、なんだろうか？

「いよいよですねエ…緊張しちゃいます。」

「うん…僕も面接でのミスがあるから、ちょっと不安。」

「じゃあ、いっせーので、で開けましょう!!」

「よし……………いくよ、いっせーの——」

「でっっ!!」

二人の掛け声とともにビリビリと封書の破れる音が鳴る。

そしてすぐに、コロンツと何かテーブルに落ちた音がした。

『私が投影されたっつ

!!!!!!

』

「いひひっ!!」

思わぬ機械の出現と、思わぬポリウムと、そして思わぬ人物の登場。

全てにおいて予想の斜め上を行く合格発表に、金木と渡我の声帯からはおそらく生まれて初めて出たであろう音階高めの奇声上がる。

まさかのオールマイイト登場で驚いたが、直々に試験の寸評を聞かせてくれているようだ。

2人は各々に小型プロジェクターを持ってその寸評に聞き入った。

結果は二人とも合格。

この数日間の心労から解放されて、なぜかドツと疲れた気がした。

「まさか、オールマイイトが教員として来るとは…」

「そんなことより！ケンくん、合格おめでとうございます!!」

「ありがとう。トガさんも、おめでどう!」

「お祝いしましょう!!」

金木と渡我は家族に合格を伝えたあと、目標と誓いの達成を祝い、2人だけの小さなパーティーを開いた。

すぐに金木の祖母や渡我の両親、そしてどこで聞きつけたのかクラスメイトたちまで金木家に集合し、ドンチャン騒ぎになってしまったので、二人だけのパーティーだった

のは数分間だけだが。

渡我にとつても合格したことは嬉しい。

もう勉強を強制されることがないのも嬉しい。

トレーニングの成果を発揮できたのも嬉しい。

金木と同じ学校に通えることは一番嬉しい。

でも、こうしてみんなが合格を一緒に喜んでくれるのは、その次に嬉しかった。

閑話

設定など

【登場人物】

金木 研 かねぎ けん 13歳

- ・ 有馬さんとの決闘後に死亡↓転生。
- ・ 生まれた瞬間に記憶喪失。
- ・ 肉体は喰種のような硬さではない。
- ・ 普通の食事可能。
- ・ トガと同じ中学校。
- ・ 早く無双させたい。

個性／身体活性(？)

備考／Rc細胞は血中のみ存在しており、赫包は無し。この世界のRc細胞は人体に有害で、母親の死因はこれ。トガちゃんが最初に血舐めて倒れたのも、これが原因。しかしトガちゃんはずなぜか克服。血を摂ることがトリガーになる個性なので耐性を獲得できた、ということにしておきましょう。

さいぼうこはる
細包 向晴 75歳

- ・ 金木の母方のおばあちゃん。
- ・ 名前は完全にイメージだけ。縁側に射す木漏れ日みたいなあつたかいイメージ。
- ・ 大福が好き。コーヒーのお供は大福。
- ・ 紅茶も好き。
- ・ ほたほた焼のイラストみたいな、かわいらしいおばあちゃんそのものの風貌。
- ・ 晴れ女。

個性／細胞壁

皮膚表層の細胞を増やして防御力を上げられる。でもちよつと太って見えるのではほとんど使わない。こけそうになつた時とかだけ無意識に使う。使い道次第では強個性だが、争い事とは無縁の性格。この個性設定に意味はない。

備考／金木母、つまり娘を亡くした時、代わりに生まれてきた金木のことを命に替えでも守ると心に決めた。金木のことを溺愛しており、もつと甘えてほしいと思つているが、精神的に自立している金木を誇りにも思つている。金木のおじいちゃん、つまり旦那と同じく読書家の金木を嬉しく思つているが、男の子はもうちよつとやんちゃでもないのに、とも思つている。

※ちなみにおじいちゃんは

細包さいほう 雨読うどく

享年60歳

・ 金木の母方のおじいちゃん。

・ 読んで字の如く本の虫。名前は本好き設定そのまんま。3秒で考えた。

・ 蔵書いっぱい。

・ 自分の個性に興味がなく、おばあちゃんにも話していないが細胞関連のもの。

・ おばあちゃんと同じく争い事とは無縁の性格。

・ ちなみに紅茶派。

・ 雨男。

備考／金木が産まれた時にはすでに他界している。本編とはマジで何の関係もない。顔とかのイメージすらない。金木を読書漬けにするためだけの存在と言える。あと、おばあちゃんとおじいちゃんの名前を晴れと雨に分けたのも、別に何の意味もない。

金木かねぎ

啓示けいじ

47歳

・ お父さん。

・ 正直めんどくさくなくなって3秒で付けた名前。(おじいちゃんと合わせて6秒)金木母

から啓示を受けた的な。あと刑事だから。ノンひねり。

・金木母と出会った頃は26歳、結婚は29歳。

・見た目は、現在は無精髭とコートが似合うダンディなおじさま。ちよつと赤みがかった黒の短髪。

・昔は赤髪ツンツン眼光ギラギラのちよつとしたDQNヒーロー。

・個性は『肉体強化』。超絶シンプルなだけに活動の幅は広いが、若い頃は血気盛んで戦闘以外にあまり興味がなかった。

・ヒーロー名は流血ヒーロー『ゴアポリス』。肉弾戦ばかりなのでよく流血していそうなことと、ヴィランを追い詰める姿が昔の刑事ドラマっぽいことから。だせえ。

・ちなみにヒーロー科を留年している。素行の悪さと、戦闘以外のスキルが低かったせい。戦闘スタイルと態度の悪さでバカだと思われがちだが頭は悪くない。この設定に意味はない。

・あと、警察に入り直す時に大学に通い直しているので学生歴が長い。

・原作の塚内さんらとは管轄が違うため面識なし。

備考／金木母、つまり妻の他界後は、だいぶ荒れて一時期は昔のように荒つぽくなるが、精神的に成長したことで己を律する。だがトラウマは深く、金木が3歳になるくらいまでまともに顔も見ることができなかった。カウンセラーだった妻が生前よく言っ

ていた「心の傷に一番効くのは時間」という言葉通り、3年かけてようやく妻の死と子どもの存在を分けて受け止めることができた。だが、それからはその3年間を悔いるがあまり、金木にどう接していいのか分からなくなり、日々の忙しさも手伝って疎遠に和解した今も未だに、もっと早く自分から行動すべきだったと後悔は引きずっている。警察は基本個性の使用はしないが、徹夜続きで身体が怠い時や犯人を追いかける際など、他人に攻撃する用途以外ではこつそりちやつかり個性を使っている。後輩や部下に慕われているが、よくそのことをやんわり注意されている。中2のくせに達観した金木と対比させるために、ちよつとダメ親っぽい不器用な父親になっちゃった。ちなみに結婚してすぐの頃、「君に出会えたことは俺にとって神からの啓示だった」と言ったのを爆笑されたことがきっかけで一度だけ夫婦喧嘩をした。

金木^{かねぎ} 清晴^{せいせい} 享年32歳

・お母さん。

・名前は心中土砂降りだった金木父にとって光だっただろうことから清らかな晴れで清晴。ハイセっぽいやん！リゼっぽいやん！という作者の深夜テンションの被害者。もちろん旧姓は細包。

・金木父と出会った頃は24歳、結婚は27歳。

・個性は『細胞活性』。鬼つよ個性。触れた相手の体内にある細胞をある程度活性化でききる。活性化させる細胞次第で、マジで触れるだけで殺せる。活性化させることで治療も可能。その代わり細胞に対する知識が必須、そして自分には使えない。

・地味めだが美人。童顔。

・慎ましいお嬢様のような風貌で、思慮深さや強さも持っているが、実は野菜嫌い、読書嫌い、ゲーム好きという子どもっぽい一面もある。

・ヒーロー名は薬毒ヒーロー『シアンセーゼ』。毒にもなるシアン化物と、名前に青が2つ入ることからシアン、名前のセーセ足してシアンセーゼ。超かけえ。オリジナルの中で唯一お気に入りヒーロー名。

・コスチュームも青っぽい。

・髪はちよつとだけ青みがかった黒髪ロング。

・メガネ（視力低下の原因はゲームのやりすぎ）

備考／自身の個性のこともあり、医療の知識が豊富。それを活かしてヒーロー活動後半は救助に重きを置く。ちなみにヒーローになる前は高校でヒーロー科卒、大学で医学部卒で、ヒーローの資格とほぼ同時期にカウンセラーの資格は取得済み。頭いい。ヒーローとしてはデビュー当時そこそこ有名になったが、影で毒の薔薇と呼ばれていた。個性の使い方と、自分のヒーローとしての在り方に悩んでトゲトゲしかったため。後半は

救助活動やヒーラーとして活躍していたため、影での呼び名が戦場の女神に変わった。彼女に憧れる者は多かつたが、高嶺の花だと思われていたため、本人に自覚なし。ヴィランになった婚約者は幼なじみだった。医学部と一緒に受けたが自分だけ不合格で、才色兼備で完璧な彼女と自分を勝手に比較して勝手に堕ちていった。ちなみに金木父と結婚したと聞いた周囲の者は、DQNが美人と結婚する不条理は今も昔も変わらないと嘆いた。カウンセラーになってからは、有名になることはなかったが彼女に感謝している者は多い。しかしサーセイ先生と呼ばれるのが実はちよつとバカみたいで嫌だなあと思っていた。キヨハルと読まれるのも嫌。晴れ女。

渡我とが 被身子ひみこ 13歳

- ・ 血塗れ男子好き設定がハマリ役！と思ってヒロイン起用。
- ・ 原作で事件を起こす前。
- ・ 個性のことを考えると、トガがヴィランにならずに幸せになるには金木みたいな相手じゃないと無理じゃん！幸せになってくれよ…という私の個人的な願望の犠牲者。
- ・ 漢字表記するのがすごい違和感。
- ・ 口調がよく分からん。
- ・ 敬語の女の子って、いいよね。

・チウチウしたい。

備考／作者の圧倒的ご都合主義によってRc細胞に耐性を獲得しました。もちろん喰種化はさせません。

上乗瀬 強勝 24歳
うわのせきようかつ

・中学生の金木にやられたヴィランの人。

・現在は服役中。

・実は割と強キヤラ。

個性／恐喝

相手に与えた恐怖の分だけ自分の戦闘力を上乗せする。上乗せなので元々の自力から下がることはないが、相手の心象次第で戦闘力が変わるので、相手の恐怖を引き出すために、適度な体格や筋肉は維持し、乱暴な言葉遣いをして派手な見た目にしている。恐怖を測ることができる対象は一人だけなのでタイマン勝負が好き。

備考／父親の個性が『威嚇』。相手をビビらせるだけ。自分がビビった相手には通じない。母親の個性が『上乗せ』。自分の怒りを力に上乗せする。名前は、己に勝つ強い男になれという意味で強勝とつけた。だが、若くして結婚した両親2人は互いに精神が子どものままで、夫婦仲は悪く、母親は自分の個性を忘れて怒りを家庭にぶつけてしまう。

父親はそれにビビってしまい、個性のこともあり、離婚することに。上乘瀬は母親に引き取られるが、母親は子どもにも虐待まがいの体罰を加えるようになる。だが、早期に通報され、彼は養護施設へと送られる。母親とはそれ以来会っていない。早期に通報されたとはいえ、子どもにとっては長く、地獄のような日々だった。その間に一度自宅から逃亡し、パトロール中のヒーローに助けを求めているが、ヒーローは親に注意された子どもの癩癩だと判断して家に帰してしまう。そこからヒーロー嫌いになった。

掛山車 かけだし ひろ ヒロ 25歳

・ 上野瀬にやられてたヒーロー。

・ 駆け出しヒーロー。

・ 名前もそのまま。個性の山車と10倍ってことで掛け。で駆け出し、的な。

・ ヒーロー名は力持ちヒーロー「エンノシタ」。かわいそう。

・ コスチュームはスマイルマークが前面にプリントされた襟付きノースリーブ。肉球グローブ。「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ」に憧れているので、それっぽい衣装だがスカートはさすがに無理なので、下はカーゴパンツとゴツめのブーツ。

個性／山車

重い荷物を運べる。自分の体重の10倍までのものなら持ち上げることができる。

戦闘に活かそうとすると相手を大怪我させかねないので災害現場での救助がメインの仕事。ちなみに怪力ではなく、重いものを持てる個性なので、それ以外の用途では個性の恩恵を受けられない。

備考／災害救助などの場面ではものすごく活躍できるヒーロー。「ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツ」に憧れている。個性が体重の10倍までの許容重量なので、太ろうと必死だが、代謝が良すぎて全然太れないのが悩み。かませ犬感がすごい。でも実は学生時代の成績は優秀で、正義感が強い。相手のことを気遣わなければ、重いものを投げつけるなどの攻撃もできるので弱いわけではない。ただ、正義感が強いので自分が窮地に陥ったとしても、それをするのではない。所属するヒーロー事務所からは1人でパトロールすると言われるが、溢れる正義感を抑えられず、1人でパトロール。そして路地裏付近で喧嘩に発展しそうだった上乘瀬を止め、あの事件に繋がる。事件後、マスコミなどからバッシングを受け、市民からも雑魚扱いされるも、めげずに己を磨き続けている。

【各話のタイトル（造語集）】

1話 「珠譬」
リスタート

王十朱、譬↓リスタート

「珠のようにかわいい」という譬えたと（例え）から。

赤ちやんカネキはさぞかわいかるう。

音読みすると、「しゅ」「ひ」。

秘密を抱えて生まれてきて守秘、というのと、記憶の面でも喰種の力の面でも本来のカネキを封じてしまっているという意味で珠皮ともかけています。

2話 「訣儘」
けつじん

訣（けつ）：わかれる、わかれを告げる

儘ならない父という内容と、ママと死別していることからとりました。

竭尽（けつじん）：尽きること。力を尽くすこと。

パパが警察官として尽力しているところからです。K O J I T S U K E !!

3話 「跋濁」
バッドラック

跋↓ふみにじる、濁↓濁点（だくてん）

バツ十 “ +トラック↓バッドラック↓トラックに踏みにじられて超不幸！的な。

このタイトル一番好き。超かつけえやる。

4話 「惹起」
じやっき

惹↓ひかれる、起↓はじまり

惹起↓事件などを引き起こすこと

トガがカネキに惹かれ始めて、後に事件を引き起こすことから。

造語じやなく、ちゃんと存在する熟語ですね。

5話 「憚はばかることな勿かれ」

「過ちては改むるに憚ること勿れ」という論語の言葉から。

まさかの漢文。意味は、間違ったことをしたら反省することに躊躇しちやいけないよ、つてこと。

パパがカネキとの関係を反省してるならさっさと関係改善しろということですね。

6話 「鰥かんか寡か」

これもちやんと存在している熟語です。

意味は妻を失った男と、夫を失った女。

妻を失った男は。パパ、夫を失った女は婚約者を失ったママ。

つまりカネキの（この世界での）両親のことです。

7話 「偏へんしん心しん」

ちやんと存在している熟語シリーズ。

意味は本来あるべき中心点と比べて位置がずれていること。

ヴィランの心、トガの心が個性の影響で偏ってしまったていることから。

8話 「変身」^{へんしん}

ちやんと存在している熟語シリーズ。

そして（へんしん）シリーズ。

我らがトガちゃんの個性まんま。

原作でカネキが自分をカフカの変身に例えていたこともあるし、カネキの境遇とかも考えるとトガちゃんホント正ヒロインですね。

9話 「變櫛」^{へんしん}

（へんしん）シリーズの造語。

變↓変の旧字体。かわる。違うものになる。異常なこと。非常手段。

櫛↓アオギリ

非常手段として無意識に喰種の力を使うけどアオギリとは違う、人は殺さない。そんな意味と変身をかけて。

10話 「血掟」^{けつてい}

血の掟。カネキとトガの約束。

何回書き直してもトガがカネキを助けた理由に納得いかなかったけど、もうこれで決定！ってことで血掟（けつてい）。

11話 「立志」（りっし）

ちやんと存在している熟語シリーズ。

ヒーローになることを決めた回なので。マジでそのまま。

12話 「从瑕」（しゅうか）

从↓したがうとかそういう意味の漢字。

瑕↓完全ではない玉のこと。転じて不完全な王様。そして罪や咎（とが）という意味もある。

まだ不完全な王様のカネキに従うトガ。つてことですね。

読みは「しようか」。カネキとトガが鍛錬して昇華していることと、意見をやりとりするって意味の上下（しようか）で委員長とみんなで見解をやりとりしてカネキに認めなさいしたことにかけて。

13話 「入試」（にゅうし）

SONOMANMA!!

14話 「称辞」（おめでどう）

称辞↓「たたえごと」と読む熟字訓です。

合格おめでどうってことで。

【この先について】

基本的に金木くんにはこのあと何度も辛い目にあってもらおう予定です。

そしてそれを乗り越えて金木無双してもらいます。

この小説のテーマは「ぼくのかんがえた最強のカネキング」です。

あと、注意です。

処女作です。

オリキャラ、オリ個性、オリ設定、オリ話いっぱい出ます。

というか出さないと無理。

基本は原作準拠でいきますが、オリジナルのストーリー入れないと落とし所が分からない。
ない。

原作のストーリーに沿ってちゃんと落とせる力は、私にはない！

そしてさらにオチはまだ決めてない！

どこまで続けるかも未定！

現段階で25話くらいまで書き進めてますが、原作の3巻半ばくらい。

いや、どんだけ無駄な話詰め込んでんねーん。

更新のペースは少し落ちると思います。

でも投げ出すことはしないつもりです。

あ、オリキャラはあんまり出しやばってほしくないなので、なるべくセリフ減らすか早期退場していただきます。後に登場するかもしれないませんが。

あと一番大事なこと。

東京喰種もヒロアカも大好きです。

世界観を壊すことも、原作キャラを崩壊させることもしたくはありません。

でも、クロスオーバーする限りどこか変わってくると思います。

あと根本的に、私が原作のキャラを把握しきれていない可能性もあります。

不快に思われたらすみません。

稚拙な文章、クソ遅い展開、ありきたりな表現：などなど、気になるところを列挙しだしたらキリがないほど駄作だと自負しておりますが、少しでも面白いと思っていただけたら嬉しいです。

入学―戦闘訓練編

入学

春。

陽光にあたためられた風が頬を撫で、歩道に植えられた花を揺らしている。

風に揺られながらも、その鮮やかな色彩をどこか誇らしげに見せつけているようで、まるで僕らみたいだと金木は思う。

合格発表から2ヶ月、ついにこの日がやってきた。

金木と渡我は現在、雄英高校へ初登校中だ。

新品の制服に袖を通し、大きな期待と少しの緊張をその心で膨らませながら、談笑している。

「ケンくんと同じクラスが良かったです…。」

「揃って合格できたけど、クラスは別々になっちゃったね。」

「なんでケンくんがA組で私がB組なんですかねエ…何者かの陰謀を感じます…。」

「陰謀って…。まあクラスは違っても合同授業なんかもあるだろうし、学校終わったら

部屋も隣同士だし。」

もう何度目か分からないやりとりで少し苦笑しつつ、金木は渡我を宥^{なだ}める。

金木はA組、渡我はB組と分かった時から、少なくとも10回以上はこの会話をしている。

だがまあ、口を尖らせて寂しそうにする渡我を純粹にかわいと思う。

まるで飼い主が少し部屋を離れただけでこの世の終わりかというくらい悲しい声で鳴く子犬みたいだ、と思うが、これは本人に言えば怒りそうなので言わない。

金木も渡我も、通学のために学校から程近いアパートに部屋を借りている。

渡我の強い希望に流される形で、部屋は隣同士になった。

こちらに越してきてからは、毎朝管理人さんや他の住民の方に「おやおやまあ」と生暖かい目で見られている。

金木がそんな近隣住人のことを思い出していると、渡我は顔をパアッと明るくさせて言った。

「この学校にはどんな人たちがいますかねエ？」

「楽しみだね。推薦組ではたぶん僕他に4〜5人くらいいな気がする。みんなすごい個性の人たちばかりだったよ。同じクラスになったら色々教えてもらいたいなあ。」

「ふむ、ケンくんがそこまで評価するとなると気になりますねエ。一般の方で受かって
そうなのは同じ試験会場にいた爆発系の個性の人くらいです。我が強そうであんまり
仲良くはなれそうになかったですけど。」

とところでっ!!と前置きした後、渡我は「推薦組にいたすごい子って女の子ですかっ
?」、「同じクラスになった女の子に手を出しちゃダメですよ!」と学校に着くまで金木
を捲まくし立て続けた。

ここまで片思いの相手に自分の気持ちを開けっ広げにできる女子も珍しい。
渡我が教室に入るのを見届けた後、金木は自分の教室の前で一呼吸する。

(……………さて。)

(いよいよ始まる。僕の、ヒーローになるための3年間は…)

決意を新たに、バリアフリーなのか巨大に過ぎる教室のドアを少し開けた。
少し早かったのか、教室には4人しか生徒がいない。

赤い髪の元気そうな男の子と…

ピンクの肌をした同じく元気そうな女の子…

そして推薦入試の時に見た2人。

元気そうな2人は、同郷なのか仲良さげに談笑している。

ポニーテールの女の子は分厚い本を読んでいる。

もう一人の髪色半タイケメンの子は頬杖をつけてブーツと外を見ているようだ。

(よし!)と気合いを入れてドアを開け、一步を踏み出す。

すると、4人の視線は金木に注がれる。

「おーきたきた新しい人!おはよう!あたし芦戸三奈つ!よろしくね!」

「おつす!俺は切島鋭児郎!よろしくなつ!」

「あ、おはよう。金木研です。よろしく。」

元気な2人に微笑みながら自己紹介を返すと、ポニーテールの女の子が本を閉じて自己紹介を続けた。

「私は八百万百と申します。金木さんも推薦組でしたわよね?試験の時間にお見かけしましたわ。よろしくお願いします。」

「あ、僕も覚えてます。すごい個性ですつと感心しきりだったよ。こちらこそよろしくね。」

「…同じく推薦組の轟焦凍だ。」

挨拶しなければいけない流れだと判断したのだろう。

残る一人も金木に向けてボソリと一言だけ自己紹介を放つ。

「試験で見てたよ。個性ホントにすごくて、よく覚えてる。」

「すまん、俺は覚えてない。」

「あ…そつか、僕はそんなすごい個性でもないし、順位もたいしたことなかったから。」

意外とハッキリ言うなあ、と思いつつも、実際自分は目立った記録を残していないので仕方ないかと納得する。

しかし、今年度の推薦組合格者のうち3人がこのクラスとは…。

あの風の個性の人はB組なのだろうか？

「お前ら3人とも推薦組かよ！すげえな！」

「あたしらは一般入試組！切島とは同じ中学だったんだー。」

推薦と一般での試験内容の違いなどで談笑していると、次々に生徒が増えていく。

そのたび軽い自己紹介などを交わしていく。

個性という超常が当たり前の社会なのだから、そうなるのは必然なのだが、やはりみんな個性的だなという印象だ。

ややあって、教室の入り口の方で寝袋から担任が現れた。

入り口付近に溜っていた数人となにやら話していたようだが、こちらには聞こえてこ

ない。

「担任の相澤消太だ。あいざわしょうたよろしくね。」

「早速だが、コレ着てグラウンドに出ろ。」

次はこちらにもギリギリ聞こえる声で名乗る。

寝袋から現れたかと思えば、その寝袋から体操服を取り出し、けだる気怠げに指示を出す。

この人が担任か…。

この人もプロヒーローなんだろうか？と疑問に思いつつ、周りの生徒たちと共に準備を始めた。

「個性把握テスト？」

相澤は、入学式もガイダンスもすつ飛ばして、個性把握テストなるものを課してきた。曰く、生徒の指導方針は英雄の教師の権限である、ヒーローになりたいなら青春めいたハイスクールライフは諦めろと。

行われる競技自体は中学時代にやっていた身体テストと同じだ。

だが、個性を使用してそれに挑めば、自ずと結果には大きな差が生まれる。まずは爆豪と呼ばれた少年が個性を発動させてボールを投げる。

耳をつんざくような爆発音をたてて、ボールは勢いよく彼方へと飛ばされた。なるほど、すごいな。

爆発の勢いと爆風であれほどの飛距離を…。

クラスメイトたちから面白そう！と声上がる。

たしかに自分の実力を試すには絶好の機会だと思う。

合格が決まってからトレニングは絶えず続けてきたし、今の自分の実力を知れば先に進む道標になる。

だが、「面白そう」という言葉は相澤先生のお気に召さなかったようだ。

「トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、除籍処分としよう。」

その言葉に僕を含めた誰もが驚愕し、身を硬くする。

テストは全部で8種目。

体力測定である以上、金木の個性『身体活性』ならば、おそらく最下位はありえない。

だが、こういう身体能力のみに特化した個性ばかりではないだろう。

「合理性」という言葉を多用する割に、この条件は不合理では…と少し反感を抱いてしま

だが、テストが進むに従って、その考えは間違っていたと感じた。

どの個性も、持ち主がその特性を一番よく理解している。

八百万さんのように種目に合わせた何かを創造したり、青山くんのように50m走でレーザーを後ろに発射したり、峰田くんのように謎のモギモギを反復横跳びに使ったり。

どんな個性も、要は使い方次第なのだ。

自分の個性をしっかりと把握し、状況に合わせて応用する…確実に必要な技術だ。

プロのヒーローになれば、現場では自身だけでなく多くの命を背負う。

そのヒーローを育成する現場において、学生だからという甘えは許されない。

そもそも雄英高校に入学できている時点で、ここにいるクラスメイトたちは優秀なのだ。

みんな個性を効果的に発揮し、記録を伸ばしていく。

…ただ一人を除いて。

(緑谷くん…だったかな?)

(個性が競技に向いてないのか?)

(彼だけ個性使ってない…このままじゃ…)

本人も焦っているのか表情が曇っている。

しかし、一転。

決意を込めた目が変わる。

そして、ボールを投げた——が、記録は46m。

その記録に誰もが疑問を浮かべるが、本人が一番動揺していた。

「個性を消した。」

個性を使ったはず……と動揺する緑谷に向かって相澤は抑揚のない声で伝えた。

見ただけで他人の個性を抹消する個性、抹消ヒーロー『イレイザーヘッド』。

それが相澤先生の正体だったらしい。

緑谷は個性の制御が上手く出来ず、個性を使うと反動で体を故障してしまうらしい。

他人を救うのはずの力を使えば、他人に救けてもらわなければなくなる。

それは本末転倒だ。

緑谷には悪いが、自分自身思うところもあり、相澤の言葉は正しいと感じた。

本人もそう感じたのか、悔しそうな顔をしている。

そして第2投目、緑谷は個性を指先のみで発動し、大記録を出した。

「まだ動けます!!」

人差し指を痛々しく変色させながらも、緑谷は相澤に堂々と啖呵を切る。

その痛々しくも勇敢な表情に、思わずこちらも微笑んでしまった。

途中、爆豪が緑谷に突っかかりたりと一悶着あったが、テストは全種目が終わった。相澤が持つ端末から結果が発表される。

- 1 八百万 百
- 2 轟 焦凍
- 3 爆豪 勝己
- 4 金木 研
- 5 飯田 天哉
- 6 常闇 踏陰
-
- 20 峰田 実
- 21 緑谷 出久

なんとか4位だが、上の3人とはだいぶ差がある。

轟くんの個性は汎用性が圧倒的で、正直無敵に感じてしまう。

八百万さんの個性にいたっては、もはやチートと呼んでも過言ではない。爆豪くんの個性も弱点らしい弱点が見当たらない。

とうか上位3人は、個性の優劣だけでなく、個性をどう使うかの判断力や自分の身体を動かすセンスが抜群に高い。

つい、思考に没頭していると、相澤から「合理的虚偽だ」という言葉が飛び出した。さすがに除籍はなかったか？と安堵する。

緑谷くんが除籍にならなくて良かった。

彼にはなぜだか少し、同じ匂いを感じてしまう。

個性も扱い切れていないとはいえ、同じ身体強化系だろう。

仲良くなれたらいいなと期待しつつ、雄英高校入学初日は過ぎていった。

併雄

偏差値79。一般入試の倍率300倍。

一線級のヒーローを育成するためにエリートが集まる高校。

それが雄英高校ヒーロー科だ。

そんな特殊な学校にあつて、授業内容は概ね普通の学校と変わらない。

プロヒーローであるプレゼントマイクが行う英語の授業を受ける。

同じくプロヒーローのランチラッシュがいる食堂で昼食を摂る。

これが普通かと問われればそれは違うが、授業の内容自体は至つて普通だ。

だが、他と大きく違う点、それが「ヒーロー基礎学」という授業。

単位も一番多く、一生徒としてもヒーローの卵としても外せない授業。

入学後初となる、そんなヒーロー基礎学の授業が今日の午後から始まる。

午前の授業が終わり、現在はランチタイム。

金木は食堂に来ていた。

午後からのヒーロー基礎学の授業に想いを馳せつつ、昼食に舌鼓したつづみをうつ。だが、その表情は憂鬱そのものだ。

ランチラッシュが作る料理は絶品で、さすがにクックヒーローの名は伊達ではないと思う。

では、なぜこんな表情をしているのかと言えば、自分の周囲だけ喧々囂々けんけんごうごうとしているからだ。

そして、その騒音とも呼んで差し支えない声は全て自分に向けられている。

「金木い！昨日のあの子とは付き合ってるの!？」

「おい金木！抜け駆けはズリイぞ！」

「…チツ!!リア充が!!」

「金木ちゃん、意外と手が早いのね。」

こうなってしまった原因は、昨日の学校帰りのこと。

トガさんと一緒に帰っていると、芦戸さんに目撃されたことにある。

いや、普通に帰っていたのなら問題なかったはずなのだが。

……………回想……………

「ケンくん!!なんで入学式もガイダンスもいなかったんですか?」

学校を出て少し歩いたところで、後ろからトガさんが駆け寄ってきた。

「あ、トガさん。待ってれば良かったね、ごめんごめん。A組は個性把握テストつていうのをやってたんだよ。」

「はえ。いいですねエ、A組は。B組はなんというか落ち着いた方が多いというか、興味が沸く人がいないというか、そもそもケンくんがいないというか。A組が良かったです!!」

「…ははは。」

「というわけで、ケンくん成分を摂取させてくださーい!!」

「ちよ!?!トガさん…?!」

「あ、金木じゃん!おつかれー……………つて、え?…」

急に飛びついてきたトガさんに不意を突かれ、押し倒されてしまう。

そこに、タイミング悪く芦戸さんが現れた。

2秒、いや3秒だろうか。

その場の誰もが声を発さず、状況の理解に努める。

このたつた3秒は、少なくとも僕にとつてはものすごく長かった。

そしてその沈黙を破つたのは、やはりというかトガさんだった。

僕の肩に無言で噛み付いたのだ。

「痛アっ!!?」

わりと本気で噛んだんだろうけど、服の上からだし、血が出ることはなかった。

それでも、ものすごく痛いけど。

「この人、誰です?」

心なしかトガさんの機嫌が悪い。

芦戸さんに殺気の籠こもつた目を向けている気がする。

芦戸さんは「ひう」と一声鳴いた後、僕に助けを求める目を向けてきた。

助けを求められれば救けるのがヒーローである。

「この人は芦戸さん、A組のクラスメイトだよ。…芦戸さん、こっちはトガさん。えっ

と、中学からの同級生で、今はヒーロー科のB組だよ。」

「…え、あー、芦戸です。よろしく?」

「……………」

「……あー、その、芦戸さん今日はお疲れ様でした。それじゃまた明日……」

「あ、うん？また明日……」

歯切れが悪すぎるまま芦戸さんと別れ、一言も発さなくなってしまったトガさんと共に帰る。

家に帰って血を届けに行ってから少し機嫌が直ったようだったが、なぜかどつと疲れた。

そして今日、登校してからやたら芦戸さんから視線を感じると思っていたら、食堂でついに捕まって質問攻めにされてしまったのだ。

そこに上鳴くと峰田くん、蛙吹さんも加わって、この現状である。

「トガさんとは付き合っていないよ！中学が一緒だったたり、2人で事件に巻き込まれたり、雄英受けるために毎日一緒にトレーニングしてたから仲は良いけど……」

「お〃 おん!?!それは自慢かカネキイツ!!」

「ザ☆リア充。天に召せ。」

上鳴くと峰田くんは憤怒に顔を歪めてドス黒いオーラを放っている。

助けを求めて芦戸さんを見れば、天高く拳を掲げて「恋バナきたあああ」と叫んでい

る。

「つまり、トガちゃんはカネキちゃんに片想いしてるけど、カネキちゃんはその気がないのにトガちゃんを懐柔かいじゆうしてるってことね。不潔だわ。」

「KAIJU!! FUKETSU!!」

蛙吹からのトドメの一撃で、金木は単語を復唱するだけのポンコツと化した。

明後日の方を見ながら、フケツ…カイジユウ…と呟く金木を見て、上鳴は少し微笑む。「いや、でも、なんつーか。金木も轟とかと一緒に推薦組のエリートって感じで、もつとスカしてんのかと思ってたわ。」

「それ分かる！真面目です！って感じだし、休み時間すごい本ばかり読んでるし。でも喋ってみると意外にノリもいいし、仲良くなれそう！」

「さっきのは冗談よ、金木ちゃん。私も仲良くなりたいわ。」

「上鳴くん…芦戸さん…蛙吹さん…。」

「梅雨ちゃんと呼んで。」

「あ、うん。梅雨ちゃん。」

友達が増えた喜びに打ち震える金木と、そんな金木を微笑ましく思う3人。

「彼女がいるのは許さねーけどな！」

そこに峰田がピシヤリと冷や水を差したことで、話題は渡我のことに戻り、昼休みが

終わるまで質問攻めは続いたのだった。

「わーたーしーがあ………」

「普通にドアから来た!!!」

午後、心待ちにしていたヒーロー基礎学の授業が始まる。

講師を務めるオールマイトが、コスチュームを着て教室にきた。

考えてみれば、これは本当にすごいことだ。

“No. 1ヒーロー”、“平和の象徴”——

彼を表す言葉は数あれど、その偉業を考えれば全て納得がいく称号だ。

そんな彼が教鞭きょうべんをとる。

その貴重さ、その価値たるや計り知れない。

どの授業もそうだが、この授業だけは本当に一言たりとも聞き逃せない。

「さっそくだが、今日はコレ！戦闘訓練つ!!!そして、そいつに伴ってこちら!!入学前に

送ってもらった個性届と要望に合わせてあつらったコスチューム!!」

被服控除ひふくこうじよ

入学前に申請すれば、個性に合わせたコスチュームを作ってもらえる制度。

コスチュームひとつで自分の個性の利点を伸ばし、弱点を補うことさえできる。

学生には想像がつかないようなテクノロジーが使われていたりもする。

雄英高校に入学する者は、そんな便利に過ぎる制度を利用して、それぞれに合ったコスチュームをあつらえてもらっている。

更衣室に移動し、ケースからコスチュームを取り出す。

どんな仕上がりになっているか、みんなワクワクしながらケースを開けている。

そして、各々のコスチュームの仕なりに満足の声を上げる。

しかし、金木はそこに何の感慨も湧かない。

なぜなら自分が要望で出したのは、ただの半袖の黒いTシャツにハーフパンツなのだから。

なんの期待もなく、ケースを開く。

開発してくれた人の遊び心なのか、トップスはパーカーになっており、黒のレギンスも追加されていたが、特に変わった点は見当たらない。

同封されていた説明書のようなものによれば、機能性は市販品に比べれば耐熱、耐寒、防塵などに優れているそうだが、まあ普通よりちよつと丈夫で便利な服という域を出ない。

着替えを終え、オールマイトの前にコスチューム姿の生徒たちが並ぶ。

それぞれ個性に合わせたコスチュームでコーディネートしていて、その多くはコスチュームというよりはアーマーという言葉が合うような装備で全身を覆っている。

(こうして見ると、僕だけすごい地味だ……。)

「かつこいいぜ！」とみんなを評していたオールマイトでさえ、金木を見たあと咳払いをしてお茶を濁した。

そんなオールマイトに、生徒から怒涛どとうの質問ラッシュが飛ぶ。

訓練の内容や先日の相澤のような除籍などの処分(合理的虚偽)はあるのか、など、たしかに気になる内容ばかりだ。

それらを一蹴して、オールマイトは訓練内容を説明し始める。

「状況設定は、ヴィランがアジトのどこかに核兵器を隠している。ヒーローはそれを処理しようとしている。ヒーローは時間内に敵を捕まえるか、核兵器を回収すること。ヴィランは制限時間まで核兵器を守るか、ヒーローを捕まえること！」

「コンビおよび対戦相手はクジだ!!」

今年は例年と違い、1クラス21人になっているので、必然的に3人のチームが出来上がる。

そしてクジを引いた結果は……………

Aチーム 緑谷・金木

Bチーム 轟・障子

Cチーム 八百万・峰田

Dチーム 飯田・爆豪・瀬呂

Eチーム 芦戸・青山

Fチーム 口田・砂糖

Gチーム 上鳴・耳郎

Hチーム 常闇・麗日

Iチーム 尾白・葉隠

Jチーム 蛙吹・切島

チーム分けが終わるとオールマイトはVILLAINと書かれた黒い箱と、HEROと書かれた白い箱に手をつつまみ、組み合わせを決めた。

「最初の対戦相手はあ……こいつらだ!!」

「Aコンビがヒーロー、Dコンビがヴィランだ！他のものはモニタールームへ向かって

くれ。」

(緑谷くんと一緒か、2人とも身体強化系だからシンプルな作戦が良さそうだ。)

作戦を相談しようかと緑谷に目を向けると、彼は爆豪に睨にらまれていた。

「ヴィランチームは先に入ってセッティングを。5分後にヒーローチームが潜入です
ターゲットする。」

その言葉で飯田、爆豪、瀬呂は建物に入っていく。

(3人相手かー、ちよつと厄介だな。)

(飯田くんの機動力、爆豪くんの戦闘力、瀬呂くんの包囲力、どれ一つとっても強個性。
これで3vs2の構図になつちやつたら、こつちの勝ち目はなくなる。)

3人の個性のことを考えつつ、金木は緑谷に歩み寄る。

「緑谷くん、よろしくね。」

「あ、うん。こちらこそよろしく！金木くん！」

「カネキでいいよ。さつき爆豪くんに睨にらまれてたけど大丈夫？」

「あ、僕もデクでいいよ。…かっちゃんとは幼馴染なんだ。で、ずっとバカにされてて
…。」

「…なるほど。じゃあ尚更、負けられないね！」

正直、まだ勝てるビジョンは見えない。

でも、負ける気だつてない。

意思のこもった瞳を向けて、金木はにこやかに緑谷に手を差し出した。

「つうん！勝とう！」

緑谷もそれに同じく強い意思を宿した目で応える。

急造コンビにもかかわらず、互いにどこかシンパシーを感じていた。

爆破

「かつちゃんはきつと一人で来る。で、僕だけを狙う。…だから僕が囿になって、その隙に金木くんが…」

「なるほど。緑谷くんが言うならそうかも。…でも、相手は3人だし、仮に爆豪くんが一人で突っ走ったとしてもあと2人いる。」

「たしかにそうだ…。僕がかつちゃんを足止めできたとしても、金木くん1人で残り2人を相手にしなきゃいけない…。」

「それに、瀬呂くんがいる以上おそろくトラップがある。たぶん緑谷くんも身体強化系の個性だよな？現状では僕らは捌め手を使えない。だから最善策は…。」

「爆豪くんを（かつちゃんを）2人がかりで倒す！」

だいたいの作戦が決まった。

セツティング時間である5分が過ぎ、金木と緑谷は建物の中へ潜入する。

瀬呂が相手にいる以上、入り口にもトラップがあるはずだと警戒していたが、トラッ

プはなく、すんなりと潜入できた。

トラップがなかったことで安心したのか、二人は雑談に興じていた。

「そういえば僕ら『カネキで』、『デクで』って言い合ったのにお互いに呼んでないね。」

「あつ…ホントだ！まだ馴れなくて…。」

「僕も同じく。でも、それ以上に『デク』っていうのは呼びにく…。」

ふと、金木は気配を感じて足を止める。

気配というより、殺気だろうか。

急に会話を止めた金木の視線を追うように、緑谷も同じ方向を見る。

そこに、爆豪の姿があった。

個性でブーストをかけて超スピードで緑谷に襲いかかってきている。

空気が破裂する音が連続し、最後に轟音をたてて攻撃に転じる。

が、事前に襲撃に備えていた緑谷は、危なげなく避けることに成功した。

爆豪は掌から個性を発動し、ポツツツ!!と壁を爆破する。

「…：…デクこら避けてんじゃねえよ。」

読み通り、一人で来たようだ。

爆豪の一撃を避けた2人は、スツと腰を落とし、戦闘態勢に移行する。

「中断されねえ程度にブツ飛ばしたらあ!!」

爆豪は裂帛れっぱくの気合いを放つように吠えながら、右腕を振り抜く。

が、緑谷は重心を下げて、その右腕を取る。

「……っ!!」

そしてそのまま、振り向きながら爆豪の体を背負い投げの要領で叩き落とす。

「うう…ああっ!!!」

「ガハッ…!!」

「…ハア…かつちゃんは、たいてい最初に右の大振りなんだ。どれだけ見てきたと思ってる…。すごいと思つたヒーローの分析は全部ノートにまとめてるんだ！君が爆破して捨てたノートにつ…!…ハア…いつまでも、〃雑魚で出来損ないのデク〃じゃないぞ！」

「…僕は『頑張れ』って感じのデクだ!!」

——どこかきこえないが、一見すると流れるような体捌きだった。

おそらくずっとシミュレートしてきたんだろう。

きつと、緑谷くんにとって爆豪くんは一番身近にいた〃すごいと思う人〃だったんだろうから。

ずっと超えたいと思つてきたんだろう。

それにしても……

(頑張れって感じのデク、か………)

「つビビりながらよお……!! そういうところが……つ?」

「爆豪くん、僕らは2人だ。君はヴィランで、僕らは君を捕らえるためにタッグを組んだヒーロー。『デク』にばっかりかまけていると……すぐ捕まっちゃうよ?」

素早く死角に動きながら、確証証明のテープを大きく開いていた爆豪の口にひっかける。

緑谷はデクと呼ばれたことを喜びながら、「っナイス、『カネキ』!!」と喜色溢れる顔で笑った。

先程の緑谷の一撃で頭に血が上っているのか、喋るのを阻害されたことへの純粋な苛立ちなのか、爆豪は荒々しくテープを爆破しながら目を吊り上げてこちらへと向き直った。

「……ぶつつつ殺す!!!」

爆豪が急に右手の籠手!!を前に向けた。

籠手についた突起を動かし、ピンのようなものに指をかけている。

——あの籠手の形と、爆豪くんの個性……

グレネードか！

そう気づいた瞬間、個性を全開にして思いつきり左に跳ぶ。

ゴアツ

!!!!!!

爆発の破裂音。

建物を瓦礫がれきに変えていく音。

鉄筋コンクリートの施設を焦がす音。

様々な音が混ざり合って、まるで形をもった音が圧として鼓膜に叩き込まれているようだ。

ただ避けただけなのに、息が上がっているのを感じる。

緑谷は右に跳んで避けたようで、金木と緑谷の間には凄まじい破壊痕が刻まれている。

おそらくはコスチュームで個性を強化したのだろうが、それにしても行き過ぎた過剰

戦力。

金木はその威力に肝を冷やすが、破壊痕をよくよく見てみると、自分たちが立っていた箇所ならば避けずとも直撃はしなかっただろうことに気づいた。激昂げっこうしたように見えて意外に冷静。

なおさら厄介だ。

「…そんなん…アリかよ……」

「個性使えよ、デク。…そのもやし野郎も。全力のてめえらを、ねじ伏せる!!」

一方、地下のモニタールームでは、爆豪に対して非難の声が集まっていた。

「先生っ！止めた方がいいって！爆豪あいつ相当クレイジーだぜ、殺しちゃうぜ!」
「いや…」

『爆豪少年、次それ撃つたら…強制終了で君らの負けとする。屋内戦において大規模な攻撃は守るべき牙城がしやうの損壊を招く。ヒーローとしてはもちろん、ヴィランとしても愚策だ、それは！大幅減点だからな!』

「チツ…ああ〜!!じゃあもう……殴り合いだ!!」

オールマイトからの注意に舌打ちをしながらも、依然凶悪な目つきでこちらを睨む。金木と緑谷は一瞬でアイコンタクトを取り、互いに頷いた後、臨戦態勢をとった。

その直後、爆豪は一瞬にして個性でターボをかけ、緑谷との距離を埋めた。

そして、左腕を振りかぶったかと思えば、その左手から目眩しの爆破。

さらにその爆風に乗るように空中で身を翻し、両掌からの爆破で慣性を殺しつつ背後から一撃を加える。

「オラアッ!!」

「ぎっ…!？」

その隙をついて金木も背後にまわり、左腕にテープを巻き付けようとする。

だが、爆豪は金木を見ることもなく右手から爆発を起こし、距離を取る。

金木と緑谷はまたも目を合わせ、頷き合う。

特に戦闘に関してプランがあったわけではないが、なぜだか互いの考えがわかった。

(別々でダメなら同時攻撃…!)

またも爆豪は緑谷へ仕掛ける。

と見せかけて、拳の間合いギリギリまで距離を詰めて急停止し、両掌を地面に対して斜めに構えて個性を発動。

爆破によって掘り起こされたコンクリート片が爆風によって飛んでくる。

金木と緑谷は、表情を険しくしながらもそれを避け、左右から同時に仕掛ける。緑谷も金木も右腕を同時に振り上げて、顔面を狙う。

その狙い箇所まで左右対称にピツタリと合った同時攻撃。

それを、爆豪はその身を空中に投げ、バク転を決めて回避。

さらに、そのバク転の最中、金木が右拳に握りこんでいた確保テープを蹴り飛ばす。

そして着地するやいなや超加速し、緑谷に渾身のストレートを叩き込んだ。

「!?あがつ……ぐっ!!」

(……っ！戦闘のセンスが桁違いだ……)

殴り飛ばされた緑谷をチラリと見ると、どうやらまだ動けるようだ。

正直2vs1ならどうとでもなるとタカを括っていた。

だが、今自分たちの目の前にいるのはエリートが集まる雄英高校の中でも、紛れもなく天才のようだ。

(爆豪くんをなんとかできてはまだ2人もいる……。)

(でも、このままじゃ勝てない。)

(……まだ温存しなかったけど、使うしかないか。)

金木がそう決めた直後。

圧倒的優位にたつて笑っていた爆豪も、

焦りの表情を浮かべて金木へと視線をおくっていた緑谷も、

金木の姿を見失った。

いや、モニター越しとはいえ、オールマイトを除く全てのギャラリーが一瞬、金木の姿が消えたと思った。

それほどに速かったのだ。

爆豪が「どこだ……!?!」と左右を見渡そうとして、顔を左に向けた瞬間——

左から頬を押し返された。

否、渾身の力で殴られたのだ。

爆豪は顔を歪められて吹き飛びながらも、ようやく金木の姿を視界に捉える。

金木は右拳を振り抜いた姿勢から、スツと拳を降ろし、軽くその場で2度ほど跳躍したかと思えば、また消える。

体勢を立て直した爆豪の背後に現れ、足を払う。

無様に尻餅をついた爆豪の腕を取り、関節技で固める。

その間、僅か数秒……。

モニタールームでは誰もが啞然としていた。

同じ推薦組の轟や八百万でさえ、金木がここまでやるとは思っていなかった。

だが、その光景を目の前で見ていた緑谷の驚きはそれ以上だった。

（かつちゃんが無敵に負けるところなんて初めて見た……。正直、カネキがここまで強いとは思ってなかった。推薦組だもんな、当たり前か。それにしてもあの動き、もしかしてオールマイトと同じくらい速いんじゃないか？ いや、スピードで言うならエツジシヨツトか。身体を強くする、って意味では僕とカネキの個性は似通ったところがあるかもしれないけど、練度が大違いだ。パワーは驚くほどの威力でもなさそうだけど……いや、相手がクラスメイトだからパワーは抑えてるのかも。それにしても、あのスピードと体捌きはすごい……あと、気配を読んだり、戦闘面での思考も冷静で冴えてる。正直、シンプルで強化の個性だからこそ、欠点が見つからない。」

「……デク？ ああ、デク？ おーい!! 緑谷くん！ 確保証明のテープ!!」

いつもの独り言モードに突入してしまっていたようで、金木の声でハッと我に返る。

爆豪は金木に固められながらも、視線で人を殺せるのでは!?!と思わせるような鬼の形相でもがいている。

金木も必死にそれを抑えているが、急がなければまずい状況だ。

訓練の最中に呆けてしまったことを大いに恥じながら、緑谷は確保証明のテープを取りに走る。

ビツ

と、そこへ金木と緑谷それぞれに向けて確保証明とは違う透明のテープが飛来した。

金木も緑谷も間一髪で躲すが、爆豪の拘束は解けてしまった。

「爆豪！大丈夫か!?つかさつききの音なんだよ！まじビビったわ！」

「ッ瀬呂くんか……！」

「カネキっ！ごめん！僕……」

「反省は後にしよう、デク。今は……」

「……デク。てめえは後で殺す。でも今は、てめえだ!!もやし野郎!!!」

助けにきたであろう瀬呂に目もくれず、またも爆豪は金木に向けて突貫する。

瀬呂は現状が把握できたのか、少し呆れた顔をしながら「なら俺は緑谷の相手だな。」

と緑谷に向き直った。

なかなかの理解力だが、これは悪手である。

そもそも数の有利があるにもかかわらず、わざわざ1対1の構図にする意味はないのだ。

ヒーローチームにとっては願ってもない展開だった。

(…これは好都合だ。でも1人で爆豪くんを抑えられるか?……)

邪悪が服を着たような怒りに満ちた表情で、爆豪は金木に対して拳を振るう。

血管が何本か切れてしまったかのように怒りを撒き散らしているが、動きは冴え渡っている。

細かいフェイントに、個性を使った予備動作なしの踏み込み、連動した攻撃……先程使った奥の手を使う暇がない。

無理矢理に距離を取ろうと下がった瞬間、離れたはずの距離は爆速ターボによって詰められる。

そしてその隙について、爆豪はさらなる猛攻をかけようと腕を振りかぶった。

「つさせないー！」

爆豪の攻撃が射程範囲に入る寸前、緑谷は金木の前に出て爆豪の猛攻を凌ぎながら叫

んだ。

「かっちゃんは、僕が抑える！」

「っ！デクてめえ…っクソナードがア!!ムカつくなアアッ!!」

爆豪は標的を緑谷に変え、なおもスピードを増しながら攻撃を加えていく。

緑谷はその攻撃をガードしながらも、押されていく。

だが、苦悶の表情を浮かべつつ、緑谷はなおも叫ぶ。

「っカネキ!!行って！」

奇しくも最初の案の通り、緑谷が爆豪を抑える囹役になってしまった。

だが、緑谷は金木の戦闘力をその目で見た上で、現状、瀬呂と飯田が別々の場所にいるならばチームとしての勝ち筋はあると踏んで、自分が爆豪を抑える役割にまわったのだ。

（あとは僕がどれだけかっちゃんを抑えられるか、だ。）

（なら、やってやる…！勝って、超えたい…！）

緑谷の覚悟の咆哮を受けて、金木は微笑みで応えた。

攻撃をギリギリで躲しながら、強敵を引きつけてくれているバディを頼もしく思いながら、再度個性を発動した。

幕番

「…なんだあれ！チートだろっ…くそっ！」

現在、瀬呂は飯田と合流すべく来た道を引き返している。

もちろん、個性のテープで通路に即席トラップを仕掛けながらだ。

少し卑怯な攻撃で金木にテープを巻きつけたが、きつとあんな拘束はすぐに解くはずだ。

先程の、戦闘と呼ぶにはあまりにも短い攻防で、金木の実力が自分を遥かに凌駕していることを思い知った。

2対1だとしても、あの金木に勝てるのか…？

(…いや、それでも。)

(飯田の機動力と俺の個性を組み合わせれば…いけるはずだ！)

少しの光明が見えた気がして、瀬呂は幾分か顔に笑みを戻しながら走る。

数分前。

ヒーローチームがスタートして間もない頃。

飯田と共にハリボテ（核兵器）を守っていた瀬呂は、爆音と地響きに見舞われた。

それは爆豪の籠手の一撃によるものだ。

だが、飯田と瀬呂は、爆豪がヒーローチームにやられてしまったのでは？という懸念から何度も無線による連絡を試みる。

一向に返事がない。

これも、実際は爆豪が聞こえていながら無視していただけだ。

だが、制止する飯田を残して、瀬呂は爆豪を探すために一人で階下へと降りていった。セッティングの時間に綿密に作っておいたトラップを、自分で解除しながら戦闘音のする方へと走る。

トラップの解除に手間取って、少し時間がかかってしまった。

しかし、爆豪たちのいる階に着いた時、来て良かったと心底自分の判断を褒めた。

金木に組み敷かれている爆豪と、確保テープに向かって走る緑谷を見て、咄嗟に状況を把握して攻撃したのも、優れた判断だったはずだ。

では、なぜこうなった…？

それは金木の実力が想像を遥かに超えていたからだ。

現在、激昂した爆豪が緑谷に猛攻を仕掛け続けている。

自分が緑谷の相手をするつもりだった瀬呂は、出鼻を挫かれて肩を竦める。全くもって爆豪に振り回されっぱなしである。

そのトラブルメーカーは、緑谷を追って、通路を曲がって見えなくなった。自分の相手はこっちか、と金木に向き直る。

「くくよ、瀬呂くん。」

金木は深呼吸をしながらその場で軽く跳ねて、告げた。

その言葉を受けて、瀬呂が身構えるよりも速く、金木は見えなくなった。

「っ!？」

呆けた瀬呂の左下からアッパーカットが放たれる。

新品のコスチュームのヘルメットにヒビが入る音がして、直後に後ろに吹き飛ばされた。いや、たぶん殴り飛ばされただけなんだろうが、どうやって殴られたのかも分からな

かった。

砕けたヘルメットを脱ぎ捨てると、それを待つていたかのように金木は小さく飛び跳ねながら「そのヘルメット、下方向が少し死角になっちゃうね。」と言った。

「あーでもかつこいいいよね……！」と謎のフォロー付きで。

正直、ダメージは然程さほどではない。

だが、あのスピードで接近されて爆豪にしていたように関節技を決められたら、終わりだ。

「くそっ……！」

(……飯田と合流するしかねえっ!!)

一発殴られただけ、しかもダメージもほぼ入っていないが、実力差は歴然れきぜんだ。

ならば逃げる！

なぜなら自分は今、ヴィラン（という設定）なのだ。

ヒーローが逃げるのはどうかと思うが、ヴィランなのだから問題ない！

そう自分を納得させた時、ヴィランというワードから、あることを思い出した。

「……すげえな、金木。個性把握テストん時は正直ここまでやるヤツだと思つてなかった。さすがは推薦組だな。いや……それより、中学の時に本物のヴィラン捕まえてんだもん。敵うわけねえよ。」

「なあ、『中学生ヒーロー』。」

「え…何で知って…。」

「…お前に捕まったヴィランな、俺の兄貴なんだよ。」

「なっ…!!?」

当然、嘘だ。

ニヤリと笑いながら、金木にカマをかけてやった。

金木のこととは詳しく知らないが、出身地くらいは知っている。

そして中学時代、一時期メディアを騒がせた『中学生ヒーロー』の事件も、少しくらいは知っている。

名前は公開されていなかったが、推薦組であること、出身地と年齢が同じことで、あの事件で騒がれた中学生ヒーローは金木であるとアタリをつけたのだ。

どうやら当たっていたようで、明らかに金木は動揺した。

その際に、今自分が出せる最高の速度で個性のテープを射出し、金木に巻きつける。

そして、一目散に来た道を引き返し始めたのだ。

(つーかマジでヴィラン捕まえたの金木だったのかよ…!!)

(…あんだだけ騒がれた中学生ヒーローに俺がどうやって勝つってんだよ！早すぎて見えもしなかった…)

「…なんだあれ！チートだろっ…くそっ！」

(やられた……………)

腕と胴体に巻かれたテープを、瓦礫で切れ目を入れて一気に引きちぎる。

なおもコスチュームに張り付いているテープの残骸を外しながら、金木は脳内で反省会をおこなっていた。

中学時代の事件のことが知られていても、別に問題はない。

だが、虚をつかれたことで少し動揺してしまった。

相手はヴィランになりきっているのだから当然、嘘くらい吐く。

(そろそろ時間もまずい……。)

時間とは訓練の制限時間のこともあるが、もうひとつ。

個性の反動である。

金木は個性によって身体能力を向上させることができるが、それは常識の範疇はんちゆうを超えるほどの強化ではない。

個性把握テストで使ったのが、現状での正真正銘100%の強化なのだ。

そして、今使っているのは、あえてパーセンテージで表すのなら300%の強化。

自分の中では「限界突破オーバーフロー」と位置付けている奥の手。

右脚を一步踏み出せば右脚の、拳を振るえば腕の筋繊維を、甚大に損傷してしまう。

それほどの強化を施している。

そして、それを活性によって瞬時に再生しているのだ。

再生し、また強化の個性を巡らせる。

——その再生のインターバルと動きの確認作業がその場での跳躍だ。

ちなみに視界から消えるのはスピードもさることながら、渡我との訓練で身につけた死角に潜る技術の応用である。

だが、そんなチート級の個性使用がノリスクなはずもない。

再生されるとはいえ、筋繊維が千切れる痛みが常に付き纏い、この裏技を使えるのは

10分が限度。

そしてそれを過ぎれば、猛烈な筋肉痛と猛烈な怠さで、半日は抜け殻同然になる。300%の発動をし始めて、もうすでに5分は経過している。

あと5分弱：おそらく訓練の制限時間も残り10分あるかどうかだろう。どの道、この5分でクリアするしか、ヒーローチームに勝ちの目はない。

あと5分で瀬呂と飯田を探し出し、2人が守っているであろう核兵器を回収するしかない。

瀬呂を見失ってしまったのは、制限時間の観点から見れば痛恨のミスだ。ヴィランチームは逃げ切りのために隠れていることも有り得る。

こうなったら、虱潰ししゅうつぶに探していくしかない。

覚悟を決めた金木は、瀬呂の逃げた方角に全力で走る。

そして、瀬呂が通路に張り巡らせたテープを見て驚愕した。

「これはっ……………」

テープがあるとこ通れば どこにいるか分かる

!!!!!!!

飯田と合流した瀬呂は、金木の戦闘力の高さで、その対策について合議ごうぎしていた。

「なるほど、金木くんがそこまで強いとは…。」

「ありやチートだぜ。でも負ける気もねえ！金木が来るまでもうちよい時間あるだろうし、さつき言った作戦なら…。」

「あ、やっぱりいた！」

冷や汗と不敵な笑みを同時に浮かべていた瀬呂の背後。

数メートル後方にあるフロアの入り口から金木が現れた。

「なっ…！金木くん!?!早すぎるだろう!?!」

「…いや、僕も2人を探したらもつと時間かかると思ってたんだけど、瀬呂くんが目印残してくれたから…。」

金木は少し申し訳なさそうな顔をして、その手に握っていたテープの残骸を見せる。

——え？全部外してきたのか…？

——ていうか俺、墓穴掘った…？

「それにしても1個くらいトラップ引っ掛かれよ！」

「瀬呂くんのテープは個性知らなきや透明だしトラップとして有効だろうけど、個性知ってて、なおかつあの量で張り巡らされてたら気づくよ…。普通に貼ってあるだけだったから外すのも簡単だったし…。」

——完つ全に墓穴だ!!!

——飯田からの視線が痛い…!!

「…時間もないし、その核兵器…回収させてもらおうよ。」

スツと戦闘態勢をとる金木に、思わず生唾を飲んでしまう。

反省は後だ。

今はさっきの作戦を遂行する。

飯田に目を向けると、キツチリ首肯して応えてくれた。

「へへ。金木、悪いな。さっき言った話は嘘だ。」

「知ってるよ。ちよつとビックリしたけど。」

「今はヴィラン役だからな。飯田なんてさっきまで一人でヴィランっぽい口調の練習し

てたくらいだぜ。」

ニヤリと歯を剥き出して笑いながら、瀬呂は金木に向けてテープを射出した。そしてもう一本、飯田に向けてテープを射出する。

飛んできたテープを躲しつつ、(仲間を…!?)と金木は一瞬戸惑うが、テープは飯田を越えてフロア中央の柱に巻きついていく。

そのままテープを巻き取りながら瀬呂がフロア中央へと跳んでいく。

その間に、飯田は個性を使って金木に肉薄していた。

「行くぞ、金木くん!!」

超スピードで接近してきた飯田は、勢いそのままに金木の頭部めがけて脚を振り上げる。

疾い…!!

身体を無理矢理に折り曲げてその一撃を避ける。

髪一本ほどの隙間を空けて、飯田の脚は空を切り裂いた。

まさしく間一髪。

あのスピードと脚技の威力。

脅威だ。

金木のこめかみに一筋の汗が伝う。

そして、そこにフロア中央からテープが飛来する。

目の端でそれを捉え、避けようとするが、飯田もさらに攻撃の姿勢に入っている。

金木は「限界突破^{オーバーフロー}」した跳躍力を使って、後方宙返りとロンダートで後方へと大きく

距離をとる。

そこに飯田が超加速で迫る。

小回りや対人戦闘においてならばスピードは互角だろう。

だが、直線距離のスピードだけならば飯田に分がある。

(とにかく脚技に気をつけろ……)

飯田は金木の間合いスレスレまで加速すると、突如その場で高く跳躍する。

なにを……?

突然の跳躍を不思議に思うが、飯田がいた場所の奥にはフロア中央。

そこから、瀬呂が射出したテープが迫っていた。

金木はそれに反応もできず、右腕をテープに絡め取られる。

「くっ……」

巧い。

正直にそう思う。

脚技の威力を見せて同時攻撃で距離を取らせ、飯田の身体で隠しながらテープを射

出。

テープ自体が透明なこともあり、気づきにくい。

気付いたところで避けられない。

そのギリギリのタイミングで跳躍した飯田が巧かった。

なぜ瀬呂に背を向けながらそんな絶妙なタイミングで跳躍できたのか。

それは飯田の背にテープがついており、そのテープを引くことで瀬呂がタイミングを指示していたのだ。

「よっしゃっ……金木悪いなー」

瀬呂は金木に巻きつけたテープを力一杯引つ張る。

だが個性で強化している金木はビクともしない。

まあここまでは想定内だ。

さらに、瀬呂は金木の腕に付いたテープの反対側を違うテープに貼り付けて射出し、飯田の脚に巻きつける。

金木の腕と飯田の脚、両者の間にピンツとテープが直線を描く。

「ぐへへへへ。金木くん、ちゃんと受け身をとれよ!!」

ここにきてなぜかヴィランっぽい口調で注意を喚起した後、飯田は個性『エンジン』の力でテープが巻きついた脚を振り上げる。

そして、ギョルリと軸足で地面を焦がしながら金木とは反対方向の空中に渾身の蹴りを放った。

「……!! つぐあー!!」

右腕が引き抜かれるような途轍もない引力に見舞われ、金木は飯田の方へと引かれ飛んでいく。

引つ張られている右腕だけでなく、全身の痛みに顔を顰める。

個性300%使用の反動が始まりかけている。

もう時間はない……!

ここで、決める。

「っ飯田くんーちゃんと受け身……とってね!!」

金木は引つ張られた姿勢のまま、空中で身体をねじる。

身体が飯田に辿り着く直前、金木は右手でテープを思いつきり引つ張る。

そして、自分の右腕の引きの力を軸に、引つ張られている勢いを乗せて左拳を飯田に叩き込む。

あまりの勢いと無理な姿勢からの攻撃に、金木の全身にビキリと嫌な音が響く。

ゴドオ!と重い音を鳴らしながら、金木の拳は飯田の腹部に突きささった。

「がは………っ」

金木の一撃の衝撃でテープは千切れ、弾かれた飯田がハリボテに向かって吹き飛ばされていく。

ハリボテとはいえ核兵器という設定だ。

攻撃を加えるわけにはいかない。

金木は千切れたテープを掴み、そのまま飯田の身体を瀬呂に向かって投げる。

「瀬呂くん！ちゃんと受けとってね!!」

「はあっ?!…つちよっ…!!」

勝利確定、と信じて疑わなかった作戦を逆手にとられた瀬呂は、目の前の光景についていけない。

飛んでくる飯田をなんとか受け止める。

ここからどうすれば……

そう考えてフロアに目を戻した時、金木の姿はもうそこにはなかった。

そして、そんな瀬呂の真後ろから声が届く。

「…ハアっ、ハア……降参、してくれる?」

「……まいった。」

もう瀬呂の心はバキバキに折れていた。

『…っヒーローチーム!!!う W I N!!!』

縛覇

雌雄しゆうが決する数十秒前。

緑谷は爆豪に追い詰められていた。

「何で個性使わねえんだ!!俺を舐めてんのか!?ガキの頃からずっと!!そうやって!!」

「俺を舐めてたんか!てめエはあ!!!」

「っ…違うよ。」

「君が凄い人だから、勝ちたいんじゃないか!!」

「…勝って!!超えたいんじゃないかバカヤロー!!!」

「そのツラやめろやクソナード!!!」

否、追い詰められているのは爆豪も同じなのかもしれない。

余裕のない表情で互いの気持ちをぶつけ合う2人には、オールマイトから伝えられる制止の声も届かない。

互いに右。

緑谷は涙を滲ませながら、拳を握り込み、振り上げる。

爆豪は焦りと憤怒を感じさせる笑顔で、爆破させながら右掌を振りかざす。

羨望・屈辱・敵対心…

焦り・嫌悪・侮蔑…

複雑に絡み合った互いの心を乗せた、2人の拳と掌が交差し、……………

『…っヒーローチーム!!!うWIIIIIIIIIIIIIIIIIIIN!!!』

終了を告げるオールマイトの声に反応もできず、2人の攻撃は互いを捉えた。

緑谷は左腕でガードしながらも、爆豪の顔面スレスレにデトロイトスマッシュを叩き込む。

「…ハア…………ぐっ。ハア…使わないつもりだったんだ。使えないから…。体が衝撃に耐えられないから…：相澤先生にも言われて…たん…だけど。」

グローブは焼け焦げ、左腕も火傷を負っている。

そして、緑谷は意識を失ってドサリと倒れた。

だが、完全に左腕で防いでいたのだ。

それはつまり。

(右…………デクは読んでた…！読んで上で…俺に当てずに逸らしたんだ…)

(そりやつまり…ガチでやり合っても、俺 完全に デクに)

「戻るぞ爆豪少年、講評の時間だ。」

込み上げる焦燥感と屈辱で呼吸を荒げる爆豪の肩に、オールマイトは優しく触れた。

モニタールームにて。

「さあ講評といこう。」

「まずはヒーローチーム、おめでとう！緑谷少年はハンソーロボで保健室に直行してしまったが。金木少年、おめでとう。君の活躍は圧倒的だったな。だがまあ…あえて指摘するとすれば2つ！誰か分かる人っ!!？」

「はい、オールマイト先生！」

オールマイトからの問いに一切の躊躇なく、八百万が手を上げ、発言を続けた。

「金木さんの個性は凄まじかったです、今のこの姿を見れば反動も相応のものであると判断できます。時には反動を覚悟で動かねばならないでしょうが、今回バディが他の敵と交戦中にも関わらず、個性の使用を中断せずに単独で敵の本拠地に乗り込んだことは少し早計だったかもしれませんね。今回は相手の個性や戦力が分かっています

が、実戦ではこうはいかないでしょうから。あと1点は、瀬呂さんとの交戦時に騙されて隙を作ったこと。くらいでしょうか。ですが、金木さんの能力はこの中では突出していました。」

ここまで一気に言い放った八百万の意見に、誰もが納得した。

だが、彼女はそこで止まらず、スウツと大きく息を吸い込むと、さらに続けた。

「爆豪さんの行動は私怨丸出しの独断。屋内での大規模攻撃のような悪手もさることながら、数の有利を生かそうとしないあたり、一人だけ訓練ではなくただの私闘を仕掛けていたように見えました。瀬呂さんについては、そもそも爆豪さんの様子を見に行くなら機動力に長けた飯田さんが行うべきで、拠点防衛に長けた瀬呂さんが行ったのは愚策と言わざるを得ませんわ。ヴィランらしい思考で金木さんを惑わせたところや最後の作戦は良かったですが、せっかく個性のテープで拘束したのだから、テープに確保テープを組み合わせて巻きつけるなり、拘束した上で、そのまま交戦するというのも選択肢としてありました。あと、トラップはやるならダミーを混ぜる、それが無理なら確保テープを使った二重トラップを極少数用意した方が効果的です。トラップで居場所をバラすのも、頭の悪いヴィランの典型のようで愚策ですわね。そして飯田さんについては、最後の攻撃は作戦としては良かったですが、破られたときの対処ができていませんでしたね。あと、勝者ではありませんが、緑谷さんは金木さんと同じく反動で動けなく

なること、そして中盤、せっかく金木さんが爆豪さんを捕らえたにも関わらず、気の緩みで取り逃がしてしまったことは重大なマイナスポイントですわ。」

「ですから、他の4人に比べて金木さんは状況判断も戦闘力も完全に頭一つ抜けておりますわ。」

((つめつちや喋るうううう!!!))

保健室に行った緑谷と、茫然自失の爆豪を除いた19名にオールマイトを加えた20名の心は今、ひとつになった。

「ま……まあ初訓練だし、ちよつと評価が辛辣だけど、まあ……正解だよ。くう……」

オールマイトからの講評かと思えば、まさかの八百万によってさらに上をいく講評(酷評)を叩きつけられ、瀬呂と飯田は床に手を突くほどに落ち込んだ。

だが、一番凹んでいたのは初授業で生徒にお株を奪われたオールマイトなのかもしれない。

「んん”っ!!!……さあ、場所を移して再開といこうか!!」

気持ちを切り替えたオールマイトの一声によつて訓練は再開された。

金木は外傷があるわけではなく、治癒すれば余計に体力を減らすからという理由で、

ぐったりとしながらも訓練の様子をモニターで眺めつつ、先ほどの訓練の過程を反芻していた。

（八百萬さんの言う通りだな。褒めてくれてたけど、指摘されたことは真理だ。反動の出るこの使い方じゃ連戦はできないし、今回の勝利は設定に甘えたものだ。）

そんな金木に、念のために保健室で診てもらっていた飯田と瀬呂が戻ってきて近づいた。

「金木くん、お疲れ様。完敗だったよ。」

「あ、飯田くんもお疲れ様！お腹大丈夫だった…？」

「大丈夫！ただの打撲だ。敵ながら素晴らしい攻撃だった！」

「たしかに。つーか、あれ返してくるとは思わねえよ。あ、途中騙して悪かったな！」

「いやいや、それこそ全然大丈夫だよ。ヴィラン設定だったしね。爆豪くんも含めて、3人ともすごい個性でいい勉強になったよ。ありがとう。」

「金木さあ、それちよつと嫌味だぜえ？」

「え？いやいや!!そんなつもりは…!」

「さっきの八百萬の講評も、マジで凹んだわ。めっちゃ的確だったし。なんか俺の時だけ微妙に指摘多かったし。愚策って2回も言われたし。ヒーロー名『愚策ヒーロー墓穴

掘り』にしようかな……………」

「いや!!ちよつ!瀬呂くんの個性はすごいよ!八百万さんも言つてたけど使い方次第で最強の拠点防衛だっただろうし、トラップも二重トラップは僕もめちやくちや警戒してたくらいだよ!」

ズウウンという効果音が聞こえそうなほどに落ち込む瀬呂に、金木は慌ててフオローという皮を被つた追撃を叩き込む。

「……………やっぱ使い方が悪かつたんだな…。」

「金木くん!塩を塗り込んでるぞ!!」

と、そこへ訓練を終えた八百万が戻ってきた。

オールマイトの講評を聞き終えた八百万は「峰田さんの目つきがいやらしいですわ!」と、ご立腹の様子でこちらに歩いてきた。

「お疲れさま。やっぱりすごいね、『創造』の個性。弱点が見当たらない。」

「ありがとうございます。弱点はありますわ。…と、それより、先程は少し言いすぎてしまつてすみませんでした。」

「いや、僕は本当に思い当たることばかりで、指摘してもらえて良かったよ。」

「僕も己の未熟を突きつけられた思いだ。正直、ここまで自分が何もできないとは思つていなかった。」

「俺はただただ凹んだ。」

八百万からの謝罪を、三者三様の表情をしながら受け入れ、4人は再びモニターに目を向ける。

訓練も残り僅か。

現在は轟・障子チームが尾白・葉隠チームを瞬殺したところだ。

その4人から少し離れた位置で、爆豪はモニターを見つめて唇を噛み締めていた。

「お疲れさん!!緑谷少年以外は大きな怪我もなし!しかし真摯に取り組んだ!初めての訓練にしちゃ皆 上出来だったぜ!」

オールマイイトからの労いの言葉で、屋内対人戦闘訓練は幕を閉じた。

更衣室へと戻って着替えた後、教室に戻るまで、爆豪は俯いたまま無言を貫いていた。

教室に戻った後、爆豪は鞆を手にとるとそのまま教室を出て行くこうとする。

「ちよ……おい!爆豪どこ行くんだよ!」

切島の制止も聞かず、爆豪はドアを開ける。

そこにはタイミング悪く更衣室から戻ってきた金木がいた。

「……どけ、もやし野郎。」

「…爆豪くん。帰るの？」

「…っああ、帰るんだよ。だからどけ。」

「逃げるの？」

「っ…んだと!?!」

「…君は天才だと思う。個性も最強クラスだし、戦闘のセンスもピカイチ、成績だつてきつと良いんだと思う。でも、まだ上には上がいるし、僕やデクを含め、下からだつてどんどん君を追い抜こうとする人が現れる。」

「…っ!!」

「僕も、デクと同じように…いつか君に勝つて、超えたいと思ってる。」

「…つてめえ!!」

金木の言葉に激昂した爆豪は、胸ぐらを掴み、今にも食い殺さんばかりの眼光を浴びせる。

対して、金木は眉を下げて困ったような表情でその瞳を見つめ返している。

「おいおい! やめとけつて! 金木もあんま煽んなよ!」

またも切島が間に割つて入って仲裁し、爆豪は大きな舌打ちをひとつ残して、そのま

ま帰っていった。

金木は困ったような表情のまま、少し微笑んでその後ろ姿を見送っている。

「……ヒヤヒヤしたぜ。金木、お前あんな煽るようなこと言うやつだったか?」

「煽ったわけじゃないよ。ただ、爆豪くんはきつとこれから途方もなく強くなるだろうから……負けられないように、自分に言い聞かせてたのかもしれない。」

ほどなくして、緑谷が保健室から戻ってきた。

金木は劳いの言葉をかけようかと近づいたが、麗日から爆豪が帰った旨を聞くと、そのまま教室を飛び出して行ってしまった。

「かっちゃん!!!」

「ああ?」

「……これだけは、君には言わなきゃいけないと思って……!」

「人から授かった“個性”なんだ。」

「誰からかは絶対言えない!言わない……でも、コミックみたいな話だけど本当で……!おまけにまだろくに扱えもしなくて……全然モノに出来てない状態の“借り物”で……!だから……使わず君に勝とうとした!けど結局勝てなくてソレに頼った!僕はまだまだ

で……！だから——」

「いつかちやんと自分のモノにして、『僕』の力で君を超えるよ。」

爆豪からしてみれば、ゴチャゴチャと、反省と嘘を混ぜたような訳の分からない前置きを言われた後、清々しいまでのまつすぐな表情で宣戦布告をされた……本日2度目のだ。

「何だそりや……？借りモノ……？わけわかんねえ事言つて……これ以上コケにしてどうするつもりだ……なあ!？」

「だからなんだ!? 今日……俺はてめエに負けた!! そんだけだろが! そんだけ……っ」

「もやし野郎にも組み伏せられたっ!!! 氷の奴見てっ! 敵わねえんじや、って思っちゃまった……!! クソっ!! ポニーテールの奴の言うことに納得しちまった……クソが!! クソッ!! なあ! てめエもだ……! デク!!」

「こっからだ!! 俺は……!! こっから……!! いいか!? 俺はここで一番になってやる!!!」

「俺に勝つなんて二度とねえからな!! クソが!!」

涙を滲ませて覚悟を語る幼馴染に、緑谷は一層気持ちが引き締まる。

負けられない……!

「爆豪 少年!!」

くるりと背を向けて校門をくぐろうとする爆豪に向けて、緑谷のすぐ脇をオールマイ

トが超スピードで駆けて行った。

「言つとくけど……自尊心つてのは大事なもんだ!! 君は間違いなくプロになれる能力を持つている!! 君はまだまだこれから……」

「……っどいつもこいつもお人好しだな。放してくれ、オールマイト。歩けねえ。言われなくても!! 俺はあんたをも超えるヒーローになる!」

…あれえ? と首を傾げるオールマイトをよそに、緑谷は、一つ殻を破つてさらに先に進もうとしている幼馴染の背を見続けた。

萌芽

「へエ、ケンくんが手こずるとは…あの爆発くんやっぱり強かったんですねエ。」

「爆豪くん、だよ。」

「うん、強かった。入試までトガさんと2人で随分鍛えたつもりだったけどまだまだだった。奥の手使ってようやく対等に戦えるレベルだった。爆豪くんがもつと冷静だったら、たぶん普通に完封負けしてただろうね。」

「そのわりにはあんまり凹んでないように見えますねエ？」

「そうかな?…うん、そうかも。実戦だったら悔しいで済まないけど、あれは訓練だからかな。自分のできることとできないことがはっきり分かっただけでも収穫だよ。」

「いいなー! B組は戦闘訓練まだやってませんし、普通のお勉強ばかりでつまらないです。」

先日の戦闘訓練について、いつもはわりと言葉数少ない金木にしては珍しく語る姿を見て、渡我は嬉しく思う。

中学の時は、金木は事件以後に和解したクラスメイトと談笑することはあったが、必

要以上に近づくことはしなかった。

そんな金木が語る授業やクラスメイトの話には、隠しきれない喜びが含まれていて、彼の心が充足しているのを感じて嬉しくなってしまう。

そんなほのぼのとした2人の足は、学校の目の前で止まった。

校門のゲートを大勢の人が塞いでいたからだ。

「キミたち雄英生？ヒーロー科？」

「オールマイトの授業はどう？」

「コスチューム着て授業してるの？」

「ていうかキミ…どこかで…？」

「!!キミ…もしかして『中学生ヒーロー』!!?」

「おいおい！オールマイトだけじゃなく中学生ヒーローまで雄英きてんのかよ！」

校門前に集結していたのはマスコミの人間だった。

矢継ぎ早にオールマイトについての質問をぶつけてくるが、まあそれも仕方ないと思う。

現役のNo.1ヒーローが教師として教えるというのは、それほどのことなのだ。

オールマイトの質問だけならば応えようと思っていたが、『中学生ヒーロー』という言葉が出た時点で少し嫌な気持ちになる。

自分が『中学生ヒーロー』と呼ばれることになったあの事件。

そのマスコミの対応は、正直気分が悪くなった。

自分を必要以上に持ち上げ、被害者のはずのヒーローを叩く。

被害者のヒーローは少なくとも犯人を止めようとしていたし、自分の実力のなさを反省することはあつても叩かれる必要などない。

報道の自由という免罪符のもと、湾曲させた情報で他人を傷つける。

そんなものは暴力と変わらない。

「ちよ……えと……。オールマイトの授業は、すごく勉強になります。普段から気さくな方で、授業の時はコスチューム着てました。あと、すみません。中学生ヒーローっていうのやめてください。僕もう高校生ですし、まだヒーローじゃないので……。じゃ、これで。トガさん、行こう。」

「ちよっ！もうちよっ！と話聞かせてくれない!?!できればうちの誌面でオールマイトと2人で対談とか……つてもうあんなところに!」

「災難でしたねエ。」

「うん……。オールマイトってやっぱりすごい影響力だね。」

マスコミの囲み取材を切り抜けた渡我と金木は、大きくひとつ息を吐くと、それぞれの教室に向かって歩き始める。

過去の事件のことはひとまず置いて、オールマイトの教師就任について再度考える。

“No. 1ヒーロー”……その言葉が持つ意味は果てしなく大きい。

実力はもちろんだが、存在そのものが犯罪の抑止力となる。

悪しき者はその名に恐怖し、平穩に生きる人々はその名に安堵する。

まさに平和の象徴。

その偉大な人物が教鞭を執る、雄英の生徒にとってはこの上ない幸運だ。

だが、他校の生徒からすればずるいと思うだろうし、市民にとっては彼が教師になることよってヒーロー活動が縮小されるという不安に繋がるのかもしれない。

じゃあ、悪しき者にとっては……？

「金木、何してる。早く教室に入れ。」

険しい表情で教室のドアに手をかけたまま固まっていると、相澤の気怠げな声が聞こえて我に返った金木は、「すみません。」と言いながら自分の席に着く。

オールマイトが教師になることで生まれる少しの不安と、ヴィランにとっての隙。そんなものはきつと、自分よりもオールマイト本人や雄英高校の先生方が何度も思索を巡らせているだろう。

なんでもかんでも不安に思っただけ深く考えすぎるのは却って良くない。

「昨日の戦闘訓練お疲れ。Vと成績見せてもらった。」

「爆豪、お前もうガキみてえな真似するな。能力あるんだから。」

「…わかつてる。」

「で、緑谷はまた腕ブツ壊して保健室か。いつまでもできないじゃ済ませねえぞ。やれるようになるればできることも多い。」

「っはいー！」

「さて、急だが今日はお前らに…」

（また抜き打ちテストか…!?!）

「学級委員長を決めてもらう。」

「「学校っばいのキターーーっ!!!」」

誰もが我こそはと手を高々と挙げる。

普通の学校ならば学級委員長などをやりたがる者は少ないだろう。

いたとしても内申点目当てであつたり、ただ目立ちたいだけだったり、とそんなもの

だ。

だが、ことヒーロー科において、集団を率いるのは何にも代え難い経験になる。

いかにエリート校のヒーロー科といえど委員長に与えられる権限は大したことがないだろう。

それでも、将来のことを考えれば、委員長という役割を経験できるのは3年間しかない学校生活の中で限られたチャンス。

そんな考えがあるのだろうか、誰も譲ろうとはしないし、クラスのほぼ全員が挙手している。

しかし、金木の右腕は挙がっていない。

特に深い理由もないが、集団を導くのは苦手だと自覚しているからだ。

クラスメイトの熱量に少し気圧されていると、飯田から投票すべきだという案が出た。

(投票か……。正直みんなのことあんまり知らないしなあ……。)
(言い出しつべの飯田くんでもいいか。)

特に悩むこともなく、金木は投票用紙に飯田の名前を書く。

結果は、緑谷が委員長、八百万が副委員長ということになった。

まあこのクラスは誰が委員長になってもきつと大丈夫だ。

午前の授業が終わり、金木は食堂に来ていた。

ランチラツシユの作るメニューは、どれも本当に美味しくて毎日メニューに悩む。

そして、どのメニューを頼んだとしても味はもちろん、栄養バランスなども考慮されているようで、さすがプロだと感心してしまう。

今日は何を食べようかと熟考していると、後ろから肩を軽く叩かれた。

「あのー、あなたもしかして『中学生ヒーロー』じゃありませんか?」

振り返ると知らない顔だった。

「というか顔がものすごく近くにあった。」

「…うわっ!」

「フッフッフ…ひどい反応ですねえ。私サポート科の発目といいます。あなた去年『中学生ヒーロー』って騒がれてた方ですよね?」

「そうですけど…その呼び方はちよつと。ヒーロー科の金木です。…えつと発目さんは、僕に何か用があるんですか?」

「まあまあ、そんな警戒せずとも!ちよつと有名人に会えたから声かけてみただけですよ。」

「有名人って…。そんな大層なもんじゃないですから。」

「ケンソンしますねー！まあ本題を言う私のベイビーの実験台に…おっと。コスチュームなどでお困りのことはないかな、と思ひまして。」

ベイビー。

実験台。

確実にヤバイ単語が出た。

「建前はサポート科はヒーローをサポートするのが仕事。なんです、本音は有名人に使ってもらえば私のドツ可愛いベイビー、つまり発明品のアピールになると思つてのことです。」

「カネキさんはコスチュームの改良ができる、私はアピールになる。どうです？ Win
— Win でしょう？」

コスチュームというワードに少し興味を惹かれた。

先日の戦闘訓練の時、戦闘そのものは反省点もあったが、充実したものだった。

だが、その直前。

みんなが凝つたコスチュームに身を包んでいるのを見て、正直本当にコスチュームを適当に発注したことを後悔した。

改良というよりがつり考え直したいと思つていたところだ。

実験台というのはちよつと引つかかるが、話を聞いてみる価値はある。

「まあ！急にこんな話をされても困るでしょう！またゆっくりお話ししましょう！では！！」

「あ……ちよ……」

金木がどう返答すべきか考えていると、兇目はそう言い残して去って行ってしまった。

次に見かけたらこちらからお願ひしてみようか、と兇目の後ろ姿を見送っていると、背後から禍々しいオーラを感じた。

しかも2つ。

どちらも刺すような強大な殺気。

先日の爆豪をも超えるような殺気。

ゾクリ、と背が冷たくなる。

そしてその殺気は音に乗って怨嗟の声として金木に届けられる。

「金木イ……また女子かあ？」

「ケンくん……さっきの女ダレです？」

峰田くんとトガさんだった。

「あ、トガさん。さっきのはサポート科の人だよ。コスチュームの件で相談にのつてくれるみたい。お昼まだ？一緒に食べようか。」

「はいっ!!」

金木は渡我の扱いに慣れてきていた。

他の女の話題はサラリと流して一緒に時間をつくれば、だいたい丸く収まるのだ。

蛙吹が言うように、渡我を懐柔しているジゴロのようであまり気は進まないが。

「おいしい!!無視して女子誘ってんじやねえよ!!紹介すべきだろ!?!友達だろ!?!」

血の涙を流しながら峰田が金木を見上げてツバを撒き散らす。

その形相に少し気圧されつつ、金木はスルーしてしまったことを謝って両者を紹介した。

「この子が前に言ってたB組のトガさん。トガさん、こちらクラスメイトの峰田くん。」

「峰田だ。よろし…」

「ふーん、興味ないです。」

金木の紹介が終わるや否や、キメ顔で親指を立てながら自己紹介した峰田の言葉を最後まで聞くこともなく、渡我は顔も見ずにバサリと袈裟斬りに一刀で断ち切った。

その後、何度か金木が声をかけたのだが、峰田はそのポーズのまま動かなくなったので、金木と渡我はランチを手にその場を去っていった。

「お昼一緒に食べるの初めてですねエー!」

「そういえば雄英に来てからは初めてだ。」

「ところで。さっきの話ですけど、コスチューム変えるんですか?」

「うん、被服控除の時すごい適当に決めちゃったから。もうちよつと個性に合わせてりとか動きやすさとか追求してもいいし、サポートアイテムみたいなのもアリかなって。」

「ケンくん、あんまり服とか気にしないタイプですもんねエ。ていうか私のコスチュームは一緒に考えてくれたのに、自分のは適当に決めたんですか。」

「うん…いや、自分のは単純に動きやすければいいかな、って…。トガさんの個性を活かすにはけっこう特殊なコスチュームが必須だったしね。」

「そのおかげで、かぁいいコスチュームができて大満足です!」

ウウー————!!!

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんはすみやかに屋外へ避難して下さい。』

渡我との談笑は、けたたましいサイレンの音でかき消された。

続いて電子の声で聞き慣れない警告が鳴り響く。

(セキュリティ3って…なんだ?ともかく今は外に出なきゃ!)

キョトンとする渡我の手を引き、食堂の出口へと向かう。

だが、食堂にはヒーロー科だけでなく普通科やサポート科、経営科など、大多数の生徒が集結している。

その大量の人間が警報の言葉通りに屋外へと出ようとすればどうなるか。結果は群集事故だ。

人間が密集した現場を甘く見てはいけない。

たかが人混み、たかが雑踏。

そんなものは無知な者だけが言える言葉だ。

ドミノ倒しになれば、一人にかかる圧力は一人分の体重ではない。

骨折、内臓破裂、荷物が前の人間に突き刺さる、などの大惨事に繋がることもあるのだ。

どれだけ敏捷性に優れていても、どれだけ強い個性をもっていても、自分が動けない状況なら？ 動けない原因が周りにいる学友だったら？

そんな時に、自分を取りうる手段などほぼないに等しい。

(……くそつ。どうしたら……)

金木たちも人の波に飲まれ、群集の中に取り込まれている。

警報の原因が何かはわからないが、このままでは二次災害は免れない。

(……窓を叩き割るか？ いや、でもガラス片で怪我する人がいるかも……)

金木は焦りを浮かべながら、窓を注視する。

その奥、つまり窓の外にカメラやマイクを抱えて集まっている報道陣が見えた。

(マスコミ…!?)

どこまで。

どこまで自分都合なのか。

信念をもって仕事をしている人もいるのだろうが、何の罪もない人間に迷惑をかけてまでやることに正義などない。

過去の事件の後の報道、そして今朝の一件もあつて、心の中でマスコミに対して、よりも暗い感情が淀むのを感じる。

「大 丈ー夫!!!」

「ただのマスコミです！なにもパニックになることはありません、大丈夫！ここは雄英！最高峰の人間に相応しい行動をとりましょう！」

前方、やや上。

飯田が壁に張り付いて声をあげている。

集団心理という言葉がある。

人が密集した時、感情は伝播する。

特に、不安や怒り、そういった負の感情は瞬く間に広がる。

今、飯田の声が響く前の群集は、明らかに不安に吞まれていた。

金木も自分自身が不安や焦り、マスコミへの怒りに吞まれていたことを自覚する。

たった一言。

「大丈夫」

不安な時に一番かけてほしい言葉だ。

一言でこの場の異常な集団心理を打ち払い、群集を導いてみせた。

(すいい)

心中で正直に飯田を賞賛する。

状況を認識した上で、かけてほしい言葉をかけられる。

実力がどうか、個性がどうか、そんなものを超えた“ヒーロー”としての振る舞い

だ。

自身を恥じると同時に、先ほどの委員長投票で飯田を選んだのは間違いじゃなかったと再認識する。

飯田の声で生徒たちは落ち着きを取り戻し、慌てず騒がず迅速に移動を再開する。

ほどなくしてパトカーのサイレンが聞こえた。

警察がマスコミを退散させたようで、雄英には日常が戻った。

「委員長は、やっぱり飯田くんが良いと…思います！」

午後、他の委員を決める前にデクが言った一言に異論を唱える人はいなかった。

U S J 編

矛先

ある日の午後。

次の授業はヒーロー基礎学だ。

初回の戦闘訓練は、自分の課題を見つける上でとても為になった。

2回目となる今回は、どんな内容になるのだろうか。

そんなことを思いつつ、金木は教室で次の授業に想いを馳^はせている。

そんな午後。

朝、登校してすぐに八百万さんに借りていた本を返して、逆に貸していた本を返却されて、午前に普通の授業を受けて、お昼には食堂で渡我に駆け寄られ、それを見た峰田から血涙を垂れ流しながら怨嗟^{えんさ}の声を頂戴して、これから始まる午後の授業に備えている。

そう、そんな、いつもの午後。

だが、この日の午後を境にして金木の人生は大きく変わることになる。

「今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト、そしてもう一人の3人で見ることに
なった。」

相澤の言葉に、金木は自分が懸念していたことが当たっていると直感した。

——先日のマスコミ騒動。

校門のゲートが何者かに破壊されており、そこからマスコミが入ってきた。

だが、いくらマスコミが横暴だとはいえ、校門の破壊などするだろうか。

オールマイトの教師就任も相まって、テロにも似た反対運動のように金木は感じたのだ。

有名ヒーローの台頭以降、一般市民はヴィランに怯えつつも脳内のどこかには「ヴィランは考え無しに暴れるだけの雑魚」、
「ヒーローにやられるかませ犬」という印象が、少なからず存在する。

だが、ヴィランもヒーローも同じ人間だ。

賢しい者も、強大な者も、思想をもつ者も、いる。

先の騒動はそんな思想をもったヴィランによる反対運動なのでは、というのが金木の

推測だった。

とはいえ、雄英のセキュリティは、ゲートだけではないし、プロヒーローもオールマイトだけではない。

この相澤先生だってプロヒーローなのだ。

今は、対応は学校に任せ、自分がしっかりと成長することを考えるべきだ。

「訓練内容は災害水難なんでもござれ。レスキュー訓練だ！」

相澤の言葉を脳内で反芻する。はんすう

レスキュー訓練。

人の命を救う訓練。

戦闘訓練よりも、何よりも、金木が一番学びたいと思っていた訓練内容だ。

相澤からコスチューム着用は自由という話があったので、コスチュームの改良点を見つけるにも良い機会だ。

(よし！頭切り替えて、ちゃんと訓練しなきゃ！)

コスチュームに着替えた金木たちは、訓練場に向かうためにバスに乗り込む。

委員長になったことで張り切っている飯田に苦笑しつつ、金木はバスの後ろの方で2人掛けの席に1人で座った。

バスが走り出してすぐに、蛙吹が金木の方を見て口を開く。

「カネキちゃん。私思ったことを何でも言っちゃおうの。」

「ん？なに、梅雨ちゃん？」

「カネキちゃんのコスチューム、体操服と変わらないわ。」

「……………っ!!!」

「たしかに。っつて、梅雨ちゃん!!…金木くんめっちゃ凹んどるー!」

諭えるなら銃で撃たれて倒れたところに矢が飛んできて刺さった感じだろうか。

蛙吹の素直な意見に胸を抉^{えぐ}られ、麗日の同意でさらに凹む。

ははははは、と尚も笑い続ける麗日にも、ケロリとした表情で金木を見つめる蛙吹にも、悪気はない。

「……………今回の訓練でコスチュームの課題見つけて考えようと思つてたところなんだ。一応これも耐熱、耐寒、防塵とか性能はあるんだけど…」

「作業服のキャッチコピーみたいな性能ね。」

「……………っ!!!」

「蛙吹さん!!!金木泣いてるから!!やめたげて!!」

梅雨ちゃんは、本当に思ったこと何でも言っちゃうんだなあ。そして、切島くんは優しいなあ。

心を抉られたが、訓練の施設は目前。

金木はこれから行われる訓練に意識を切り替える。

ただ、コスチューム改善の優先度が少しだけ上がった。少しだけ。

訓練施設は広大だった。

想定していた10倍くらいはあるだろうか。

水難事故、土砂災害、火事：など、あらゆる事故や災害を想定して作られた演習場。

ウソの災害や事故ルーム、略してUSJ。

略すくらいなら救助演習場でいいのでは、と無粋なことを考えてしまうが、広さより名前より金木の興味を唆ったのは、これを作ったのが目の前にいるスペースヒーロー

「133号」だということだ。

災害救助で活躍するヒーローで、個性は『ブラックホール』。

吸い込んだものをチリにする個性で、瓦礫や炎、水など何でも除去して人を救けられる。

だが、その強い個性もさることながら、13号の良さは他にもある。

「僕の個性は『ブラックホール』。どんなものでも吸い込んでチリにしています。」

「その個性で、どんな災害からも人を救い上げるんですね。」

「ええ……しかし、簡単に人を殺せる力です。」

「一歩間違えれば容易に人を殺せる『いきすぎた個性』を個々が持っていることを忘れないで下さい。」

「君たちの力は人を傷つける為にあるのではない。救ける為にあるのだと心得て帰って下さいな。」

これだ。

生で聞くその言葉に感動すら覚える。

いつか、どこかの雑誌に掲載されていた、インタビュー記事で読んだのと同じ。

この考え方に感銘を受けて、金木は彼女のファンになった。

明らかに殺傷力の高い個性でなくても、他人を害そうと思えば誰にだって容易に人を傷つけられる。

人を傷つけるためではなく救うために。

そのために自分を磨きたい。

父の話聞いて、実際に人を傷つける者と対峙して、その想いが膨らんだから、ここにきたのだ。

今日はどうかやらオールマイトは授業に来られないようだが、雄英の教師陣は本当にすごいヒーローばかり。

こんな人たちに教わることは、本当に僥倖だ。

ズズ　ズ　ズズ

金木の感動をよそにして、遠くの方で微かな衣摺れのような音がした。

その音と共に、演習場の中央・噴水の前にドス黒い雲のような靄もやが現れる。

最初に気づいたのは相澤だった。

「ひとかたまりになって動くな!!」

血相を変えて、そう叫ぶ相澤の声が響いても、誰も脅威に気づかない。それはそうだ。

ここはヒーロー養成の名門である雄英高校で、オールマイトもいる学校で、今この場だけでもプロのヒーローが2人もいる。

そんな学校なのだ。

誰だって、そんなことは考えない。

ヴィランが攻めてきた、なんてことは。

靄の中からは続々と人が姿を現す。

禍々しい装束に身を包み、薄ら笑いを浮かべている。

そして、その中心にいる細身の男。

身体に幾つもの手の形をした何かを付けている。

見た目もそうだが、何か、言い表しようのない禍々しい狂気を捏ねて固めたような、その身から溢れる悪意に晒されて、金木は心臓が早鐘を打つのを感ずる。

「動くな!! あれはヴィランだ!!!」

未だに脅威に気づかない生徒たちに向け、相澤が再度注意を促す。

「どこだよ……せつかくこんな大衆引き連れてきたのにさ……オールマイト……平和の象徴……いないなんて……」

「子どもを殺せば来るのかな?」

手を付けた細身のその男は、ポソリとそう言い放った。

白昼堂々、雄英高校に乗り込んできたヴィランの集団。

そして、狙いは平和オールマイトの象徴。

マトモじゃない。

「これは用意周到に画策された奇襲だ」と轟が言う。

金木も内心でそれに同意する。

センサーが作動しないこと、ここが隔離空間であること、オールマイトがこの時間にここにいるはずだと知っていたこと。

それらが示すのは計画性。

そして、ここまで綿密な計画が立てられるということとは。

オールマイトが相手でも、勝てる、算段があるということだ。

「13号！任せたぞ！」

相澤は13号にその声を掛けると、ヴィランの集団に単独で迫る。

多勢に無勢にも程が有る。

はやく増援を送らなければ万が一もありうる。

金木の脳内で、思考は目紛めまぐるしく加速し始める。

だが、その焦りを宥めるかのように、相澤はヴィランの集団を圧倒していた。
疾い。

駆け出した初速の速さ、身のこなしの無駄のなさ。

小さな動きひとつひとつから、プロの凄さを感じる。

そうだ、相澤先生はプロなのだ。

多勢を相手にしたことがないわけではない。

ゴーグルで目線を隠し、個性を消し、相手の連携を崩しながら捕縛布と肉弾戦で流れるようにヴィランを倒していく。

「早く避難を！」

相澤の戦闘に見入っていた金木と緑谷に向けて、飯田が声を上げた。

13号を先頭に、生徒たちは避難すべく演習場の入り口に向かう。

「させませんよ。」

その鼻先に、どこからともなく先程の黒い霧が現れた。

「初めまして。我々はヴィラン連合。」

「僭越ながら……この度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは」

「平和の象徴、オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです。」

その言葉の意味を正しく理解できたのは、果たして何人いただろうか。

オールマイトを殺す。

その言葉は果てしなく荒唐無稽で、だからこそ、不気味だった。

「本来ならばここにオールマイトがいらっしゃるハズ……ですが、何か変更あったので

しょうか？ まあ……それとは関係なく……」

「私の役目はこれ。」

ズズッと黒い霧が広がる。

生徒たちの足止め。

それが眼前にいるこの男の役割。

「その前に俺たちにやられることは考えてなかったか!？」

靄が広がりきる前に、切島と爆豪の2人が黒い靄の男に攻撃を加える。

「ダメだ！どきなさい、二人とも！」

二人の攻撃はここしかないというタイミングだった。

だが、まるでダメージを感じさせない様子で、黒い靄の男はユラリとその姿を現し、その靄を広げる。

13号の忠告も虚しく、金木たちは全員その靄に囚われてしまった。

会敵

「ぐっ…!?」

霧に飲み込まれた直後、金木の視界は暗闇から急激に明るさを増した。

辺りは岩に囲まれた地形で、すぐ側では八百万と耳郎、上鳴が同じように辺りを見回している。

「ここは…山岳災害を想定したエリアでしょうか？」

「うん、たぶんそうだね。バラバラにされちゃったみたいだ。」

「バラバラにしたつつつても4人も固まっちゃまってるし、ここには推薦組2人もいるじゃん！」

「バカ上鳴バカ！ここに4人固まってるってことは1人で飛ばされたヤツもいるかもしれないってことだろ。ウチらは固まってさっさと他と合流しないと！」

耳郎の言う通り、先の霧で飛ばされた生徒たちの中には孤立している者もいる。

だが、上鳴の言う通り、このエリアに関して言えば戦力過多と言っても過言ではない。

「…上鳴くん、下がって！」

金木が上鳴の胸を押し下がらせた直後。

ブンツ、と上鳴が居た位置を大振りの拳が通り過ぎる。

不意の一撃を避けられたヴィランは、大きく舌打ちをしながら仲間に向けて叫ぶ。

「ちっ！おい、お前らガキどもはここだ！」

その言葉で、ヴィランが続々と集結していく。

そして統率も連携もない、ただの暴力を振りまいていく。

だが、どの攻撃も当たらない。

特殊な個性を用いた攻撃ならいざ知らず、殴る、蹴る、武器を振るう…

素人の使う暴力など、日々ヴィランとの肉弾戦を想定して訓練している雄英生にとっ

て、いなすのも躲すのも難しくはない。

それでも、その表情には焦りや不安が隠せない。

ヒーロー志望とはいえ、まだ高校生になったばかりの子どもたち。

明確な敵意をもって攻撃に晒されるのは初めてなのだ。

一人を除いて。

バチイッ！

と何か弾ける音がして、一人のヴィランが倒れる。

続いて、鈍く重い音がして、もう一人のヴィランが倒れる。

辺りには砂埃が舞い上がる。

耳郎や上鳴は、何が起きているのか分からず、互いの顔を見合わせる。

八百万は目を見開いたまま、倒れていくヴィランを見る。

そして数秒後、砂埃を切り裂いて金木が現れた。

その手には刀のような武器が握られている。

「八百万さん、さすが！これすごく使いやすい！」

「は？金木…なにそれ…つか、ヴィランは…？」

「まだ辺りに何人かいるよ。たぶんもう少しで集まってくる。」

「さっきのつて、戦闘訓練の時の瞬間移動みたいなやつ？」

「…瞬間移動ではないけどね。限界突破オーバーフローって呼んでる。限界超えて個性使うから、講評

の時に八百万さんに指摘された通り反動すごくてあんまり使えない。」

「いや…使えない、つて…。」

「これのどこが使えない技だというのか。」

ヴィラン3〜4人を瞬殺。

連続して使えずとも十分すぎる。

「つーか、その武器は？え？…ヴィラン斬り殺したの？」

「…いえ、殺してませんわ。金木さんが持っているのは私が個性で『創造』した模造刀。刃のない刀です。」

最初にヴィランが上鳴に襲いかかり、金木が注意を促した直後。

金木は八百万に武器を創造してもらおうべく耳打ちした。

金木の依頼に瞬時に応えた瞬発力や模造刀の構造を把握していた八百万はさすがと言える。

しかし、刮目すべきはその後。

相手が武器を手に行っているのだから、こちらも得物があるのは理解できる。

そして、刃がついていたら致命傷を与えかねないから模造刀というのは分かる。

だが、模造刀を手にした金木の動きは…。

八百万には、微かにしか見えなかった。

だが、ハッキリ分かるのはただ振っているのではない、ということ。

「刀を振る」のと、「剣術を使う」のでは意味が違う。

両手の小指をしつかりと刀の柄の菱目ひしめにかけ、相手に振るう際にキツチリ刃筋はすじをたてる。

剣術の基礎ができた動きだ。

「金木さんは…剣術に精通してますの?」

「いや、全然…。この間『剣術の基礎』っていう本読んだとこだったから刀にしたんだけど、大人数相手なんだし、もっと効率いい武器にすれば良かったかも。…あつ!でもこの刀はすごい使いやすいよ!」

金木は慌てて八百万の創造した武器を褒める。

上鳴も耳郎も、金木の動きが見えていなかったため、八百万の武器がすごいのだと納得している。

だが、八百万からすれば先程の言葉はありえない。

自分も個性の都合上、本をよく読むが、この間、剣術の本を読んだから」といって、正確にその動きを現実で行うことなどできない。

類たぐい稀まれな才能だ。

「八百万さんっ!」

固まっていた八百万の背後から、巨大な岩石が飛んでくる。

金木の声の後に続いて、耳郎も上鳴も声を上げる。

その声で我に返った八百万は、後ろを振り返り、自分の身長ほどもありそうな大きな岩が迫ってくるのを視認した。

（!!っ間に合わない。）

八百万がそう考えるのと同時に、身体がふわりと宙に浮く感覚がした。

「ごめんね。咄嗟とつさに。」

気づけば八百万は、金木に所謂いわゆるお姫様抱っこで運ばれていて。

いやに対空時間が長いと思えば、自分たちがいる位置は遙か上空で。

大岩がぶつかる直前に金木が助けてくれたのだろうが、こんなに高く飛ぶ必要はあったのか。

眼下にはヴィランがわらわらと集まっている。

そして、辺りを見渡すと、遙か遠方で多数のヴィランと一人で格闘している相澤の姿が見えた。

（なるほど、飛んだのは現在位置と状況の把握のためですね。）

「まずい。八百万さん、相澤先生が苦戦してる。さっさとここを抜けて援護しに行こう。」

「え、ええ。ですが、ここにも相当な数のヴィランが集まっていますわ。」

「ヴィランは僕がなんとかする。八百万さんは、降りたら個性で相澤先生のところまで

の移動手段を創造してもらえる？」

「わかりました、つわ！」

打ち合わせもそこそこに、八百万を抱えた金木が着地する。

地上では耳郎と上鳴がヴィラン相手に苦戦している。

「ヤオモモっ！武器作って！」

「あぶねっ！俺にも武器くれっ！」

最初に倒した4人のヴィランを除いて、さらに16人。

そこから耳郎と上鳴がそれぞれ1人倒して、残りは14人。

金木は八百万に移動手段のことを念押しすると、大きく息を吸い込み、また超速戦闘を開始した。

今回は、3人にもかろうじて金木の姿が見える。

金木は鞘に納めた模造刀を構え、地面スレスレの低い位置を超高速で移動する。

左手の親指に鑊つばをかけ、チキリと鯉こい口を切る。

逆袈裟さかぜ気味に居合で抜かれた刀身は、移動のスピードを乗せてヴィランへと叩きつけられる。

そして、ヴィランが倒れる前に高く脚を振り上げ、その隣のヴィランを地面に向けて蹴りつける。

2人のヴィランが気を失って倒れる頃、ようやく周りのヴィランが金木の存在に気づいた。

だが、身構えるよりも先に金木はまたも姿を晦くます。

刀で、蹴りで、拳で、片っ端からヴィランを圧倒していく。

そこかしこで汚い悲鳴があがる。

結局、14人いたヴィランは5分と持たず、金木一人によって制圧された。

赫醒

「八百万さん、移動手段の方は？」

「もう少しかかりますわー！」

現在、八百万だけ大きな岩を挟んで金木たち3人とは反対側にいる。

個性で大きなものを創造しようとする、時間がかかり、服が破れてしまったためだ。

「八百万さんの創造が終わったら、3人は固まって他のみんなと合流してほしい。あと、なんとか外に連絡をつけてくれないかな？」

「3人は…つて金木はどうすんだよ？」

「今、相澤先生はたぶん苦戦してる。僕はそこに加勢に行く。」

「…ウチらもそこに行くべきなんじゃない？」

「いえ。それには及びませんわ。相澤先生の元へは金木さんと私で向かいます。」

創造が終わったのか、八百万がその姿を現す。

服も創造で作り返したようで、新品そのものだ。

「いや、八百万さんも……」

そう言いかけた金木の言葉を遮って、八百万が先程創造したものを引きずってきた。それは、まさかのバイクだった。

「え……バイク……え？」

「ええ、バイクです。正確には250ccモトクロスバイクです。エンジンは水冷4ストローク4バルブ単気筒で……」

「いや、ヤオモモ。それ聞いてないから。」

「かつけええええ!!」

「この山岳エリアで最も早く移動できるのはオフロードバイクです。運転は私になりますから、金木さんは後ろへ。」

「えと、免許は……?」

「当然ありませんが、ここは私有地ですので。それに私、運転は得意ですよ?」
こうなつてしまつては仕方ない。

金木にバイクの運転はできないし、2人ずつで行動するのがベターだろう。

「それと、お二人にはこれを。」

そう言つて、八百万は上鳴と耳郎に武器を手渡す。

金木に渡した模造刀とは違い、それぞれの身長や体格に合わせた長さの武器になつて

いるのは、さすが推薦組といったところだろう。

「サンキュ！俺らはさっさとみんなと合流して先生呼んでくつから2人とも気をつけろよー！」

「このバカと一緒にするのは気に食わないけど、まあしようがない。気をつけてね。」

上鳴と耳郎は武器を受け取ると、金木の指示のもと隣の火災エリアに向かつて走りだした。

「金木さん。我々も行きましようー！」

「うん。えと、これ、僕どこを持ってば……う？」

「しつかり掴まっついていてくださいねー！」

すでに個性で創造したヘルメットを被り、バイクに跨またがって準備万端の八百万からヘルメットを手渡される。

金木はそれを被りながら、タンDEMシートに座る。

座ってみて気付いたが、眼前の八百万は露出度の高いコスチューム。体に触れるのは憚はばられて、どこに掴まっついていいものかも分からない。

そんな金木をよそに、八百万がブオン！とエンジンを一度吹かしてバイクは走り始めた。

結局、金木は掴まり方が分からず、内腿うちももに力を入れて下半身のみで姿勢を制御して必

死にバイクのスピードに耐える。

自分が高速で動くのと、高速で動いているものにしがみつくのでは勝手が違うな、と、ふと思った。

山岳エリアというだけあって、道が舗装されていないのはもちろん、地面の凹凸や砂利で、思ったよりもバイクが跳ねる。

だが、それを恐れてスピードを落とせば安定感も落ちる。

無免許でオフロードバイク、しかも二人乗り。

実際のところ、運転している八百万にとっても恐怖でしかない。

それでも、先程見せつけられた金木の実力ならば、相澤を救えるのでは？という期待。

そして、そんな金木に置いていかれたくないという想いで、必死に恐怖を乗り越える。

今の自分は足手まといにしかない。

個性『創造』は万能ではない。

自身の脂質を媒介に構造を知るものであれば生み出すことができるが、大きなものを作れば、

それだけ体からエネルギーを消耗するのだ。

だから、相澤のもとにたどり着けても自分は戦力にはならない。

しかし、それでも金木を送り届けるくらいはしてみせる。

高速で横を流れていく景色を眺める余裕はない。数メートル先の地形のみに集中してバイクを操る。

ややあつて、2人を乗せたバイクは舗装された地面へと降り立った。相澤の元まではまだ遠い。

だが、ここからはフルスロットルでいける。

「金木さん!!!しつかり腰に掴まってください!!!」

バイクの駆動音に負けないよう、あらん限りの大声で後ろの金木に向けて声をかける。

金木には伝わったようで、遠慮がちに腰に手が回された。

同級生の男子に抱きしめられている、という状況だが、恥ずかしがっている場合ではない。

アクセルを思いっきり開ける。

風を切る音が半オクターブほど高くなった気がする。

金切り声のような風の悲鳴を聞き流しながら、バイクは疾走する。

「!!」

まだ数十メートルは先だが、相澤と多数のヴィランの姿を視認できた。手のオブジェをつけた男と交戦している。

相澤の肘打ちを手の男が防ぐ。

すると、なぜか攻撃した側の相澤がダメージを負う。

そして、他のヴィランが負傷した相澤を狙って攻撃を繰り出す。

それを避けるも、脳を剥き出しにした巨大な筋肉の塊が背後から相澤の腕をとる。

そのまま相澤は地面に叩きつけられ、腕を折られた。

使い終わった爪楊枝でも折るかのように簡単にへし折り、そのまま相澤を拘束している。

悲痛な光景に息を飲む。

だが、良かった。

間に合った。

「……!」

相澤は悲痛な声を嘔み殺していた。

折られた腕、乗せられた体重。
動けない。

万事休すか、と思った時、バイクの駆動音が聞こえた。
それはどんだん近づいてきて、

「八百万さん、掴まって！」

聞き覚えのある生徒の声がした後、乗り手のいなくなったバイクは、派手な音をたてながら少し先の壁にぶつかって、ほどなくして停止した。

金木と八百万。

やってきた生徒の顔を見る。

なぜここにきた……！

この状況で小言を言うつもりはないが、ここは余りに危険すぎる。

相澤は顔を上げようとするが、拘束しているヴィランはそれを許さない。

「八百万さん、周りのヴィランの牽制を！」

「つええ、わかりましたわ！」

金木はそう伝えた直後、限界突破オーバーフローを発動して相澤を拘束しているヴィランへと切迫し、思い切り殴りつけた。

が、微動だにしない。

「…!?!」

ならば、と指のみに攻撃を集中して相澤の拘束を解く。

そしてすぐさま相澤の身体を抱えて八百万の元へと跳躍する。

「相澤先生……くっ、傷がひどい!」

八百万に相澤の身体を預けると、周りのヴィランを瞬く間に片付ける。

残りは手をつけたヴィランと脳剥き出しのヴィランの2人。

なんとか時間を稼げば、救援がくるはず…。

金木が決意を固めると、手をつけたヴィラン…死柄木^{しがらき}が溜息混じりに呟いた。

「なんだこのガキども? おい、脳無。やれ。」

やめろ!

相澤がそう叫ぶよりも先に、脳無と呼ばれたヴィランは、その巨体からは想像もつか

ないスピードで八百万へと迫った。

「つく…!!」

脳無の拳は八百万へと向かう。

全く反応できていない八百万を、金木は手加減もできずに突き飛ばす。

ぼごり。と。

いやに生々しい音がした。

脳無の拳は金木の左腕に直撃し、腕はあらぬ方向に曲がっている。

「——つあぐああ” あ” ああ” あ” ああ” ああ” ああ” つつつ!!」

赤黒く変色した左腕を押さえて、金木が蹲る。

肘のあたりで骨が皮膚を突き破り、吹き出す血が辺りを染めていく。

以前にも経験がある、意識が飛びそうになるほどの痛み。

再生させようにも、痛みがそれを阻害する。

「うるせえな。おい、脳無…避けられてんじゃねえよ。さっさと殺せ。」

——殺す？

——僕を？

八百万が叫んでいるのが聞こえる。

相澤が怒りと悲しみを^{ないま}絢交ぜにした悲壮な顔でこちらへ駆け寄っている。

——僕が死んだら八百万さんも相澤先生も殺される

——殺させない

ドクン。と心臓が一際大きく跳ねて。

血が全身を駆け巡っているのを感じる。

——摘まなきや

いつの間にか金木は叫ぶのをやめていた。

声を発しなくなった金木に、また脳無の拳が振り下ろされる。

ゴツツ!!と隕石でも落ちたかのような轟音を響かせ、脳無の拳は地面を粉碎していった。

辺りには粉塵が舞う。

八百万と相澤は悲痛な顔でその光景から目を反らせない。数秒の後、粉塵がおさまった地面には、2人が想像していた金木の無残な姿はなかった。

地面に突き立てられた脳無の拳の隣で、金木はゆらりと幽鬼のように項垂れたまま立ち上がっていた。

左腕から噴出していた血がピタリと止まる。

ひしゃげた左腕が、ギョルリとそっくりそのままの形で再生される。

そして、その左手の感触を確かめるように、指をパキリとひとつ鳴らした。

その光景に八百万と相澤は言葉を失っていた。

「……脳無。」

ポツリと呟いた死柄木の言葉に、相澤はようやくやく我に返る。

「かね……」

そして金木に呼びかけようとして、また固まった。

金木の腰から異様なものが飛び出したからだ。

ニユルリと伸びたそれは、全部で4本。

赤い、血液のようにテラテラと怪しげに光る表面。

触れた地面に傷をつけるほどの硬度。

何もかもが異様だった。

金木の個性は身体強化のはずだ。

こんなものは、知らない。

脳無は、そんな混乱の極みにある相澤や八百万には目もくれず、またも金木へとその拳を突き立てる。

金木は依然無言のまま、それをひらりと躲すと、腰から生えたその異様な触手…赫^{かく}子^ねを、脳無の腹に突き刺した。

ぞ　ぶ　り

肉を掻き分ける音がして、

直後に脳無の悲鳴がこだまする。

金木は右手の指を。パキリと一度鳴らすと、ついにその口を開いた。

「僕を殺そうとしたんだ。」

「……僕に殺されても」

「仕方ないよね？」

大きく目を見開き、金木は脳無に向けて無感情にそう呟いた。もはや、相澤や八百万の知る金木ではなかった。

左眼の色が変わっているだとか、腰から異様な触手が生えているだとか、そんな変化が些細なことだと思ってしまうほど、今の金木が醸し出す雰囲気^かがまるで別人なのだ。

「ちっ！脳無、早くそのガキ殺せっ！」

死柄木の声に、脳無は悲鳴をあげるのをやめて金木に向き直る。

そして風穴を開けられた箇所を、金木と同じように再生させた。

それを見た金木は、また脳無に向けて赫子を突き立てる。

だが、脳無にその赫子を掴まれ、赫子ごと振り回されて地面に叩きつけられた。

ゴシヤツと嫌な音と共に、またも砂塵が舞う。

その砂塵を弾き飛ばしながら、再度、脳無に突撃する。

今度は個性で強化した肉弾戦と赫子を交えて手数を繰り出す。

左脚に足払いをかけ、バランスを崩した脳無の右脚を杭のように赫子で刺して地面に縫い付ける。

血飛沫と脳無の悲鳴があがるが、それを意にも介さず、さらに脳無の顔面に向けて個性全開の拳を打ちおろす。

その腕を脳無が掴み、ポキリと折り、折れた腕ごとまた放り投げられる。

体勢が悪かったのか先程よりも勢いが弱い。

折れた腕を事もなげに再生させながら、金木は空中で身を翻す。

そして、突き刺していた赫子を引き抜き、4本全てを振り上げて脳無に叩きつけた。

さきほどの轟音をさらに超える音と衝撃波、そして粉塵が辺りを包む。

「ちっ……」

死柄木は舌打ちをすると、金木に向き直る。

対して金木は、無言のまま赤く染まった瞳だけを死柄木に向ける。

そこに突如、黒い靄が出現した。

「死柄木弔。」

「……黒霧、13号はやったのか？」

「行動不能には出来たものの、散らし損ねた生徒がおりまして……一名逃げられました。」

「ああ……？……ちっ。脳無はガキ一人もまともに殺せねえ……生徒には逃げられる……」

散々だな。黒霧がワープゲートじゃなく、脳無が先生がくれたモンじゃなきや2人とも

俺が粉々にしてやんのに……」

「けど、その前に……このガキだけは殺す。」

死柄木は立ち尽くす金木を睨む。

「脳無ッ!!こいつ殺せっ!!」

地面に深々と埋められていた脳無は、その声でまたムクリと起き上がる。

それでも金木は動かない。

謎の触手はいつの間にか消え、瞳も黒に戻っている。

脳無は、そんな金木に向けてズンズンと一歩ずつ歩を進める。

だが、金木の前に相澤と八百万が立ち塞がる。

「……させませんわ。」

「……さっきの話。生徒に逃げられたって言ったな。だったらもう間もなくヒーローが援軍に駆けつけてくる。お前らは逃さない。」

「どいつもこいつも……っ!!脳無!!全員殺せ!!」

逃さない。

相澤はそう言ったが、内心では逃げてくれることを期待していた。

相澤の個性「抹消」は、対象を見ている間、個性を消すことができる。

だが、インターバルがあり、今の自分の状態では3人全員の個性をまとめて抹消できるのは数十秒が限界である。

そして個性を消してもなお圧倒的な力を誇る、あの脳無という怪人。

対して、ここにいるのは先程から様子がおかしい金木と、成績優秀とはいえ八百万

人と負傷した自分だけ。

明らかに分が悪い。

生徒の命に関わる事態なのだ。

そんな相澤の内心をまるで無視して、脳無は相澤たちもろとも金木に向けて拳を振上げる。

相澤は個性を発動しつつ、脳無に捕縛布を飛ばす。

八百万は金木の身体を支えたまま、脳無に向けて創造で作り出した武器を構える。

先程の戦いを見ていた2人は、これで脳無の一撃を防げるとは思っていない。

それでも2人は金木を見捨てられない。

金木は動かないのではなく、個性の反動で動けないということを理解していたからだ。

相澤もダメージでまともに脳無を止められない。

風切り音が聞こえるほどに、脳無の拳が迫る。

もうダメだ、と八百万はその身を硬くした。

そこに、一筋の緑色の閃光が瞬き、ドゴツという音と共に脳無の拳を弾き飛ばした。

「先生!!カネキ!!」

絶体絶命のピンチに駆けつけたのは、誰よりも焦りの表情を浮かべた緑谷だった。

原声

朦朧とする。

八百万さんの声。

相澤先生の声。

ぐわんぐわんと頭の中で何度も反響して、ついにはデクの声も聞こえた。

………これは、幻聴？

………ここはどこだ？

…僕は、何をしてたんだっけ——？

「カネキっ!!」

緑谷の声に、金木の意識は急浮上する。

相澤と八百万に並んで、緑谷は脳無と対峙していた。

「………？あ………!!」

「…正気になったか。金木、さっきの現象についての問答は後だ。持ちこたえるぞ。」

「……っはい。」

相澤の冷静な言葉に、頭の中を駆け巡ろうとしていた思考を断ち切り、戦闘体勢をとる。

「限界突破」オーバーフローを使った後のような倦怠感が、その身を包む。

だがそれでも、今はここを無事に切り抜けなければ。

「来ます！」

八百万の声が上がると同時に、脳無が諸手をあげて突貫してくる。

緑谷はワンフオーオールをその拳に纏まとい、金木も個性で拳を強化する。

脳無が右腕を振るう。

その腕に向けて緑谷と金木は拳を振るう。

相殺。

2人の全力の一撃をもってしても、片腕の攻撃を防ぐので精一杯だ。

そして脳無は、無防備な金木と緑谷に向けてもう片方の腕を振るう。

その攻撃を、八百万は創造で出した盾で防ぐが、たやすく吹き飛ばされてしまう。

「うぐっ…!!」

「八百万さん!!」

吹き飛ばされた八百万を、金木が振り返った、一瞬の隙。

その隙をついて、脳無は金木に向けて拳を突き出す。

「カネキっ!!」

緑谷が金木を庇って跳ぶ。

金木に向かっていた脳無の拳は空を切る。

が、すぐさま脳無は相澤の方へと向きを変える。

「…まずは一番厄介なおまえだ。」

黒霧と死柄木の相手をしていた相澤は、背後からの脳無の動きに対応できない。

そして、脳無の巨大な掌が相澤の頭を掴んだ。

「ぐあ……………」

ドゴツツ。

と鈍い音がして、相澤の頭は地面に叩きつけられた。

「先生っ!!」

金木と緑谷の声が重なる。

「……………金木、さっきの個性……………、…つかえ。」

焦りを浮かべる金木に向けて、相澤がそう語りかける。

そして、そのまま相澤は意識を失った。

(……………のままじゃ、相澤先生も八百万さんもデクも…殺される。)

キツと覚悟を決めて、金木は個性の操作に集中する。
イメージ。

いくつもの触手を使うイメージ。

いや、身体の一部を増やすイメージだ。

再生と同じ要領だ。

ググツと腰のあたりに違和感を覚える。

これだ。

そして腰の皮膚を突き破って、再度、赫子が現出した。

「カネキ…？それは…？」

緑谷が金木の変化に戸惑っているが、今は説明している余裕がない。

「デク、僕がこいつを止める。相澤先生と八百万さんをお願い。」

緑谷と共に来た蛙吹と峰田にも視線を送り、金木は相澤を捕らえている脳無に向けて赫子を突き出す。

脳無が赫子の一本を掴むが、別の赫子で脳無を弾き飛ばす。

脳無にダメージはないが、ひとまず相澤を解放することには成功した。

飛ばされた脳無は着地と同時に大きく踏み込み、一足で金木の眼前に迫る。そして、その場で両の拳を何度も何度も繰り出す。

金木の後ろには八百万がいる。

金木は赫子でそれをひとつひとつ弾きながら、叫んだ。

「デクっ!!!早くっ!行って!!!」

その声に、緑谷と蛙吹と峰田が弾かれたように動き出す。

緑谷と峰田で相澤先生を担ぎ、蛙吹は八百万に肩を貸している。

緑谷たちは入り口に向けて走り出す。

(…これで、いいのか?)

しばらく走った後、緑谷は不意に金木の方を振り返る。

脳無の拳と金木の赫子が、地面にヒビを入れながら何度も何度も叩きつけあっている。

圧倒的な力と力の応酬。

あそこに自分がいても足手纏いにしかならない。

今は金木を信じて、金木に頼るしかない。

最初の戦闘訓練でタッグを組んだ時もそうだった。圧倒的に不利だと思っていた状況を覆してくれた。今は自分にできることをすべきだ。

(カネキならきつと大丈夫。)

「……っ！カネキっ!!あとでね!」

緑谷はそう叫んで、慎重に、かつ最速で相澤を運ぶ。

金木の視界は白くぼやけていた。

ヒュツ、ヒュツと風を切るような自分の呼吸の音だけが頭に響く。

眼前の脳無から繰り出されるパンチは、どれも一撃で致命傷になる威力だ。

それが息つく間もなく、何度も何度も繰り出される。

肺が焼けつきそうなほどに、酸素が恋しい。

汗なのか、血なのか、自分の顔を流れる液体が何なのかもわからない。

距離を取ろうにも、全ての赫子を防御に回してようやく防いでいるのが現状。

踏ん張っている脚が地面に沈んでいく。

苦しい。

息が できない。

酸欠で意識が飛びそうな中、赫子を操り、脳無の拳を相殺していく。

一発一発の衝撃で潰されそうだ。

相手は呼吸する余裕もあり、先程のダメージもまるで感じさせない。

このままじゃ……やられる。

はやく 増援を。

「……っ！カネキっ!!あとでね！」

遠くから緑谷の声が届く。

—— ああ、デクたちは逃げられたか。

—— よかった。

—— なら……もう……

—— “ カネキ、あとでね ”

ビキリと あたまのどこかが われる おと がした。
緑谷ではない、知らない女の人の声でそのセリフは再生されて、
幾つもの情景が脳内で点滅するように浮かんで消える。

「カネキ、あとでね」と言つて女性が微笑む。

—— “ こんなひと しらない。 ”

金髪の青年と喫茶店で珈琲を飲んでいる。

—— “ こんなぼしよ しらない。 ”

椅子に縛り付けられ、酷い拷問を受けている。

—— “ こんなこと しらない。 ”

だれのきおくだ？

ぼくは だれだ？

「…あ」

金木の意識は、そこでプツリと途絶えた。

ストンと膝が落ちる。

脳無の攻撃が幾つか顔を掠めていく。

拳は奇跡的に当たらず、金木はその場に倒れ伏した。

「やっと倒れたか。バケモンかよクソガキ。黒霧、他のガキどもを——」

死柄木からの命令、それが言い終わる前に、演習場の入り口が荒々しく開かれた。

「もう大丈夫!! 私 が 来 た!!!」

いつもの笑顔ではない。

怒りに燃えた表情で、その男は現れた。

平和の象徴

No. 1ヒーロー

世界で一番強い男

すなわち、それらが指す者こそ、オールマイト。

(……っ)

歯を食いしばり、オールマイトは自分に腹をたてる。

子どもたちがどれほど怖かったか…。

どれほど痛い思いをしたか…。

そして、入り口付近まで来ていた緑谷たちの元へと一瞬で移動する。

「緑谷少年、無事か…!!…!!…相澤くん、すまない。」

「オールマイト!!カネキがっ!!」

改めて、敵を見る。

脳剥き出しの筋肉男に、手のオブジェをつけた細身の男。

そして、その足元で…ぐったりと倒れている金木。

「君たち、相澤くんを頼む!金木少年は私が必ず助け出す!」

位置関係と実力からして、金木が囷になって皆を逃したのだろう。

それがどれほど勇気のある判断か…。

そしてどれほどの痛みを伴ったか…。

この件が解決して、金木が無事に起きたら、自分を責めて罵って欲しいくらいだ。そのためにも。

絶対に救ける！

「カロライナ…スマッシュ!!!」

両腕を交差させ、脳無に攻撃を叩き込む。

だが、攻撃がなかったかのように脳無はオールマイトに掴みかかる。

ダメージがない。

その事実には驚愕しつつも、その攻撃を避ける。

間髪をいれず、足元に黒霧が生み出したワープホールが出現する。

足の先が飲み込まれる感触がして、すぐにその場を跳躍してこれも避ける。

そして、その勢いのままに金木を抱き抱えて超速で緑谷のところまで駆ける。

「金木少年を頼む！」

その声に緑谷たちが返答を返す間もなく、オールマイトは脳無と死柄木らの元へと戻る。

死柄木は顔についた手の隙間から歪んだ笑みを浮かべ、両手を広げてオールマイトを

歓迎する。

「オールマイト。おまえを殺しに来たんだ。……さあ、やろう。」

「やれるものならやってみろ!!」

ギロリと、その眼光が死柄木を射抜く。

そのあまりの庄に死柄木は肝が冷えるのを実感する。

「……脳無、黒霧。いけ!!」

その声に、脳無がオールマイトへと駆け出す。

そして、それと時を同じくして、入り口で声が上がった。

「――Aクラス委員長、飯田天哉!!ただいま戻りました!!!」

声を張り上げた飯田の周囲には雄英高校が誇るプロヒーロー集団がズラリと並ぶ。

「……………あーあ、来ちゃったな…。せっかくオールマイトが来たところだったのに。」

「……………ゲームオーバーだ。帰って出直すか黒霧…」

「させるかっ!!」

黒霧がワープの個性を発動させる。

「脳無、時間を稼げ。」

阻止しようとしたオールマイトの前に脳無が立ち塞がる。

援軍にきたスナイプの援護射撃も意に介さず、脳無はオールマイトと組み合った。

「くそっつっ!!」

そして、その隙に死柄木はワープの闇の中へと消えていく。

「今回は失敗だったけど……」

「今度は殺すぞ。平和の象徴オールマイト。」

夢現

甘い香りがして、金木は目を開けた。

焦点が合っていないのか、蛍光灯の明かりと天井の白に霞がかかったようにぼやけて見える。

酷い夢でも見たのか、びっしりと枕を濡らし、呼吸が乱れているのを自覚する。

「目が覚めたかい。」

どことなく祖母に似た声がした方へ顔を向けると、リカバリーガールが呆れ顔でこちらを見ていた。

リカバリーガール。

本名は修善寺治与。

雄英高校に最も長く勤務する女性看護教諭にして、雄英の屋台骨とも評される彼女。

彼女がそうまでに評価を受ける理由のひとつが、治癒力の活性化という希少な個性だ。

「これでもお食べ。」

まだ思考が停滞している金木は、リカバリーガールからアメリカンな色合いのお菓子

を受け取りながら、ここにいる経緯を思い出そうとする。

(たしか、僕は……)

「外傷無し。貧血気味だったから、あんたが貯血してた血を輸血中さね。」

「……相澤先生たちはっ!？」

こちらの意図を汲んだように、的確に現状を教えてくれたリカバリーガールに、金木はガバツと身体を起こして問いかける。

思い出した。

全身を筋肉で覆った脳丸出しのヴィラン……

脳無と呼ばれた怪人の脅威を思い出し、一気に汗が噴き出る。

「落ちていて寝てな。事件は解決したよ。」

金木の額を優しく押してベッドに寝かせ、リカバリーガールは金木が気を失った後の顛末てんまつを教えてくれた。

自分が倒れた直後にオールマイトや増援のヒーローたちが現れ、脳無はオールマイトが制圧した上で捕縛、主犯の2人は逃走。

相澤は重症だったものの命に別状はなく、クラスメイトも全員軽症で無事だという。

(また僕は途中で……)

去年、自身を襲ったヴィランの事件を思い出す。

自分は、誰かを救ったつもりで、結局最後は誰かに救ってもらっている。

一人で何でもできるようなれるとは思わないが、このままでいいとも思えない。

「…その思い詰めた顔……。思い出すねえ。」

「おおかた力不足を悔やんでるんだろうけどね。その悔しさを力に変えるための施設が学校だよ。悔しいなら力をつけなさい。あなたの母親、シアンサーゼのようにね。」

リカバリーガールの言葉にハツとする。

自分の母親のヒーロー名がその口から出たからだ。

「あの子の個性も治癒だったからね。昔、何度か現場で会ったことがあるよ。あの子に起きた悲しい事件も知ってる。それでもね、あの子はどんな時でも前を向いてたよ。」

思わぬ母との繋がりに驚いたが、考えてみれば確かに自然な関係かもしれない。

「…リカバリーガール。母の話ありがとうございます。僕も、強くなります。」

「発破かけておいて悪いけど、個性は使い方をよく考えなさい。父親のことはよく知らないけど、あなたの個性は母親のものとも父親のものとも違う。単純な身体活性じゃないだろうからね。」

「…はい。ありがとうございます。」

リカバリーガールの言葉で、脳無との戦闘中に発現した触手のことを思い出した。

自分の知らなかった個性の使い方。

あれは個性の暴走だったのだろうか。

戦闘中の曖昧だった思考の中で、あの触手のことを『赫子^{かくね}』という名称で意識して操作していたことを思い出す。

今まで存在さえ知らなかったのに、なぜ赫子^{かくね}だと認識できるのか。

強くなりたいたいという決意とともに、少しの心の靄^{もや}を感じながら金木は輸血のチューブを見つめていた。

ややあって、オールマイトが病室に現れた。

思わぬNo. 1ヒーローの登場に金木は身体を起こして挨拶しようとするが、オールマイトは片手でそれを制しつつ、口を開いた。

「金木少年、もつと早く助けられなくて本当にすまなかった。無事で本当に良かった。」
「いえ、助けていただいたのに謝られることなんて……。」

ビシツと頭を下げるオールマイトは、いつものように力強い筋肉に包まれているにもかかわらず、いつもよりも弱々しく見えた。

脳無との戦闘の疲れなのか、申し訳ないという気持ちのせいなのか。

どうあれ謝ってもらうことなどないのだ。

「僕が倒れたのは自分の個性を十全に發揮できなかったからです。誰の責任でもない、完全な自己責任です。だからこそ、これからもご指導よろしくお願いします。」

「君は……緑谷少年と似ているな。…君がいなければ相澤くんは無事ではなかったかもしれない。他の生徒にも被害が出ていたかもしれない。君の勇気と研鑽けんさんが彼らを救ったんだ。君のヒーローとしての第一歩だな！」

オールマイトは慈愛に満ちた優しい表情から一転、濃さが上がったいつもの笑顔で金木にサムズアップを送る。

「オールマイト。そりゃ違うよ。」

だが、それをリカバリーガールがピシヤリと静かに否定した。

「この子は中学生の時にすでに人を救ってる。今回は一歩目じゃなく二歩目さね。」

「…そうか、君が『中学生ヒーロー』だったのか。すまんね、推薦組の方は直接試験を見ていないから経歴までは知らなかった。」

「中学生ヒーローっていうのはマスコミが勝手に言ってるだけで…もう高校生ですし、あの時も今回も無我夢中だっただけで…むしろあの時から成長できてないんじゃないかって自省していたところですよ。」

「君は本当に緑谷少年と似ているな。驕おごるのはよくないが、自分を過小評価するのもよくないぞ。君の実力は目を見張るものがある。そして、君はまだ発展途中だ。まだまだ

強くなれるさ。」

金木の肩にポンつと優しく手を置き、オールマイトは続けた。

「中学生ヒーローっていう名前が気に入らないなら、自分で考えたヒーロー名をしつかりみんなに覚えてもらうといい。もうすぐその恰好の舞台がやってくる。」

「では、私はこれから行くところがあつてね。お先に失礼する。金木少年、しつかり休んでから帰るんだぞ！」

オールマイトにお礼を言つて、リカバリーガールと少しの雑談をしていると輸血はいつの間にか終わっていた。

輸血が終わるとすぐに帰宅させられたり、最後にリカバリーガールから「個性の使い方は慎重にね！」と釘を刺されたり、家に帰つてしばらくすると大慌てで帰ってきた渡我にえらく心配されたり、事情を説明させられたりと、慌ただしい一日はようやく幕を閉じた。

そして翌日は臨時休校となり、「昨日心配させた罰です」と言われて朝から渡我にデートに連れ出されたのだった。

事件から2日後。

学校に着いた金木が教室を開けると、クラスメイトが一斉に押し寄せる。

「カネキー！大丈夫だったか!？」

「こういう時に一番に声をかけてくるのは、決まって切島くんだ。

「おはよう。大丈夫だったよ、ありがとう。ちよつとした貧血だったみたい。」

「貧血って…カネキ、本当に大丈夫だったの?」

「ああ、デクもおはよう。そつちこそ怪我したって聞いたけど大丈夫?」

首肯する緑谷の後ろから、上鳴たちがさらに声を掛けてくる。

「俺らと別れた後、すげー活躍だったんだろ?」

「ウチは後で聞いたんだけど、ヤオモモがさつきまでめつちや興奮しながらアンタの

活躍っぷりを語ってたよ。」

「耳郎さん！興奮なんてしてませんわ!」

押し寄せるクラスメイトたちの言葉にひとつひとつ答えながら、金木は自然に心がほどけていくのを感じた。

ああ、やはり友達って素晴らしい。

机に足を乗せて不貞腐れたように前だけを睨んでいる爆豪と、興味なさげに窓の外を眺めている轟、そして照れる八百万を見ながら金木に呪詛の言葉を呟く峰田を除いたクラスメイト全員が、金木の労を労い、心配してくれている。

それを純粹に嬉しく思う。

「みんな!!金木くんを労うのもいいが!!そろそろ朝のホームルームが始まる!!席につけーっ!!」

飯田の委員長らしい一言に苦笑しつつ、みなそれぞれの席に着いていく。

金木もそれに倣^{なら}って自分の席に腰を下ろす。

「おはよう」と、いつもの覇気のない声とともに担任である相澤が登場した。

心配していたほどの怪我ではなかったようで、よかった。

クラスメイトたちからも心配の声上がるが、それを遮^{さえぎ}って相澤はピシヤリと告げた。

「俺の安否はどうでもいい。何よりまだ戦いは終わってねえ。」

(戦い。)

(そうだ、まだ襲撃犯たちは捕まっていない。)

(いつまた襲ってくるか……………)

「雄英体育祭が迫ってる！」

「クソ学校っぽい来たああ!!!!」

雄英体育祭は、日本のビッグイベントの一つに数えられる催しである。

個性の発現や人口の収縮によって形骸化したスポーツの祭典に代わって、日本で最も注目を集めるイベントとなった。

ヒーロー科がある学校は他にもある。

その中で、これだけ国民に期待されているのだから、さすが雄英高校といったところだろう。

雄英体育祭は、ヒーロー科はもちろん普通科、サポート科、経営科も総当たりで、年別に様々な競技を通して競う。

人々は次代を担うヒーローの卵たちの活躍に熱狂し、優秀な人材を求めているヒーロー事務所はスカウト目的で卵を値踏みする。

つまり、ヒーローを目指す者にとって自分を売り込む恰好の機会なのだ。

ヴィラン襲撃があつたとはいえ、学校側としても中止するわけにはいかない。

むしろ、警備を従来の5倍に強化した上で、学校の危機管理体制を示すということらしかった。

「まあともあれ雄英体育祭は予定通り開催される。お前らが本当にプロのヒーローになりたいなら、ここで結果を出せ。以上だ。」

「ああ、あと……金木、昼休みに職員室に来い。」

「?……はい。」

彼らしい傲を飛ばした後、相澤は一言告げて教室を去って行った。

個性

昼休み、金木は相澤に言われた通り、職員室を訪れていた。

「来たか。ついてこい。」

ぶつきらぼうにそう伝える相澤に返事をしつつ、金木は後をついていく。

職員室の隣にある応接室に通された金木は、ソファに腰掛けた相澤の向かいに座る。

改めて見ると、顔に包帯を巻きつけた相澤の姿は痛々しく、その痛ましい姿が自分の力不足を痛感させる。

「まずは……すまなかつたな。」

そんな金木に伝えられたのは、相澤からの謝罪だった。

「守る側の俺がお前に守られてしまった。」

「あの時は助かった。」

包帯の隙間から覗く充血気味の瞳が、しっかりと金木を捉え、そう伝えられた。

「いえ、そんな……」

「だが。あまり無茶するな。」

謙遜しかけた金木の言葉に被せて、相澤は釘を刺す。

「あの状況では無茶するなという方が無理だった。それに未知の個性を使えと言ったのも俺だ。だが、それでもお前はまだ子どもだ。教師として言うべきことは言わなきゃならん。」

「…はい。」

「お前の個性の使い方には、以前から少し懸念けねんがあつた。初回のヒーロー基礎学で使った個性は、体力測定の時と比べ物にならない出力だつただろ。おそらく身体に甚大な負荷がかかるはずだ。あれも自重しろ。」

「あれは…限界突破オーバーフローと呼んでいます。仰る通り、使用できるのは10分ほどで、使用後は動けなくなります。……」

ついに言われたか。

金木はその言葉を観念して受け入れる。

個性を使用するたびに負傷する緑谷に対して、あれだけ厳しく言うのだから、いつかは自分も言われると分かっていた。

だが、それでも、自分の実力を底上げするために何度も試行錯誤を繰り返して会得した力を否定されたようで少し寂しい。

これから自分はどうかやって強くなればいいのかだろう。

「…勘違いするな。お前はそんなことをしなくてもやれることは多い。それに、俺の話はまだ終わっていない。」

グツと何かを噛み締めるような表情で話を聞いていた金木に、相澤は少し呆れつつ、なおも言葉をつなぐ。

「俺は無茶をするなど言っただけだ。『無茶』でなくせばいい。限界突破オーバーフローだろうが、あの触手だろうが、無理なくしつかり使いこなせるようになれ。この学校の校訓だろう？

“Plus Ultra”だ。」

「…っはい！ありがとうございます！」

相澤の言葉に胸が熱くなる。

そうだ、僕は、超えてみせる。

さらに先へと進んでみせる。

決意の灯った金木の黒い瞳を見て、相澤は心の中で微笑む。

活力に満ち溢れた若い芽の姿を見て、少しだけ自分の学生時代を思い出した。

そして、「そこで、ここからが本題だ。」と前置きした上で、相澤は淡々と金木に告げる。

「あの時見せたお前の個性だが…個性の再検査受けてこい。その上で、おそらく個性届

の変更が必要になる。単純な身体活性では説明がつかんからな。」

そう言いながら相澤は、白い角2封筒から分厚い紙の束を取り出して金木に手渡した。

「これは…?」

「国立個性診断センターから届いた書類だ。お前から採取した血をリカバリーガールに送ってもらっておいた。先に目を通させてもらったが、何でも血中に特殊な細胞があって、触手はその細胞で構成されている可能性が高い、という内容だった。詳しい検査が必要らしいから、明日にでも行ってこい。」

「あ、はい。分かりました。行ってきます。」

「ああ、明日は公欠扱いになるから心配いらないぞ。」

最後に相澤にお礼を言いつつ、金木は応接室を後にする。

教室へ戻る道すがら、先程相澤に渡された書類に目を通す。

この世界では、誰しも幼少期に個性の診断を受ける。

当然、金木も例に漏れず幼少期に受けており、特殊な細胞もその時に発見されて伝えられている。

それを受けてA B特殊型という血液型だということは判明していたが、今回の事前血

液検査で、その特殊な細胞には「RC細胞」という名前がつけられていた。

翌日、金木は国立個性診断センターを訪れていた。

受付を済ませ、名前を呼ばれるのを待つ間、少し今朝のことを思い出して苦笑いする。朝、隣に住んでいる渡我に学校を休む旨を伝えると「私も行きます！」と言って聞かなかったのである。

渋る渡我をなんとか宥めて、学校へと送り出してからここへ来た。

(そういえばトガさんからB組の話全然聞いてないけど、クラスで上手くやっていけるのかな…)

「カネキさん。カネキケンさん。5番診察室までお越してください。」

思考回路が保護者のそれになっている金木の耳に、アナウンスの声が届く。

診察室では、病院でするような簡易検査を受けた後、いつ個性に変化の兆しがあったかなどの聞き取りが行われた。

そして、その後、研究員の方に連れられて「第7個性検査室」という広い体育館のよ

うな場所にやってきた。

曰く、ここで赫子かくねを発現させてその動きを見て、赫子から再度細胞を採取して検査するとのことだった。

研究員の「始めてください」という合図で、金木は赫子を出すイメージを始める。

(あの時のイメージで……)

ズツという音とともに、金木の腰から赫子が出現する。

壁面に貼られた鏡を見ると、左眼も赤く変化していた。

研究員はテキパキと赫子から細胞を採取し、金木に赫子を動かすよう伝える。

波打つ血液のようなそれは、金木の意思の通りに動いた。

だが、過去に4本出ていた赫子は、現在1本だけしか出ていない。

そのことを研究員に伝えると、感情がトリガーになっている可能性を伝えられた。

「先程の聞き取りの際にお聞きした印象ですが、誰かを救いたいと思つた時や命の危機に直面した際に感情が昂たかぶって個性が強まる傾向があるのかもしれない。」

その後、食物摂取による細胞量の変化など、いくつもの検査を終わらせると、もう外は夕暮れに染まっていた。

再度、診察室へと戻ってきた金木は、ぐったりと疲れていた。

(オーバーフロー限界突破使った時より疲れたかも……)

そんなお疲れ気味の金木とは対照的に、研究員はウキウキした様子で結果を伝える。

「今日採取した細胞を使って詳しい検査を行っていきませんが、現在伝えられる範囲で言うと、金木さんは食物を摂ることで体内でRc細胞という特殊な細胞を生成できるようです。特にお肉。お聞きしたお話にあったので生肉も先程食べていただきましたが、生肉を摂取した後だと爆発的に増えていますね。あと、左眼が赤くなるのは金木さんの感情や興奮状態に伴って血中のRc細胞が増殖・活性化した影響でしょう。なぜ左眼だけなのかは分かりませんが、視力に影響もないようですし、*“体質”* くらいに捉えてかまわないと思います。それにしてもこのRc細胞は面白い特性を持っていますね。異形型や変形型の個性を持つ方々も特殊な細胞を持っていることが多いですが、この細胞は体外に出た時点で変質しています。カグネ状態、つまり体外に出た時点で硬質化しているんですよ。しかし、硬質化したままではなく軟化と硬化を繰り返しことで自在に動かせる。さらに再生もしやすくなっているわけだ。体内外でここまで変質する細胞は……」

研究員が緑谷のようにブツブツと自分の世界へと旅立っているのを、金木は困り顔で見つめつつ、先を促す。

「おっと、失礼。まあつまり、金木さんの個性の本質は身体活性ではなく、自身の細胞の

活性化と操作、ということになります。ああ、ですが、身体能力はRc細胞とは関係なく向上されていたので、身体活性と細胞操作、というところでしょうか。」

(なるほど…。父さんの個性と母さんの個性、それぞれを受け継いでいたんだ。)

研究員からの結果を聞いた金木は、個人的にRc細胞を研究したい、という研究員に苦笑しつつも協力を申し出た。

「僕の個性のことですし、成長に繋がるならいくらでも協力します。というか、こちらこそよろしくお願いします。」

「おおーありがとう!!…：…んんっ、では、詳しい検査結果は追ってお送りいたしますので、その書類とともに個性届を役所に提出してくださいね。」

金木の言葉に目を輝かせた研究員は、少し照れ臭そうに咳払いをした後、そう言っ「お疲れ様でした」と金木を送り出した。

本当に長い一日が終わった。

自分の個性のさらなる可能性が見えた。

きつと使いこなしてみせる。

グツと拳を握りながら決意を固めて見上げた夜空には、満点の星が輝いていた。

時は遡って、数日前。

雄英襲撃に失敗した死柄木は、黒霧の個性ワープによってアジトに帰還していた。

自身には傷ひとつないが、襲撃の結果は失敗だ。

八つ当たりでカウンターチェアを蹴飛ばしながら悪態をつく。

「くそ……失敗だ……。子どもがあんなに強いなんて聞いてない……。それに最後のあいっ
……」

最後の最後に駆けつけてきたオールマイイト平和の象徴。

倒したのは雑魚だけとはいえ、その圧倒的な覇気……威圧感……全く衰えなど感じさせない
い圧。

身の毛がよだつような、その濃密なプレッシャーを思い出して、死柄木は一筋の汗を
流した。

「……話が違うぞ先生。」

「違わないよ。」

いつの間に繋がっていたのか、モニターから返答が返る。

「脳無は？回収してないのかい？」

「ヒーローの増援が想定の何倍も早かった。回収の時間は取れませんでした。」

モニターから別の声色が聞こえ、それには黒霧が応える。

「せっかくオールマイト並みのパワーにしたのに……」

「パワー……そうだ……オールマイト並みの速さを持つ子どもが2人いた。」

「……………へえ。」

「気味の悪い触手生やしたあのガキつ……………！カネキとか呼ばれてた……………あいつさえいなければ……………っ……………あいつ……………脳無に殺すつて言った。……くそつ……………なんであんなやつがヒーローなんて目指してる……………」

「へえ……………そんな子がいるんだね。」

「……………」

「……まあ今は悔やんでも仕方ない！死柄木弔！次こそ君という恐怖を世に知らしめろ

！」

（触手の個性……………ねえ。）

モニターに映る死柄木の荒れつぷりを眺めながら、がらぎ きゆうだい殻木球大は口の端を不気味に歪

めた。

雄英体育祭編

開会

2週間後。

ついに雄英体育祭当日を迎えた。

この2週間、金木は学校生活に加え、新たな個性の調整や、それに伴ったコスチュームの改良など、忙しい毎日をご過ごしてきた。

そのおかげで赫子の操作にも少し慣れてきた。

そしてコスチュームも、まだ素案の段階だが完成すれば、高機能作業着と称された今ものよりは数段良くなるはずだ。

だが、体育祭開催当日に至って、金木の頭にある考えがよぎっていた。

(赫子は危なすぎで対人戦では使いづらいし、体育祭はコスチューム着用不可……)
(……もしかして僕は、時間の使い方間違えたのでは?)

体育祭開催直前の控室、そんな考えで一人悶々とする金木に、尾白から声がかかる。

「金木、個性が変わったんだって?」

「ああ……うん。赫子っていうんだけど、尾白くんの尻尾に似た触手みたいなのを出せる

ようになったよ。」

「また強くなんの!? んで、何ていう個性になったの?」

「……個性名は……うん。まあ。あの……」

話を横で聞いていた芦戸からの問いに、金木は歯切れ悪く言い淀む。

つい先日、国立個性診断センターから詳しい検査結果が届いていた。

それらの書類とともに役所に行き、個性届の変更は無事受理された。

だから当然個性のネーミングは「身体活性」から変更されている。

だが、金木はその名前が気に入っていない。

視線を外して言葉を濁す金木に首を傾げていた芦戸の横で、空気を読まずに轟が「お

前には勝つぞ」と、緑谷に宣戦を布告した。

個性の話がうやむやになったことを喜びつつ、金木も芦戸や尾白と同じように轟の方

を見る。

「轟くんが何を思っ僕に勝つて言ってるのかは分かんないけど……でも!! みんな本気

でトップを狙ってるんだ。僕だって遅れを取るわけにはいかない。」

「僕も本気で獲りに行く!」

いつもとは違う、強さを感じさせる瞳で緑谷はそう言った。

その言葉に金木も己を奮い立たせる。

『雄英体育祭!!ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!』

『どうせてめーらアレだろ、こいつらだろ!!?』

『ヴィランの襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!』

『ヒーロー科!!一年!!!A組だろおお?』

プレゼント・マイクの煽りによって観客のボルテージは最高潮に上がっていく。

金木たちは少し心を浮かせながら、続々と入場していく。

定位置についた金木は深呼吸をひとつ。

観客の声が聞こえる。

それも次第に聞こえなくなっていく。

自分の大きかった鼓動も、静かに落ち着いていく。

壇上には1年生の部の主審である18禁ヒーロー「ミッドナイト」が立つ。

ピシャン!と手に持った鞭で空気を打ちながら、ミッドナイトが口を開いた。

「選手宣誓!!」

まだ騒つく生徒たちをよそに、金木は自分の胸に手を当てる。

自分も、全力でトップを獲りに行く。

そう決意を固めて目を閉じる。

「選手代表……！——B渡我^{とが}被^ひ身子^{みこ}!!!」

ミッドナイトのその言葉が聞こえた瞬間、金木は目を見開き、先程までの静かな闘志をすっかり忘れて盛大に混乱した。

(トガさん!?)

B組の面々も驚いているようで、その視線を渡我に向けている。

A組のクラスメイトは金木の知人と知っているようで、渡我と金木を交互に見比べる。

みんなの視線を集めている張本人は、ニコニコといつもの笑顔で壇上へと歩いていく。

そして、その途中で金木の姿を見つけるとヘラヘラ笑って手を振っている。

未だ混乱から回復できていない金木がぎこちなく手を振って応えようと、渡我は全開の笑顔になって小走りで壇上へと上がった。

「宣誓！」

「私とケンくんがワンツーファイニッシュします!!!」

ええ…。

どういふことなのトガさん。

金木の心中は、もはや何が何やら分からない。

雄英体育祭の1年生の部では、例年入試トップの成績の者が選手宣誓を行うことになつている。

そして一般入試において、渡我は爆豪を抜いてトップの成績をおさめているのである。

そんなことは露知らず、突如選手代表に渡我が選ばれ、その彼女が突如自分の名前も使つて宣誓ではなく宣戦布告をしたのだから金木の心中は察するに余りある。

そんな金木とは対照的に、渡我は壇上から満足げに腰に手を当てて最高の笑顔を会場に向ける。

会場の反応は様々だった。

「宣戦布告かよ!」

「負けねえぞ!!」

「かわいい!!」

「いや、ケンくんって誰?」

(はっ…!あまりの衝撃に一瞬現実逃避してた…!)

金木は頭を振るって努めて冷静に思考する。

ケンくんという名前だけでは、A組以外の面々には自分だと分からないはずだ。

渡我がかわいらしい女子だからこそ、この程度のヘイトで済んでいるのだ。

これで男子が同じことを言っていたなら、全ヘイトを集めることになっていただろう。

「ケンくんっ！頑張りましょうねエ!!」

いつの間にか、金木の隣には渡我がいた。

そして先程の宣誓（宣戦布告）と同じポリウムで自分の腕を取りながらそう叫ぶ。

1年生の全ヘイトが自分に集まるのを、感じた。

心なしかクラスメイトからも、ヘイトと呼ぶには禍々しすぎる殺気を2つほど感じる。

「金木いいい!!俺たち非リア充を全員敵に回したこと後悔するなよ!!!」

「もやし野郎に団子女!!ブツ殺す!!」

血涙を流して金木を見つめる峰田と、先日のヴィランがかわいく見えるほどに殺気を充満させた爆豪だった。

金木はその二人に魂の抜けた顔で微笑みを返して、腹を括る。

トツプを狙うのだから同じことだ、と。

全ヘイトが自分に向こうが、渡我との関係を勘違いされようが。関係ない。

やるしかない。

金木は死んだ魚のような目で応える。

「…よし。うん……渡我さん、頑張ろうね。」

金木の言葉に、会場からは一齐にブーイングが起ころ。

そんな大音量のノイズが耳に入らないのか、渡我は喜色満面の様子で「はいっ！」と返してピョンピョンと飛び跳ねている。

本当にこの人だけは自分の想像を軽く超えてくる、そう思つて金木も笑つた。

「青春ねえ！けど、雄英体育祭はそんなに甘くはないわよ！」

「さて、それじゃあさつそく第一種目いきましよう!!」

「いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が涙を飲むわ！今年の第一種目は……」
「障害物競走!!」

計1ークラスでの総当たりレースで、コースはスタジアムの外周約4km。

コースさえ守れば何をしてもOKという、何でもありのレース。

ミッドナイトの説明を頭の中で復唱する。

個性の使用がありなら、自分はおそらく下位になることはないだろう。問題は何位でゴールするか。

スタート位置についた1年生たちは一様に、点灯していくスタートシグナルを見上げる。

「スタートー……ート!!!」

パツと最後のシグナルがついた瞬間、生徒たちは狭いゲートを抜けて駆け出す。

ゲートを抜けた瞬間、轟が個性『半冷半燃』を使って地面を凍らせて走る。

金木は身体強化で跳躍し、その氷を避けて前へ前へと駆ける。

A組のクラスメイトたちは大半が抜け出しているようで、先頭を走る轟へと迫る。

少し走ったところで、不意に辺りが暗くなった。

ふと顔をあげると、そこに現れたのは巨大すぎるロボットだった。

日光を遮断するほどの大きさに、一瞬圧倒されるが、以前渡我に聞いた入試の時の妄想ヴィランのロボットだろう。

『さあ！いきなり障害物だ!!まずは手始め：第一関門、ロボ・インフェルノ!!』

その巨大ロボとは別に、自分たちと同じくらいの大きさのロボも続々と進行方向に出現する。

轟が下から右手をふわりと引き上げる。

距離を詰めた金木が赫子を出現させる。

パ キー—— ツ

ズ ド ツ——

ふたつの音が同時に響く。

巨大ロボ1体が凍りつく。

もう1体が串刺しになって倒れる。

知らず知らずのうちに、二人は互いに目を向ける。

そして、また同時に走り始める。

(轟くんには悪いけど……)

金木は個性を発動させて、さらに速度を上げる。

(このレースでは、僕の方が有利だ!)

走り出した二人の後方で、先程 轟が凍りつかせた巨大ロボが倒れ、後続を妨害する。

だが、二人はその様子を見ることもなく、前へ前へと足を進める。

そして、その後を追うようにA組の面々も、次々と仮想ヴィランのゾーンを抜けて先へ進む。

『第二関門は……ザ・フォール!!!』

プレゼント・マイクのアナウンスが響く。

その名が指す通り、一步踏み外せば転落必至の大袈裟な綱渡り。

孤島のような足場同士を繋ぐのは、細いロープ一本。

だがそれも。

個性が使えるヒーローの卵にとっては、たいした困難にならない。

金木はピタリと足を止め、少し上がった息を落ち着かせる。

瞳を閉じ、個性の操作に集中する。

…数瞬の後、金木は目を開ける。

左眼が真紅に染まったと同時に、赫子を出して駆け出す。

そして底が見えないほどの切り立った崖を跳ぶ。

ジャンプの勢いが止まり、空中で停止する瞬間、目前の足場に向けて赫子突き出す。

そうして、器用に赫子を足場に掛けながら、さらに先へと進んで行く。

そんな様子を見て、プレゼント・マイクと相澤の実況が会場に響く。

『現在トップはA組、金木!!!:…おお!また出たぜ、あれがカグネか!』

『…ああ。』

『…えーつと、なになに?新しい個性名は…「喰種」?…なんでこんな名前なんだ?』

『…なんでも国立個性診断センターの研究員が名付けたらしいが、詳しいことは知らん。』

『おっと、その金木を轟と爆豪が追う!三人とももう第二関門抜けちまうぞーっ!!』

そう、金木の新たな個性は『喰種^{グール}』。
グール。

アラブに伝わる伝承の中の怪物の名前である。

姿を変えて人を誘い、死肉を食らう化け物。

なぜ、こんなネーミングなのか。

金木には1ミリも理解できない。

数日前、送られてきた書類に記載されたその名前を見て金木は愕然とした。

すぐさま連絡先を交換していた研究員の人に電話して聞いたのだした。

曰く、肉を摂取することで活性化するRc細胞が、体外に出た瞬間にその姿を変えることから名付けた、と。

自信満々である。

「いや……。でも、あの……」と抗議を口にしようとするたびに、研究員はRc細胞の素晴らしさを被せて語ってくる。

「別の名前は……」と言いかけた金木に、研究員はとても悲しそうな声で「……気に入らませんでしたか？」と返す。

電話越しながら諦念した金木は、覚悟を決めた。

色のない目をしつつ、電話を切って上を見上げる。

そう、断りきれない自分が悪いのだ。

金木は両手で顔を覆って自分に言い聞かせる。

(僕の個性は……喰種だ。)

禍々しい新たな個性のネーミングをバラされた金木は、実況席を恨めしそうに見ながら第二関門を越えていく。

その遙か後方で緑谷は金木の動きに、ただただ驚愕していた。

(もうあんなに使いこなしてるのか…)

自分自身、新しい個性に慣れるのに四苦八苦している現状なのだ。

ワンフオーオールとは勝手が違うのだから仕方のないことなのだが、どうしても自分と比べてしまう。

金木は轟や爆豪とトップ争いを繰り広げながら遙か先にいる。

緑谷は歯噛みしつつ、ロープにしがみつき、カッコ悪くも今出せる最速で進む。

そんな緑谷が渡るロープが、グラリと揺れた。

危うくロープを離しそうになって慌てる緑谷の頭上を金木が駆けて行った。

(!?あれ?!カネキは先頭にいたはずじゃあ………???)

混乱する緑谷をよそに、クラスメイトたちが続々と第二関門を突破していく。

(今は先に進まなきゃ!!)

緑谷は思考を切り替えて、また先を見据えてロープを渡り始めた。

競走

渡我はレースが始まってからずっと、金木が視界に入るギリギリの距離をとっていた。

身体能力だけを見れば、彼女は他の参加者に比べて決して劣ってはいない。

それどころか単純な身体能力だけでも、もっと前に陣取れているはずである。

だが、それでも後方にいた。

B組は物間が打ち出したクラスの指針として、この予選では実力を抑え、ギリギリ予選が突破できるであろう上位40位くらいまでに入るあたりをキープしようとして動いている。

が、それが理由で渡我が後方にいるのかといえば、それは違う。

そもそも物間の言うことなど聞かないのが渡我被身子という存在である。

ではなぜかといえば、普通科とサポート科の連合チームによって執拗なマークを受け、単純に行けなかったからである。

彼らは燃えている。

この男だけは、絶対に先に行かせないと。

(……二人同じ姿で同着ゴールしたかったんですが。)

(ケンくんに変身したのは間違いでしたかねエ……)

レース開始前、渡我は個性『変身』を使って金木にその姿を変えていたのである。

そして金木は、非リア充の男子たちから壮絶なヘイトを買っている。

金木の姿のまま、ふうとひとつ溜息をつく。

正確に言えば、トップスピードで頑張れば集団から抜け出すこと自体は可能だ。

だが、彼女はレースそっちのけで後方から金木の姿に見惚れていた。

(はあく、頑張ってるケンくんいいですねエ。)

そして、金木が第二関門へと差し掛かり、赫子^{かくね}を出した瞬間。

渡我の興奮は最高潮へと達した。

(カグネっ!! 見ても綺麗です!!)

金木の腰から出た血の色をした触手。

個性飽和社会で異形型の個性を持った人間がざらにいる現代においても、なお禍々し

いと表現するのが適切である赫子。

それを見ても、渡我には美しいという感想しか浮かばなかった。

初めて見せてもらったのは、もう10日ほど前のことだろうか。

そこから訓練相手になるという大義名分のもと、毎日赫子を間近で見てきた。

そして、その度に見惚れてきた。

なのに、このレースの第一関門では他の生徒たちが邪魔で一瞬しか見えなかった。近くで見たい。

その想いが膨らんでいく。

金木の姿のままにハアハアと息を荒げ、頬を紅潮させる渡我。

邪魔をしていた集団は、その顔を見てあまりの気味の悪さにゾツとする。

そして、その姿から少し目を離れた一瞬。

その一瞬で、渡我は集団を抜け出し、金木の元へと走る。

『さあいよいよ先頭集団は最終関門!!』

『最後は……一面地雷原だ!!!』

コース幅が大きく広がり、よく見れば地雷の位置は確認できる。

プレゼント・マイクの実況によれば、威力は大したことがないが音と見た目は派手だ

それで、爆発させてしまえば大きなタイムロスになるのは間違いない。

現在トップを走る金木は、地雷のない地面を選んで進む。

現在の順位は単独トップ。

しかし、後続との差はたいした距離ではない。

ほどなくして、轟と爆豪がデッドヒートしながらも追ってきた。

地雷原に入った轟は、金木と同じように地雷のない場所を選んで進む。

後方から爆発音が聞こえる。

誰かが地雷を踏んだのか、と思つた轟のすぐ横を、赤い爆風が突き抜ける。

「じゃあな、半分野郎!!」

「宣戦布告する相手、間違えてんじゃねえよ!!」

爆速ターボで空中を滑空しながら爆豪が金木を追う。

「!くそっ」

轟は爆豪の腕を掴みながら、自身も金木の背中を追う。

前にはまだ抜くべき相手がいるのに、お互いが邪魔で一手先を打つことができない。

「ちよつと、あいだ失礼しますねエ!!」

そんな二人の肩に手を置いて、ピヨーンと軽やかに跳び箱の要領で飛び越えた存在がいた。

轟と爆豪は、その存在を同時に睨む。

「…!?はあっ!?」

そして、驚きの声をあげたのも同時だった。

二人を飛び越えた存在、その姿が数メートル先を走る後ろ姿と全くの同一人物、つまり金木の姿だったからだ。

(もやし野郎の個性…じゃねえな!…姿を変える個性か?)

(A組のやつじゃねえ。俺らが知らねえってことはB組か?)

(そんなことより……)

(先行かしてたまるか!!)

奇しくも二人の意見はここで一致する。

轟は後続に道を作ること懸念しつつも、地面を凍らせて地雷を無効化する。

爆豪は運動と怒りによってさらに汗腺から噴き出たニトロ口を点火して爆速ターボで

加速する。

そして、今しがた自分たちを抜いた渡我を同時に抜き返す。

「…わっ！速いんですねエー！」

轟は、抜く瞬間にチラリと渡我の姿を見る。

どこからどう見ても金木にしか見えないが、苦しそうに呼吸を荒げている姿を視界に捉えた。

自分たちを抜くために無理な加速をしてきたのだろう。

ここからまた抜き返されることはない。

(問題は……)

(本物をどう抜くかだ…!!!)

依然、先頭を走る金木は、チラリと後ろの様子を見る。

自分はスピードを緩めていないにもかかわらず、爆豪と轟がすぐそこまで迫っている。

ならば、と赫子で自分の後方の地面を薙ぎ払う。

大きな爆発音が鳴り響き、爆風にのって砂塵が舞い上がった。

これで少しは時間が稼げるだろう。

そんな金木の甘い考えは、一瞬で打ち払われた。

砂塵も爆発もなかったかのように、二人がさらに距離を詰めてきているのだ。

「くっ…。」

ここで抜かれるわけにはいかない。

後方では爆発音が連続している。

みんな追いついてきているのだ。

(すみません、相澤先生！もう一回無茶します！)

心の中で相澤に謝罪した後、金木は限界突破オーバーフローを発動させる。

全身の筋繊維が悲鳴をあげる。

3km強の全力マラソンの後にこれは想像以上にきつい。

それでも、負けるわけにはいかない。

金木は地面に足跡がくつきりと残るほどに力を込めて加速する。

もう横に並ぶくらいまで追い上げていた轟と爆豪を置き去りにして、金木は再度単独

トップに躍り出る。

そして、そのままの勢いで駆ける。

突如、金木の後方から一際大きな爆発音が聞こえた。

爆豪だろうか？

ここにきて大技とは恐れ入る。

そんな予想をしながら、金木は後方を振り返ろうとした。

その金木の頭上を、爆風に乗った瓦礫が飛び越えていく。

そして、その瓦礫から飛び出た緑谷が前を走り出す。

呆氣に取られた金木は、限界突破オーバーフローを無意識に解いてしまっていた。

『序盤の展開から誰が予想できた!?!』

『波乱に次ぐ波乱の第一種目!!!』

『今、一番にスタジアムへ還ってきたのは……』

『1年A組!!!緑谷出久!!!』

『そして僅差で金木!!轟!爆豪がゴール!!!』

『そして5位はーっ!?!……ん?また金木?』

『…B組の渡我被身子だろ。』

負けた。

荒れた呼吸を整えながら、金木は緑谷のもとへと歩いていく。

限界突破オーバーブレイクの使い所をもっと考えていけば…

最後に驚いて発動を解いていなければ…

後悔は募るが、最後の最後に抜かれたのは結局自分の実力不足に他ならない。

「デク…すごかったね。やられたよ。」

「!!…いやいやカネキもすごかったよ！僕は運が良かっただけで…」

軽く握手を交わす二人を、轟と爆豪は悔しそうに睨む。

そして、そんな二人の背後から金木が現れて、金木に飛びついた。

「ワンツーフイニツシュできませんでしたア!!」

「ええ!?!…トガさん?」

飛び込んできた金木を受け止めながら、金木は困惑する。

渡我の姿が見えないと思っていたら、まさか自分の姿で走っていたとは…。

苦笑しつつ渡我の健闘を讃えようとした金木の胸の中で、金木はドロドロと溶けてい

く。

……デジャブを感じた。

「うわっ！トガさん、まだ解いちやダメだよっ!!!」

個性『変身』を解いた素っ裸の渡我に、大慌てでジャージを脱いで被せる。

幸い観客の視線はゴールに注がれており、観客に見られることなく渡我の裸体をジャージが覆う。

…隣で顔を真っ赤に染めながら両腕を頭に巻き付けている緑谷以外には見られていないだろう。

「おお、ケンくんの香りがしますね。」

金木は少し笑いながら空を見上げて溜息をひとつついた。

「ようやく終了ね！それじゃあ結果をご覧なさい！」

1位 緑谷出久

2位 金木研

3位 轟焦凍

4位 爆豪勝己

5位 渡我被身子

.....

41位 取陰切奈

42位 発目明

ビジョンに映し出された順位を改めて見る。

A組では青山くん以外は予選突破できたらしい。

「予選通過は上位42名!!!」

「次からが本戦よ!!キバリなさい!!」

「第二種目は~~~~~.....」

「騎馬戦!!!」

ミッドナイトがビジョンに表示された文字を読みながら、大袈裟なポーズをとる。

「騎馬戦……?」

「個人競技じゃないけど、どうやるのかしら？」

「参加者は2〜4人のチームを自由に組んで騎馬を作ってもらおうわ！」

「基本は普通と同じ、1つだけ違うのが先程のレースの結果にしたがって各自にポイントが振り当てられること！与えられるポイントは下から5ずつ。42位が5ポイント、41位が10ポイント、といった具合ね。そして、1位に与えられるポイントは……
1000万!!!」

1000万。

100000000。

いっせんまん。

その数字が発表された瞬間、参加者の視線は一人に注がれる。

金木ですらもニコニコしながら緑谷を見る。

ポイントを奪い合うということは。

現在ポイントが高い者が狙われるわけで。

そう、つまりこれは……

「下克上サバイバルの騎馬戦よ!!!」

背信

先程の障害物レースの順位に応じて割り振られた手持ちのポイント。

第二種目の騎馬戦は、そのポイントの争奪戦となる。

騎馬戦の制限時間は15分。

各自が持ったポイントの合計が騎馬のポイントとなり、そのポイント数が表示されたハチマキを騎手が装着して、それを奪い合う。

組む相手によって騎馬自体の持ちポイントが変わるため、上位の者が組めば必然的に高ポイントとなるが、その分狙われやすくなる。

争奪戦である以上、ポイントは奪えばいいのだから、自分たちの初期ポイントが低くても、相手からポイントを奪いやすい組み合わせを組めばいい。

自分の個性と、先程まで蹴落とすべきライバルだった同級生たちの個性、それらを組み合わせてひとつの騎馬を作る。

簡単なようで、とてつもなく難しいことだ。

勝ち上がった42名は、A組とB組のヒーロー科に普通科1名、サポート科1名という内訳だが、そもそも同じヒーロー科であるA組とB組ですら、全くと言っていいほど

交流がない。

そして、チームを組んで次に進めば、チームメイトはまたライバルになるのだから、対戦相手として自分が苦手な個性を持つ者はできるだけここで沈んでほしい、そんな思惑も生まれるのである。

それらの問題を理解した上で、自分は誰と組むべきか…。

- ・ハチマキは首から上に巻くこと。
 - ・制限時間内ならばアウトにはならないこと。
 - ・悪質な崩し目的での攻撃は一発退場になること。
 - ・騎手は地面についてはならないこと。
- など、細かいルールがミッドナイトから伝えられた後、15分間の交渉タイムが始まった。

(15分……短いな。)

(まずは……)

「ケンくんっ!!組みましよう!!」

誰と組むのがいいのか思索していた金木の腕に、渡我が抱きついてくる。

渡我とは何度も共にトレーニングをしてきただけに、連携はしやすい。だから金木は元々渡我とは組むつもりでいた。

「うん、組もうか。」と微笑み、渡我が嬉しそうに飛び跳ねる。

そんな二人をA組の面々が囲う。

「金木、ウチと組もう！」

「カネキちゃん、組みましょ。」

「尻尾同士で連携しやすいと思うんだけど、どうかな？」

「金木くん、私も組みたい！」

耳郎さん…

梅雨ちゃん…

尾白くん…

…う…あ、葉隠さん…！

正直、この4人ならば誰と組んでも様々な戦法を考えられる。最も良い組み合わせはどれか…。

そんな金木の一瞬の思考をまるで無視して、渡我が告げた。

「ダメです。ケンくんに近寄らないでください。」

(…………えええ。)

金木の中学時代の同級生だとは聞いているが、それ以外に情報がない少女に4人は気圧される。

「いや、あの……」と、尾白が口を開いたが、なおも目を細めて「や！ダメです」と連呼する渡我に、4人は困惑してしまう。

だが、一番困惑しているのは金木なのだ。

そして、そうこうしている間にも、時間は経つ。

制限時間のことを考えた4人は、金木が何か言う前に残念そうに他の相手をスカウトに行つてしまった。

「あ……………」

金木が突き出した右手を、風が撫でる。

もうあたたかい気候だというのに、肌寒さを感じた。

自分の周りではクラスメイトたちが続々とチームを結成している。

「渡我さん……僕たちも組む人を探さないと！」

「ええー、2人じゃダメなんですかア？」

「うん、やっぱり4人で騎馬を作った方がいいと思う。」

「じゃあ私のクラスの人誘いますか？呼んできます！」

言うが早いか、渡我はピューとどこかへ走り去ってしまう。

「あ……………」

またも金木が突き出した右手を、風が撫でる。

遅い。

渡我が走り去ってからもう数分経っている。

参加者は、まばらではあるがそこまで離れているわけではないのに、どこに行ったのか。

キヨロキヨロと辺りを見渡す金木に、後ろから声がかかった。

「カネキ、だつたよな？」

「……………ええと。はい、金木です。」

「俺、B組の骨抜。…組まない？」

歯が剥き出しになった、強面の青年が頭を掻きながらそう言った。

骨抜、と名乗ったその青年には、どこか見覚えがあるような…。

金木が返事もせぬまま、そんな思考に陥っていると、骨抜は言葉が続けた。

「俺も推薦組だね。推薦の試験の時とさっきのレース、2回とも完敗だ。みんなクラスで固まってるみたいだけど、別クラスで組んでもいいんじゃないかね？」

なんて柔軟な思考…!!

あつ、そうか、推薦の試験の時に組み分けは違ったけど地面を沼みたいにしてた人……!!

「ごめん、思い出した。……こちらこそ、よろしく!!」

金木が突き出した右手は、今度は骨抜によつて強く握られ、クラスの枠を超えたチームがここに誕生した。

「カネキの個性は喰種^{グール}、だっけ？名前は置いといて、単純な肉体強化と触手の操作つてこどでいいのか？」

「うん、僕の個性はその認識で間違い無いよ。」

「俺の個性は『柔化』。触れたものを柔らかくできるけど、生物には使えない。」

「…なるほど。……あつ！あと、ここにはいないんだけどトガさんが……。」

そう言いかけた金木の隣に、ザツと一人の男が立つ。

「A組のカネキ、だっけか？悪いけどそのトガさんは俺のチームに入るってさ。」

「……？」

声のした方を振り返ると、心操しんそう人使ひとしがにっこりと笑って立っていた。

そして、その後ろにはブーツとした表情で渡我が立っている。

「トガさん？」

金木の呼びかけにも応えず、渡我は心操の後について去っていく。

あまりにいつもと違う渡我の様子に、金木は困惑を隠せず、その後も何度か声を掛けるが返答はない。

(シカト……。僕、なんかしたかな……。)

姿が見えなくなった頃、頭を抱えて「ええ……。」と呟く金木の肩に、骨抜がポンっと手を置く。

「あー、なんつうか。…御愁傷様？傷心のところ悪いけど、そろそろ時間もねー。組む相手探そうぜ？」

優しさが沁みる。

渡我の翻意には少し、いや、だいぶ驚いたが、時間がないのも事実。

渡我が抜けたことで、現在、金木のチームは骨抜との2人だけ。

骨抜とのタッグをより強化するためのチームメイトを見つけなければならぬ。

だが、パツと見渡した限り、A組はほぼチームが出来上がっている。

「ごめん、ありがとう骨抜くん。……B組の中で防御力と遠距離攻撃に長けた個性の人、

いるかな？」

冷静さを取り戻した金木は、骨抜と共にB組の生徒へのスカウトを開始する。

ヘイトを買っている現状、そして違うクラスの自分と組んでくれるのか。

そんな金木の不安を吹き飛ばすように、スカウトはすんなりと成功した。

B組の骨抜と一緒に声を掛けたことも理由の一つだが、そもそもB組は物間を除いて金木を敵対視していない。

選手宣誓でヘイトを買ったという認識が間違っているのだ。

なぜなら、B組の生徒は渡我とが被身ひみこ子が突き抜けた自由奔放な存在だと知っているからである。

……真面目に授業を受けていたかと思えば、次の瞬間には窓の外の雲を見てニヤニヤ。

……個性を使った戦闘訓練のはずなのに、体術のみで相手を圧倒。

……理由を聞くと「ケンくん以外の血は飲みたくありません！」と宣のたまう。

……では不良かと思えば、B組担任のブラドキングの言うことには素直に従う。

……などなど、渡我の奇行は枚挙に遑いとまがないのである。

では、渡我はB組で浮いているのかと言えばそうでもなく、クラス委員長である拳藤一佳けんとういつかをはじめとした女子グループには受け入れられており、わりと楽しく毎日を過

ごしている。

まあそんなわけで、金木に対する先入観などはなく、骨抜とともに新たにB組の生徒2人をスカウトすることに成功した。

「……よし、急造チームだけど、僕らの個性ならたぶん誰も抜けない。……勝とう！」

『さあ起きろイレイザー！15分のチーム決めタイムを経てフィールドに12組の騎馬が並び立った!!』

『さあ上げてけ鬨の声!!血で血を洗う雄英の合戦が今!!狼煙を上げる!!』
フィールドにプレゼント・マイクの声が響く。

そして、12組の騎馬が出揃った。

それぞれの騎手が、総ポイント数が書かれたハチマキを額に巻く。

「緑谷チーム」(100000300ポイント)

緑谷1000000000・麗日125・発目5・常闇170

「爆豪チーム」(630ポイント)

爆豪195・切島160・瀬呂165・芦戸110

「金木チーム」(625ポイント)

金木205・塩崎185・骨抜180・黒色55

「轟チーム」(580ポイント)

轟200・上鳴85・八百万120・飯田175

「心操チーム」(450ポイント)

心操70・尾白150・庄田40・渡我190

「峰田チーム」(390ポイント)

障子135・峰田115・蛙吹140

「葉隠チーム」(350ポイント)

耳郎100・口田105・砂糖130・葉隠15

「鉄哲チーム」(330ポイント)

鉄哲155・泡瀬145・鎌切30

「物間チーム」(230ポイント)

物間25・円場90・回原95・角取20

「拳藤チーム」(185ポイント)

拳藤65・小森35・取陰10・柳75

「小大チーム」(130ポイント)

小大50・凡戸80

「鱗^{りん}チーム」(105ポイント)

鱗45・穴田60

『3…2…1…』

『スタート!!!』

後に、この試合を切っ掛けに金木はとある異名で呼ばれることとなる。

そんな金木の運命を決める第二種目の騎馬戦が今、始まった。

入城

「防御力と遠距離攻撃……か、なら塩崎だろうな。」

金木の言った「B組の中で防御力と遠距離攻撃に長けた個性の人」というお題に対しての骨抜の回答は明快だった。

悩むそぶりひとつなく、少し離れた位置にいた塩崎を指して「あの子」と言うと、ズンズンと歩を進める。

「塩崎。俺はA組のカネキと組むことにしたんだけど、塩崎もどう？」

「カネキさん……渡我さんがいつも言っていた方ですね。クラス対抗ではありませんが、別クラスの方と組むのは背信になるのでは……？」

「背信……。」

初めましての挨拶もなく、金木は骨抜と塩崎の会話を後ろで聞いている。

どうしようかと出方を窺っていると、骨抜が「背信といえば……」と言って急に振り向き、金木の腕をとって塩崎の前に押し出して言った。

「カネキがさ、渡我さんとチーム組んでたらしいんだけど、土壇場でチーム抜けられて

困ってんだよ。救いの手、差し伸べるべきじゃね？」

「…!!なんてこと…裏切られたのですかっ!」

「いや、裏切りっていうか…。あ、いやでも、たしかに困ってるのは本当です。僕からも改めて…チームに入ってください。よろしくお願いします。」

「…ユダの背信に遭いながら、なんて気丈につ…!!分かりました、私もお力添えします!」

なんだか大袈裟なことになってしまった。

そしてトガさんが裏切り者みたいになってしまった。

塩崎にお礼を言いながらも、少し困った顔を骨抜に向ける。

骨抜はそんな金木を見て、ニツと口角を上げると続け様に3人目に声を掛ける。

「黒色…カネキの個性に興味あるって言ってたろ? 組もうぜ!」

その問いに、金木の後ろから返答が返る。

「ヒヒ…業の深い個性名だよな。」

声に振り返ると、いつの間にそこにいたのか、肌が真っ黒の青年がいた。

「こいつは黒色支配。たぶんカネキが作りたいチームにするには、こいつがキーマンになる。」

「…世界の鍵を握る者。」

黒色の発言に、少しソワツとしつつ金木からもチーム入りを打診する。

「黒の反逆、か…。」

OKなのかどうか分かりにくい返答に苦笑しつつも、金木たちは各々の個性の把握と作戦の立案にかかると。

骨抜の柔化。

塩崎のツル。

黒色のブラツク。

それぞれの個性を聞き、金木は骨抜の判断能力に舌を巻いた。

こちらの簡単な情報だけで意図を汲み、最適の個性を持つメンバーを揃える適応力。

別クラスだろうとチームアップできる柔軟な思考。

作戦の立案についても、金木の案を骨抜がブラツシユアップしていく。

プロになったらぜひチームを組んでほしい逸材だ。

「15分経ったわ。それじゃあいよいよ始めるわよ。」

ミッドナイトが静かにそう言って、作戦タイムは終わった。

ややあって、12の騎馬がグラウンドに並び、プレゼント・マイクの実況が始まりを告げる。

『3…2…1…』

『スタート!!!』

その開始の号令と共に、一斉に狙われるのは、やはり緑谷の騎馬だった。

緑谷は麗日・常闇・兎目とチームを組んでいるようで、兎目のサポートアイテムと麗日の個性、そして常闇のダークシャドウの機動力で他の騎馬の攻撃を躲す。

「まア、予想通りってとこだな。」

「うん。まあ1000万だからね。」

「ヒヒ…同じクラスなんだから油断させて奪っちまえばいいんじゃないやねえの？」
はかりごと
「謀など言語道断です。」

「まあ同じクラスだからって手は抜かないけど、それはきつと皆も同じだ。たぶん油断してくれないよ。ひとまず今は、作戦通り様子見でいいと思う。」

「この騎馬戦では金木さんがリーダーですから従います。」

「え…僕がリーダーなんですか!?!」

「そりゃカネキっしょ。持ちポイントも一番高いし、騎手だし。」

「……ヒヒ。嫌なら俺が代わってやろうか？」

「黒色さんがリーダーなら私はチームから抜けます。」

「……………」

「まあまあ。てことでリーダーはカネキ！」

グラウンド中央で各チームの騎馬が混戦になっている頃、金木たちは隅の方で雑談に興じていた。

もちろん、ポイントの動き、騎馬の動きに警戒はしている。

だが、自分たちが動くのは今じゃない。

開始から数分経った頃、ようやく自分たちの周囲に騎馬が集まっていた。

金木たちの騎馬が持つポイントは625、割り振られたポイントとしては3番目に高いのだから、狙われるのも無理はない。

だが、誰一人として金木に触れられないでいた。

『おいおい…マジかよ。』

プレゼント・マイクが、実況を忘れてポツリと零した。

その視線の先にあるのは、3組の騎馬の猛攻を止める金木の騎馬だった。

葉隠チームが、小大チームが、拳藤チームが、

騎馬の足は骨抜の柔化で地面に沈められ、

遠距離からの攻撃は金木の赫子と塩崎のツルに防がれ、

赫子とツルの影から黒色が現れてハチマキを奪う。

30秒に満たない、攻防と呼ぶにはあまりに短い時間で金木チームはハチマキを奪取した。

『おおー!!大乱戦だ!どこ見りゃいいんだコレ!!』

『爆豪と物間が激突ーっ!!』

『あと、緑谷と轟んところが熱い!!かと思えば、金木んところは何だコリヤ!?!』

『一步も動かずに葉隠・拳藤・小大チームを完封ーっ!』

『なんだよ、金木!!王様かよ!!』

「あの子、やべーな。」

観客のプロヒーローたちの視線も、金木の騎馬に注がれていた。

「ああ、地面を軟化してる子か？」

「そつちもすげーが、騎手の子だよ。」

「?…たまに触手出してるくらいで何もしてなくね？」

「バカか。攻撃も防御も、全部指示出してんのあの子だぞ。見切りが早えつつうか、読みが鋭いつつうか…。他の子で対処が難しい時だけ自分の触手で迎撃してる。」

「いやいや、お前。まだ高ーだぞ?そんなことあるわけねーだろ。」

「まあ個性の組み合わせがいいのも事実だけだな。あいつらの足元見てみ?開始からもう10分近く経ってっけどまだ一歩も動いてねーぞ。完璧な作戦がなきや無理だぜ。」

「ブレーン、つてやつか。」

「そ、俺らみたいなのパワー系のヒーローを上手いこと動かしてくれる存在、つてわけだ。こりやサイドキック候補じゃね?」

「えー、でもマイクも言っつけど王様みてーで偉そうじゃね?」

プレゼント・マイクの実況を聞き流しながら、金木は「ふう」と一息つく。

3つのチームを下したが、この騎馬戦は制限時間内ならば復帰が可能である。

だが、塩崎のツルに捕らえられた騎馬は、骨抜の柔化からなかなか抜け出せない。

ひとまずは作戦成功といったところだろう。

金木チームのポイントは現在1290ポイント。

この作戦の主軸となるのは、骨抜と塩崎による防御。

ではなく、黒色にある。

黒い物体の中を移動できるという個性。

それが、塩崎のツルと金木の赫子と組み合わせることで反則級の攻撃に変わる。

縦横無尽に伸びるツルと、自在に動かさせてスピードも速い赫子。

その影に潜んで黒色がハチマキを奪う。

鉄壁の防御から一転、不可避の速攻。

ただ一つ、弱点があるとすれば。

「まずい！カネキ、爆豪来てんぞ!!」

そう、爆豪と轟、上鳴の存在である。

轟の炎と爆豪の爆破、そして上鳴の放電による閃光。

それによって影が制限されること。

さらに炎と爆破は、塩崎のツルとも相性が悪い。つまり、その2チームは天敵と言える。

物間のチームを破った爆豪チームが迫る。

騎手の爆豪は殺意を隠そうともせず、金木だけを見ている。

だが、金木は知っている。

爆豪はこう見えて冷静だと。

骨抜が地面を柔化させる。

騎馬の切島、瀬呂、芦戸の踏み込んだ足が着地した瞬間を狙って発動しているあたりに、やはり彼の非凡なセンスが光る。

「うおっ!!」

「足が……!」

「ちよ……金木ーいーズルいぞー!」

一様にバランスを崩す3人。

そう、金木らの視界にいるのは3人。

爆豪は、爆風に乗ってその視界の上を飛ぶ。

「おい!!ポインント寄越せや!!」

咄嗟に伸ばした塩崎のツルを爆破し、空中で小規模な爆破によって方向転換。

そして、またも爆風に乗って加速し、金木の右から爆豪が迫る。

「その方向転換は、前に見たっ……よー」

その爆豪に向けて赫子を伸ばす。

だが、頬を掠めていく赫子に怯みもせず、爆豪は金木の額に向けて手を伸ばす。

「っキヤスリングー」

その手が届く寸前、金木の言葉で、騎馬の3人が一斉に動く。

骨抜が壁を柔化させ、騎馬の3人は壁に向かって飛ぶ。

そして壁に足を沈めて、地面と平行に壁に立つて爆豪を躲す。

塩崎は金木を包むようにツルを展開し、ツルの繭で金木を守る。

同時に、金木は伸ばしていた赫子を操作し、爆豪を弾き飛ばす。

「っぐークソがアア!!」

弾かれた爆豪を、瀬呂が慌ててテープで引き戻す。

間髪を入れず、金木が赫子でテープを切断する。

「黒色くん!!」

その声が聞こえたとき、爆豪の視界は黒に染まっていた。

「ヒヒ……チエックメイトだ。」

黒色が爆豪の額にあつたハチマキに手を伸ばす。

目を見開いた爆豪は悪態を吐きつつ、爆破で手を払いのける。

「つくつそが!!!」

(……いつ……疾い)

そして、瀬呂のテープが再び爆豪を捉え、引き戻す。

その隙に黒色は金木たちの元へと帰還する。

「おい、爆豪!ハチマキは!」

瀬呂の声に爆豪は舌打ちだけで返す。

(猿真似野郎の方のポイント獲られた……っ!!)

「あの黒い奴どつから来たんだ?!」

「……壁の影から触手の影渡つて来やがった。」

「やべえぞ、もう時間ねえ!!!」

「っ進め切島!あいつらブツ殺すッ!」

「1本しか取れなかった。」

黒色が獲ってきたハチマキは230ポイントと表示されている。

つまり、物間が巻いていたハチマキ。

だが、まあこれでポイントは1500を超えた。

これで下位はありえない。

安全圏にいる。

だからこそ、ここからが勝負どころだ。

ポイントを奪われた爆豪たちが、すでにこちらへと向かっている。

先程までの手はおそらくもう通じないだろう。

しかし、一度瀬呂のテープを切断したことで、不用意に飛び跳ねることもできないはずだ。

『終盤でドンドン順位変わってんぞー!!いよいよ残り時間は1分!!』

爆豪の爆破によって飛んでくる礫つぶてを、塩崎がツルで捌く。

芦戸の溶解液を、瀬呂のテープを、金木が赫子で一蹴する。

隙を見て影を移動した黒色を、爆豪が爆破で影を散らして防ぐ。

塩崎のツルによる攻撃を、切島が硬化した腕で切り裂く。

その切島の足元を骨抜が柔化させ、移動を封じる。

一進一退の攻防の中で、赫子に乗って爆豪が特攻を仕掛ける。

伸ばされた腕を金木が掴む。

そして…

『タイムアップ!!!』

『1位、轟チーム!! 2位、金木チーム!! 3位緑谷チーム!!』

『4位、ばく…オイ! 心操チーム!!?』

『爆豪チームまさかのここで敗退ーっ!!』

実況の声を聞きながら、爆豪は金木の顔を睨んだまま血が出るほどに歯噛みする。

ギリツという音が聞こえるほどの怒りに満ちた表情に、金木チームと爆豪チームは時間が止まったように誰も声を発さないまま固まっている。

「チッ!!」

爆豪は顔を伏せたまま、金木の手を振り払い、その場を去って行った。

「…おお、こええ。ともあれ勝利だ。ありがとな、カネキ。」

「あ…うん。いや、こちらこそありがとう。骨抜くんがいなかったら勝てないどころかチームも組めてなかった。」

「柔造でいいぜ。」

「ジューゾーくん…。」

(……なんだ?……なんか、これ。デジャブ?)

「まあでも、次からはまた敵だ。負けねーぞ!」

「ヒヒ…俺たちは戦い合う運命…。」

「ああ、今日の友は明日の敵になるのですね。」

「…明日は体育祭終わってっから友達でいいんじゃないね?」

閃戻

騎馬戦を終えた選手たちは先程終えた各々の戦いを振り返っていた。

金木も例に漏れず、骨抜らと反省会を行なっている。

そこに

「ケンくーんっ!!!」

渡我がやってきた。

先程までとは打って変わって、いつもの渡我の様子そのもの。

金木の姿を見つけた渡我は、興奮気味に金木の元へやってくる、隣でびよんびよんと跳ねながら慌てた様子で叫ぶ。

「私！なんで違うチームで戦ってたんでしょ!!?限くまの人と喋った後のことあんまり覚えてません！」

なるほど。

精神に干渉する個性だったのだろうか。

チーム決めの時に会った心操の顔を思い出す。

「せっかくケンくんと一緒に戦えそうだったのに……」

まずい。

これはまずい。

トガさんの顔からトレードマークの笑顔が消えている。

「あ……えーと。うん、組めなくて残念だったけどトガさんも勝ち残って良か……」

「私とケンくんの邪魔したあの人……どうしてやりましょう……」

まずい。

もはや僕の言葉も届いてない。

ジューゾーくんも空気を読んだのか、必死にトガさんに話しかけているけど、それも

完全に無視してトガさんが黒いオーラに包まれている。

「えっと……ほら……お昼っ！一緒に食べようか!!」

「食べます。」

金木の言葉に渡我は即答する。

未だに笑顔はないが、これで午後の部再開までに少しは落ち着いてくれるだろう。

そんなことを考えつつ、金木は内心でホッと胸を撫で下ろす。

が、その通りにはならなかった。

「悪いが、金木。お前には少し話がある。」

タイミングが最悪の状況で金木に声をかけてきたのは相澤だった。渡我からの禍々しい視線も、金木の焦燥感と冷や汗も、彼には暖簾に腕押し。金木は相澤に連れられて、いつかと同じ応接室へと連行された。

「…ケンくん。」

同じ姿でワンツーフイニッシュを目指した障害物競走は、自分の力不足で叶わなかった。

同じチームで戦えるはずだった騎馬戦は、なぜか自分から違うチームに入って叶わなかった。

なぜそんなことになったのか。

その理由よりも、今近くに居られないことがただただ苦痛だった。

「…えーと。カネキな、渡我とチーム組みたかったって言ってたぜ？次は個人戦だし、まだ目指せるんじゃない？ワンツーフイニッシュ。」

骨抜の必死のフオローも渡我には届かない。

先程までの禍々しいオーラも消え、骨抜の眼前にいるのは、ただ悲しむ年頃の女の子。そんな恋する乙女を救えるのは、ヒーローではなく、白馬の王子様か女友達と相場は決まっている。

「被身子ーッ(飯行こー)！」

あたふたと慌てる骨抜を見かねたのか、いつの間にか隣に来ていた拳藤らに連れられて渡我は食堂の方へと連れられていった。

(ここの時、女子には敵わねえって思うよなア。)

骨抜はその様子を見ながら、溜息を吐きつつ笑った。

「手抜くな。」

相澤の第一声はそれだった。

いつかと同じ応接室で、

いつかと同じ位置に座って、

いつか金木を激励したその口で、相澤はそう言った。

正直、金木には意味がわからなかった。

そんな内心の困惑が顔に出ているのだろうか。

相澤は溜息を吐きながら、言葉が続ける。

「自覚がないのが一番問題だが、お前は無意識に手を抜いてる。」

「そんな…僕は…」

「〃本気でやってる〃か？障害物競走で最後の最後に限界突破オーバーフローを解いたのは何故だ？

さっきの騎馬戦で1000万ポイントを狙わなかったのは何故だ？」

限界突破オーバーフローは自分が無理に使うなど釘を刺した。

騎馬戦では金木の作戦は見事にハマっていた。

それでも尚、相澤は言わなくてはならない。

「爆豪や轟相手なら必死に個性を使って対抗してるな。だが、緑谷相手だと本気で対抗する気がないように見える。騎馬戦の中盤、お前が3組の騎馬を下した後すぐ。緑谷の騎馬は狙える位置にあっただろ。轟チームと戦ってた緑谷は、お前を警戒すらしてなかった。お前のチームの個性なら十分狙えたはずだ。」

その通りだった。

自分からは緑谷の騎馬が見えていたし、射程圏内だったのも事実だ。

そして、そのことを指摘されるまで意識していなかった。

「1000万ポイントを持っていたのが爆豪だったら？轟だったら？」

自分より上だと認めている人が相手だったら。

「お前が真面目なのは分かっている。意図的に手を抜いてないのみな。だが、お前のそれは相手を傷つける優しさだ。緑谷が知れば俺と同じことを言うだろう。」

「まじめにやれ。」

心がざわついた。

自分が知らず知らず緑谷を侮ってしまっていたこと。

相澤に自分の無自覚の手加減を指摘されたこと。

雄英体育祭に対する自分の覚悟と思いの軽さ。

ひいてはヒーローになることへの覚悟の軽さ。

そんなものがぐちゃぐちゃになって金木の頭の中で渦を巻く。

そしてその渦の中心から、相澤とは違う知らない人の声で、告げられる。

まじめにやれ。と。

なぜだか濃密な死の匂いを感じさせる言葉。

担任教師からのお説教とは天と地ほども離れた匂い。

限界突破オーバーブレイクを使った後のような激しい動悸に見舞われながら、金木は応接室を後にした。

呼吸が荒い。

苦しい。

金木の意思に反して、思考は加速する。

次の競技は？

例年最終競技は個人戦だ。

試合相手は？

騎馬戦上位4チームの誰か。

誰が相手でも戦えるようにしないと。

そういえばトガさんはどうなった？

トガさんやデク相手でも手を抜かないようにしないと。

手を抜かないってどうすればいい？

赫子を全力で振るえば殺してしまいかねない。

ならどうすればいい？

どこまでやればいい？

人が死なない範囲の全力？

なぜどこまでやる必要がある？

ヒーローになるため？

相手を対等だと認めるため？

何のためにヒーローになる？

たかが体育祭でそこまでの覚悟が必要か？

答えのない問いと思考。

それと並列して選手との試合のシミュレーション。

金木の脳内では、それが絶え間なく行われる。

まるで自分が死なないために思考するように。

まるで凶悪なヴィランを前にした時のように。

——まるで父と仰いだ師と命のやり取りをした時のように。

金木が応接室を後にした頃、グラウンドでは次の試合の組み合わせを決めるくじ引きが始まっていた。

「それじゃあ組み合わせ決めにくじ引きしちゃうわよ。組が決まったらレクリエーションを挟んで開始になります。んじゃ、1位チームから順に…」

だが、進行していたミッドナイトの言葉を尾白が遮る。

「あの…すみません。」

「俺、辞退します。」

尾白の言葉に選手たちは一様に騒ついた。

ヒーロー志望の卵たちにとってプロに見てもらえるこの機会は重要である。

それでも、彼の意味は変わらない。

曰く、記憶がないと。自覚のないまま本戦に進めないと。

「俺が嫌なんだ。」

そして、その声にB組の庄田も同調する。

「僕も同様の理由から棄権したい！」

「そういう青臭い話はさア…好み!!!庄田、尾白の棄権を認めます！」

「つてことで繰り上がりは5位の爆豪チーム。…所持ポイント上位2名!爆豪と瀬呂が

本戦出場…16名でくじ引きよ!」

ミッドナイトの言葉に、はしやぐ瀬呂の横で、爆豪は歯軋りで返した。

緑谷は心配そうにチラリと爆豪を見るが、俯いたままで表情は窺い知れない。

「ミッドナイト先生、金木さんがいませんわ。」

『あ！金木はイレイザーヘッドと個人面談中だ！あいつ抜きでよろしく！』
くじを引き終わった八百万の声に応えたのはプレゼント・マイクだった。

“金木”の名前に爆豪が俯いたままピクリと反応した。

が、何を言うでもなく、くじ引きは残りの15名で行われる。

(カネキ…何かあったのかな…?)

金木の不在、爆豪へ心配、そして先程打ち明けられた轟の過去…。

緑谷の心にクラスメイトへの不安が芽生える。

だが、そんなことは関係ないとばかりにくじ引きは進み、

そして、組み合わせが決まった。

左から

金木・心操・渡我・塩崎・飯田・轟・緑谷・発目

骨抜・瀬呂・爆豪・黒色・麗日・常闇・八百万・上鳴

と表示されている。

(カネキの相手…あの人か。僕の相手は…発目さん！)

誰が相手だろうと。

どんな過去を抱えていようと。

自分が描くビジョン、憧れの人に近づいたためにも負けるわけにはいかない。
緑谷は決意を新たに拳を握りしめる。

「ケンクーン！」

グラウンドでレクリエーションの競技が行われている頃、渡我はようやく金木を発見した。

A組の教室で席についたまま目を閉じていた金木は、渡我の声で目を開ける。

「こんなところにいたんですか！もう組み合わせ決まっちゃいましたよ！」

「ごめん。組み合わせはさっき見てきたよ。」

顔を見ず、笑って応える金木に渡我は首を傾げる。

「…なんかありました？」

「いや…何も無いよ。次の試合のこと考えてただけ。」

渡我の鋭い問いに対して、金木は顎を掻きながら微笑んで応える。

「ケンくんの相手！あの隈の人ですね！やっちゃってください！」

「うん…。あ、そういえばワンツーファイニッシュでできなくなっちゃったね。この組み合わせだとお互い初戦に勝つても次の試合で当たっちゃう。」

「そうなんですよねエ。まあでもケンくんと戦えるのは楽しみです！」

「トガさんの相手は塩崎さんか。大変だろうけど頑張つてね。」

「そういえば茨ちゃん…ケンくんとチーム組んでたんでしたねエ…。まあそんなことより、隈の人についてですが…」

渡我なりの心操の個性への考察。

B組の女子たちと話したこと。

お昼に食べたご飯のこと。

今レクリエーションで行われている競技について。

渡我の話は尽きることなく、楽しそうに語られる。

すつかりいつもの調子に戻った渡我の様子に微笑みながら、金木は相槌をうつ。

しかし、話を聞きながら、金木の脳内では意思とは別に心操への対策が練られていく。

「ケンくんっ。戦う時は全力でやりましょうねエ！」

そんな金木に、渡我は満開の笑顔を向ける。

ふと肩の力が抜けるのを感じた。

そうだ。

簡単なことだ。

誰が相手でも、余計なことなど考えずに、全力でぶつかればいいだけだ。

渡我との訓練でも、勝ちもあれば負けもあった。

そうして2人で強くなってきたのだ。

金木は微笑みながら「うん。」とだけ短く返す。

楽しそうに笑う渡我を見ながら金木は思う。

ああ、自分は今救われている。

自分が導くはずだった渡我は、今自分を導いてくれている。

上も下もない。

同じ、人と人だからこそ、救い救われて生きればいい。

勝利も敗北も糧にすればいい。

だからこそ。

心操くんには圧倒的な敗北をプレゼントしよう。

トガさんのためにも
心操くんのためにも。

心折

『一回戦!!王様とか擲^や擲^ゆされてっけど、今んとこ2位ばつか!ヒーロー科、金木研!!』

『対するはア…ごめん、まだ目立つ活躍なし!普通科、心操人使!!』

『ルールは簡単!相手を場外に落とすか行動不能にする、あとは「まいった」とか言わせ
ても勝ち!リカバリーガールが待機してっから道徳倫理は一旦捨ておけ!!だがまあ命
に関わるよーなのはアウト!』

『そんじゃ…早速始めよか!レディイイイイ…』

『START!!』

プレゼント・マイクの大音量の声に、会場は俄^{にわか}に盛り上がる。

視線は当然、セメントスが作った特設リングに立つ2人に向けられている。

スタートを告げる声にも、会場の声にも耳を傾けることなく、

2人はお互いだけを見る。

「なあ。2位、すげえよな。王様とか!羨ましい限りだよ。」

「……。」

「なんとか言ってみろよ。王様らしく威厳に満ちたセリフとかよー！」

「……。」

「そーいやトガとかいうあの女とワンツーフィニッシュ狙ってんだっけ？ いいよな！個性に恵まれてるヤツは！俺らが必死に戦ってる中、彼女とイチャついてて2位だもんな！」

「……。」

「……っ！ ああ！ そうだ、まずは謝らないとな！！ さっきの騎馬戦、彼女奪^とちまつて悪かったな！ 騎馬にするだけだから誰でも良かったんだけど。」

「……。」

「なんとか言えよオイ!!! 彼女奪^とられて何も言えねえのか!？」

「……。」

「なんか喋ってんな。」

会場では、スタートの合図があつたにも関わらず、その場を動かない2人に対して、観

客が騒つき始めていた。

A組の生徒たちも金木を怪訝な目で見ている。

「ウチらの知ってる金木なら速攻かけて押し出すなり、組み伏せるなりしそうなのに。」

「カネキ…心操くんのこと警戒してる、とか？」

「…あいつの問いかけに応えたら操られるんだ。一応さつき金木に忠告しようとしたん

だけど、〃大丈夫だから〃って。」

「だから心操ってやつ、あんな喋ってんのか！でも金木全部無視してね？大丈夫じゃん

！」

「けど、これ印象悪くない？ウチらのこと値踏みしてるプロの目線のこと考えたらさつ

さとケリつけた方が良いと思うけど。」

そんな心配をよそに、金木は一步も動かない。

心操ぼりぞうくんがどんな罵詈雑言を浴びせても、眉ひとつ動かさない。

「つくそ！あのトガとかいう女に俺の個性聞いたのか？ずりいよなア！結託してんのかよ！上位2人で手組んで普通科の雑魚相手に対策とか恥ずかしくねえのか？」

「……。」

何度目か分からない心操からの問いかけに、無言のままようやく金木が動いた。スツと右腕を上げ、指をパキリと鳴らす。

ただそれだけの動きに、心操はピクリと体を揺らす。

一挙手一投足を見逃すまいと注視する心操の目に、赤い点が映った。

金木の左眼が赤く染まった瞬間、ゾゾと赫子が現れる。

心操の額に大粒の汗が流れる。

金木は表情も変えずに、その赫子を叩きつける。

ドガツと鈍い音をたてながら、リング中央に叩きつけられた赫子は地面を穿ち、なお

もガリガリと地面を削る。

何度も金木に声を荒げていた心操も、展開のない試合に野次を飛ばしていた観客たち

も、ピタリと口を噤つぶんでその様子をただ見ていた。

赫子は、そのまま心操を攻撃することなく、金木の腰へと戻されていく。

「……っハッ！手加減してるつもりかっ!？」

あまりの悔しさに、心操は俯いて叫んだ。

その声に金木は応えない。

心操自身、応えることはないと分かって声をかけた。

それでも、自分にできることは声をかけ続けるだけ。

そう思い直して、金木を見る。

そこに金木はいなかった。

「はっ。」

個性『洗脳』を発動するための声ではなく、心操から漏れた純粹な疑問の声。

しかしそれは、音になっていなかった。

心操の口が、背後から金木の手で覆われていたからだだった。

「なんで目を離したの？」

金木は抑揚のない声で呟く。

「自分より強い人相手に、なんで目を切れる？」

金木は右手で、がちちりと心操の口を押しえながら続ける。

「君は弱いね。他人の個性が羨ましいだとか、そんなこと言えるレベルにいないよ。」

「~~~~っ!!!」

暴れる心操を押しさえつけながら、金木は心操の正面にまわる。

赫眼も治まり、色のない目をしたまま金木は唇に指を一本たてて告げる。

「おい、動くなよ。まだ喋ってる。」

そんな金木を睨む心操の表情に、先程までの気怠げな余裕はなかった。

片手で正面から口を塞がれている、ただそれだけなのに。

その片手すら振り解くことができない。

「凶星だった？」

「精神干渉の個性だから何？相澤先生は抹消の個性だけど肉弾戦は僕以上に強いよ？君がさつき洗脳したトガさんも昔は僕より強かったよ？」

淡々と告げる金木の腕を渾身の力で振り払い、心操は叫ぶ。

「つしようがねえだろ!!こんな個性でもヒーローになりたいって思っちゃまったんだから!!入試は実技で落ちた!あんな試験で篩ふるいかけられたらどうしろって言うんだよ!」

金木はそれに応えず、抉れた地面を見つめる。

「こんな威力の攻撃でできるお前には分かんねえだろ!?!こんな個性持ちちゃまったせいで俺はスタートから出遅れた!それを僻むのもダメだつうなら何しろってんだよ!!」

「……。」

「なあ!!答えろよ、オ……!っゴホッ」

尚も喋り続ける心操に向けて、金木は赫子で砂塵を巻き上げる。

そして、ヒタヒタとゆっくり歩いて近づいていく。

「…君もヒーローになりたいんだよね？」

そしてゆっくりと語りかける。

咳き込んで声が出せない心操に向けて。

「身体鍛えるなり、武術習うなり、何でも方法あったと思うけど。」

「こんな個性だから…そうやって他人を羨んでたら誰かが助けてくれると思つた？」

「君は助けられる側じゃなくて助ける側になりたいんじゃないの？」

「君が弱いことと、君の個性は関係ないよ。」

ポツリ、ポツリと紡がれるその言葉は、どんな暴力よりも鋭利に心操の心を傷つけていく。

気管に入った異物のせいか、

はたまた悔しさのせいか、

心操の瞳には涙が滲む。

「ねえ。ヒーローになりたいなら、なんで努力しなかったの？」

心が折れた音がした。

「…まいました。」

地面に手をついたまま、心操は消え入りそうな声でそう言った。

その声にプレゼント・マイクが実況席から大声を張り上げて金木の勝鬨をあげる。観客からまばらな拍手と金木を称える声上がる。

だが、それも心操には届かない。

金木が自分に投げた言葉は全て真理だった。

自分が金木にぶつけた言葉と、どちらが酷いだろう。

ふと、項垂れた自分の頭の上に影がかかるのを感じた。

「勘違いしないでほしい。」

見上げると、そこには先程まで死ぬほど冷酷な顔をしていた男が悲しそうな顔をしていて。

その男は自分に手を差し伸べていて。

「君はヒーローになれるよ。」

悲しさと優しさがちやうど混ざり合ったような微笑みを浮かべて、言った。

自分よりも痛そうに左胸のジャージを握るその顔が酷く印象的だった。

『リング修復のため5分休憩なー!!!トイレ行きたいヤツは今のうちに行つとけー!』

2人が退場した後、リング修復の時間がとられた。

そのアナウンスをしていたプレゼント・マイクの横で、のそりと相澤が動く。

「ん?トイレ?連れションする?」

「しない。」

スパツと即答した相澤は、そのまま部屋を後にし、選手控え室とリングを繋ぐ廊下へと向かう。

ややあつて、トボトボと歩く心操を見つけた。

「心操。」

「…なんですか?」

「金木が相手で良かったな。」

相澤はそれだけ伝えると、来た道を戻り始める。

担当している生徒を鼻肩していると捉えられても構わない。

それでも、金木のしたことは親切に他ならない。

余計な親切はヒーローにとって本懐だ。

それを認めてやるのも大人の努めだと思う。

会場で飛び交う野次には、金木を非難する声も少なくない。

やれもつと早く決着つけろ、だの、甚いたぶ振るな、だの。

見る目のない大人が多くて困る。

金木にも、心操にも、真つ直ぐ伸びてほしい。

なればこそ、大人は厳しいことも言わねばならないし、甘さも持っていなければなら
ない。

…全く持って合理性に欠けるがな。

「ケンくんっ！かっこよかったです!!」

控え室に戻った金木を迎えたのは、いつもと変わらぬ渡我の元気な声だった。

嬉しそうに試合の様子を語る渡我を見ながら、金木は微笑む。

「もつとボコボコにしても良かったと思いますけど。」

「いや…殴るより、たぶんもつと酷いことしたよ。嫌われるだろうな、はは。」

「なんで精神攻撃で対決したんです？」

「んー。同じ土俵で戦いたかった、っていうのは建前で。…羨ましかったのかも。」
「あの限の人がですか？」

「心操さんの個性ならさ、きつとヴィランの更生にも役立つと思うんだよね。普通の人
も、ヒーローも、ヴィランも。誰でも救えるってすごいな、って。だから、こんなとこ
で腐ってるのがもったいなくて。」

「…やさしいですねエ。」

ニヤニヤと笑う渡我に「そろそろ次の試合始まるよ！」と照れ隠しをしつつ、金木は
真っ直ぐに渡我を見て言う。

「試合、がんばってね。勝ったら次は僕とだ。正々堂々、全力で戦おう。」

「はいっ！」